
君が壊れた世界で

新藤光太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君が壊れた世界で

【Z-コード】

Z1559T

【作者名】

新藤光太

【あらすじ】

僕の不用意な言葉で、彼女は狂ってしまった。

僕にとってはなんの意味もなく言ったそれは、彼女がおかしくなるのには充分過ぎたようだ。

優しかった彼女は、もういない。

暖かい笑みを浮かべていた彼女は、もういない。

そして、なにより。

僕の好きだった彼女は、もういないんだ。

狂狂クルクルと回り始めた歯車。

「 もう……もう止めてくれええええ ! !

「あはははは。分かつて、分かつて。私を試してるんだよね？
本当になんでもやるかどうかって」

それは、もう止められない。

エプリスタでも公開しているのを、じつでも公開してみました。

プロローグ（前書き）

若干、グロテスクな描写が入る予定です

プロローグ

昨夜未明、町外れの工場跡地で男女の死体が見つかりました。見つかったのは、真田恭史（18）。相崎楓（18）。

この二人の他にも、指名手配中の犯人一名。先週、強盗殺人を犯した犯人が一人、見つかりています。

相崎楓が持っていた凶器から、彼女が犯人を殺害したと思われます。どうですか、御陵さん。ミササギ 彼女が、最近多発していた容疑者連續殺人事件の犯人なんでしょうか？

え？ 分からない。なんでですか。状況証拠は揃っているではありますか。

不可解な点がある？ それはどういった場所ですか？

ええ、ええ。なるほど。確かにそれはありえない事ですね。

ある初夏のニュースより抜擢。

第1話 君と登校

「なんで人を殺したらいけないのかな？」

いつもの登校ルート。いつも横にいる彼女。いつもの朝。そしていつもの唐突な質問。

この問いに、僕が答えられるなんて彼女は思っていないだろう。それまで彼女とは逆方向にある涼しげに流れる川を見ていたが、視線を外して顔だけ横に向ける。

淡い栗色の髪を腰の近くまで伸ばしているが、いつもコロコロと変わる髪型はポニー・テールになっていた。猫のように大きな瞳に、桜の花弁のように薄いピンク色の唇。あまり活発的に動く方ではないので、肌の色は白い。

それが僕の幼なじみである、相崎楓。^{アイザキカエデ} 今年で18歳の高校生である。

「うーん、そうだなあ。やつぱり人が人を殺すのは、同族同士であまり気分の良いものじゃないからね」

こんな質問に答えなど持ち合わせていない。だから、なるべく当たり障りのない程度で返す。

しかし彼女は、頬をハムスターのよつに膨らませると、

「ちゃんと考えてよお。私はこれで悩んでるんだよ？ だって、虫とかなら、みんな平氣で踏んじゃうよね？ だったら、なんで人間は駄目なの？」

桜吹雪の中、なんで僕達はこんな物騒な話をしてるんだろうか。周りから白い目で見られている気がするが、それは勘違いではないだろう。

「ねえ、聞いてるの、恭史！」^{タカフミ}

「ああ、聞いてるよ。……どうせ、昨日の刑事ドラマに感化されたんでしょ？ あれ、熱血刑事が、最後には命の大切さを語るからね」

「あつ、バレた？ あはははは。凄いね～」

ポニー テールの髪型を揺らしながら、彼女は人の目など気にせず、に笑つた。

春の暖かい風が頬を撫でる。その気持ちよさに目を細めつつ、

横を歩いている楓を横目で盗み見る。

彼女も風に遊ばれている髪を片手で押さえつけながら、僕と同じようにしていた。

それからは互いに無言で細い砂利道を歩き続け、時折車道を走る車の音とすぐ横を流れている川の声を聞き続けていた。

この穏やかな時間。それがずっと續けばいいと心の底から願う。これを守るためなら、僕はなんでもするだろ？

砂利道が舗装され始め、道も広がり、さっきまでまばらだった人が段々増えてくる。もう少しで学校だ。僕は軽く伸びをしながら歩き、朝の陽光を全身に浴びる。とつても今更な行為だが、したいのだから仕方がない。

そんな事をしていると今まで黙つていた楓が、いきなり僕の目前に立ちはだかるように動いた。

「朝つて、なんか凄くのんびり出来るよね。風も気持ちいいし、陽の光も暖かいし」

「……要は、楓は今、眠いって事かな？」

「ありやりや。またバレちゃつた」

と言いつつ、彼女は右手で口元を隠しながら小さく欠伸をする。暖かいから眠くなる。まるで猫みたいだが、ここは黙つておく。校門を潜り抜け、僕達は学校へと足を踏み入れた。

朝練をしているサッカー部員の横を通り抜け、前方に見える生徒玄関を目指す。

「みんなは、朝から元気だよね。眠いのは私だけかな？」

目を擦りながら楓は汗を流している生徒を見つめていた。

「いや、楓だけじゃないよ。僕だって眠いさ。でも、ああやつて体を動かしていると、脳のスイッチでも切り替わるんじゃないかな。

……でも、授業中に寝てる人もいるけどね」

そんな他愛のない話をしていると、玄関にたどり着いた。

左端の方に三年生の下駄箱があるので、そこまで歩き、外靴を脱いで中靴と履き替えるために鉄製の靴箱を開ける。

と、その時。ドサドサッと音がした。もちろん、僕の箱からではない。

女子用の靴箱。僕から見て右にあるのだが、そこからしたのだ。

「うーん。まだあ……」

楓のうんざりした声が聞こえてくる。これは最早、朝の風景にさえなりつつある光景だ。

毎朝毎朝、彼女の靴箱には部活の勧誘チラシやら今ではちょっと古いラブレターなどが敷き詰められている。その全部を楓は断つているのだが、よくもまあ、諦めずに続けるよね。僕だったら、一回目で止めるのに。

と、いうか、もう三年生で、後三ヶ月もしたら引退なのに勧誘している部活は楓をどうしたいのだ。

モテモテ少女は、ぶつぶつ文句を言いながらも落ちた手紙を一枚一枚拾い上げ、あて先を確認。断るための言葉を探し始めた。

「楓はモテるねー。僕なんかは足元にも及ばないよ」

これもいつもの言葉。朝が来るたびに、僕はこれを言っている気がする。

楓は僕の言葉に、水をパンパンに入れた水風船のように頬を膨らませると、

「むう……そんな事は言わないで欲しいかな。私だって、言いたくはないけど少しあは迷惑してるんだよ?」

少しあは、ね。完全に迷惑だと思つていない辺りが、実に彼女らしい。

楓はいくら自分に対してもメリットになるような事でも、それが相手からしたら精一杯努力した結果だったなら、ないがしろにするような性格じゃない。

だから部活勧誘やラブレターにも一々返事をしているし、断りの

言葉もなるべく相手を傷つけないように選んでいるらしい。

そんな彼女の性格が異性どころか同姓にも人気があり、僕としてはあまり面白くないのが本音だ。

だからこそ、さつきのセリフを毎日のように言ってしまうては、今みたいに少しそうな声の楓にたしなめられるのだ。

「あー、ごめん」

いつものように軽く謝る。楓はこれでも別に気にしないだらう。だって、毎日の出来事なのだから許してくれるだらう。

それを証明するかのように、楓は花が開くようにゆっくりと微笑み、

「いいよ、別に。まあ、早く教室に行こう。遅れちゃうよ」

「そうだな。もうすぐ時間だ」

僕はポケットから携帯を取り出し、サブディスプレイに時間を表示させながら言った。

それから僕達は急ぎ足で自分達の教室に向かう人々に混じり、同じような速度で歩き出す。

教室に着くと、もう既にほとんどの人が集まつていて、それぞれのグループで話し合っていた。

しかし僕の後ろにいる楓が一歩教室の内側に踏み込むと、みんな一斉にこちらを振り向く。

別に僕が注目されているわけではない。そんな事は分かっている。みんなは楓を見ているのだ。

彼女は学校内で人気者だ。それこそ、ラブコメとかの小説でよくある、『彼女にしたい女の子ランキング』とかあつたら、『冗談抜きでぶつちぎりのトップに輝く事だらう。』

「みんなおはよう」

楓がにこやかに挨拶すると、クラスメイトは満面の笑みで挨拶を返す。

そして僕が入ると、幼なじみの時ほどではないが、それなりに挨拶をしてくれた。

「」の差に少しばかりの虚しさを感じながらも、とりあえず自分の席……窓際最後尾の絶好の位置に移動する。

それから鞄の中に詰め込んでいた教科書を取り出し、一時間目に使う分だけを残して他のを机の中に仕舞つていると、廊下側の一番前の席から楓が歩いてくるのが見えた。

僕と楓の机は驚く程、正反対の位置にある。僕が窓際なら彼女は廊下側。僕が最後尾なら楓は最前列。

なにがどうなつてこうなつてしているのか。まあ、これは運なのだから仕方が無い。

文句を言うのなら、始業式早々席替えをした先生か。それともくじを作った学級委員長に言つべきだろ？

「うーん。やっぱり席が離れていると、寂しいね。私、恭史の近くがよかつたのに……」

……きゅん。

いや、冗談だけど。少しどキッとしたのは本當だ。

予鈴が鳴り、楓は自分の席に戻つていく。僕は揺れる彼女のポーラーテールを見ながら、静かに嘆息した。

僕もどつちかつていうとあいつの近くが良かつた。だつて、そうでもしないと、楓の近くに男が寄るわ寄るわ。あー畜生。

それを見ていると、少しだが不機嫌になる。これが嫉妬という醜い感情だと分かっていながらも、それを止める事は出来ないのだから仕方がない。

うん。分かってる。僕は彼女が好きなんだ。

楓がどう思つても、その感情は断ち切れない。

思えば、小さい頃から一緒にしてなにをするのも一緒だったのだ。こんな気持ちを伝えられるものじやない。

僕だつて最初はこの気持ちを否定していた。楓に対する愛情は、家族に対するものと同じものなんだと。そう自分に言い聞かせて、

高校生まで生きてきたのだ。

そう。中学生まではそつやつて自分を騙し続けていた。

だけど、楓は成長するに連れて、どんどんと綺麗になっていく。本当にこれがあの楓なのかと。何度も何度も目を擦っていた。

いつも近くにいるのに、いつも遠くにいる存在。

手を伸ばせば届く距離にいるのに。いくら手を伸ばしても届かない存在。

それが彼女だった。

一時は、彼女に追いつくために僕も頑張っていた。

サッカー部に入つて、活躍すれば近づけるのではないかと思い、毎日汗だくになつて練習をしていた。

そして、練習のおかけが、僕はレギュラーになつて中体連に出た事もある。

だけど、それでも彼女に近づく事は出来なくて。僕なんかがどんなに努力しても離れるばかりの距離。

僕には近づけない。そう思い知らされた。だけど、これでもまだ、諦められない。

諦めようとしても、頭が否定する。どうすればいいんだよ、本当に。

退屈な授業が終わり、昼休みがやつてきた。僕は母さんが作ってくれた弁当を鞄から取り出し、机の上に広げた。

しかしすぐには食べずに、しばしの間待つておく。

楓は両親がいないため、自分でいつも作つてきているのだが、今日はそれを忘れてしまつたようで今は購買にパンを買いに行つている。

自分の机に頬杖をつき、窓の外を眺めながら彼女が来るのを待つていると、他のクラスメイトの会話が耳に入つてくる。

「ねえ、知つてる？ 昨日この辺に殺人事件の犯人が逃げて来たんだって」

「うん。知つてる知つてる。そのせいで、いつも登校ルートに警察一杯いたよね」

「そうそう。怖いよねー。私凄く不安なんだけど……」

「ふーん。殺人犯ね。僕には余り関係ないかな。

いくらこの街に逃げて来たからって、僕が遭遇する確率なんて砂漠の中で小さな宝石を見つける事ぐらい低い数値だよね。

そんな事を考えながら空に浮かぶ、白い絵の具を垂らしたようにポツポツと浮かぶ雲を見上げる。

ゆっくりと動いていくそれは、とても和やかで平和だった。

この空のどこかに、そんな凶行を起こした人がいるとは、にわかには信じられない。

そんな事を考えていると、教室の後ろ扉から見覚えのある姿が片手に焼きそばパン、もう片方にはパックのジュースを握つてやってきた。

「ごめんごめん。恭史。待つた？」

「いーや。全く」

楓は二口二口笑いながら僕の前の席をくつつけて、そこに腰を下ろした。

「それじゃ、いただきまーす」

楓がパンの袋を破いて、焼きそばパンを少しづつ千切つて食べ始めた。

僕も弁当の蓋を開け、彼女の二口やかな笑みを見ながら中身を食べる。

窓から侵入してくる優しい風。とても暖かくて眠くなる。

睡魔が僕の頭の上を走り回り、寝てしまえと何度も囁いてくる。

それに従い、段々と思考能力が停止してきた。瞼が勝手に閉じようとする。

どれだけ目を見開くために力を入れても、睡魔は瞼の辺りだけ重力を何倍にもしたらしい。

重たい。

目の前で美味しそうにパンを食べている楓の姿がドンドンぼやけてくる。

もう抗えないと思い、目に力を入れるのを止めた。
しかし、眠るまでは至れない。
なぜなら。

「おーい、恭史。起きてる？ 寝たら黙目だよ～？」
楓が僕の方に身を乗り出して何度も頬を叩いたり、目の前で手を振っているのが原因だ。

彼女にこんな事をされたら目を覚ますに決まっている。
むしろ起きない方がどうかしてるね。眠り姫も、王子様のキスな
しで飛び起きた後、楓に仕えるだろう。

だって、この顔が目と鼻の先にあるんだよ。驚きとドキドキのあ
まり、心臓が口から飛び出してしまいそうだ。

僕は必死に目をこすり、微かに残っていた睡魔を銀河の彼方に放
り投げる。

「大丈夫だよ。起きてる起きてる」

僕はそう言つたが、彼女はなんだか訝しんでるような視線を僕に
向けると、

「本当に？ なんだか嘘っぽいな～」

と、イタズラを思いついた子供のように笑つた。僕はその笑顔を
直視しないように顔をそらした。

別に嘘ではないのでなにも心配する事はないのだが、この表情を
している楓は簡単に嘘を見抜いてしまうのだ。

まあ、もうちよつとで眠りそつだつたのは本当だけどね。

「ご飯を食べ終わり、残りの昼休みを雑談しながら潰す。

話す内容がなくなつてきた所で、僕はさつき小耳に挟んだ話題を
提供してみた。

「なあ、楓。この街に殺人犯が逃げてきたって話、知ってる？」

それまで楽しそうに微笑んでいた彼女は、驚いたように目を見開くと、

「え？ そななの？ そななの、ニュースでやつてないよね？ 警察の人も通学路では見かけなかつたし……普通、そなな怖い人が逃げてきたら、お巡りさんとかが街中をパトロールしてるよね？」

と、疑問に思った事を次々に言葉にする。

楓は意外とこういう話が好きだ。

読んでいる小説や漫画はほとんど推理・ミステリー物だし、実際に起きた事件で謎があると、時々自分の考えを僕に話してくれる事もある。

僕もこういった話はどっちかというと好きな方だし、彼女の推理を聞くのも楽しい。

……ほとんど物理的な現象を無視した考えを言つてくるからね、こいつは。

なんだっけな。何ヶ月か前に推理小説でよくあるような密室殺人がどつかの街で起こつたんだ。

その時の彼女の考察はこうだ。

『犯人は壁をすり抜けたんだよ！』

こんな事を、胸を張つて堂々と、しかもクラスの中で彼女は言い放つた。もちろん、常識人である僕はそれに反論したが、楓の、『じゃあ、恭史タカヒロが私にも納得出来るような推理を披露してよ』

という言葉になにも言い返せなくなつた。

いくら推理物が好きだと言つても、現実世界で起きた事件を解決するのはかなり難しいに決まつてゐる。

大体、ああいうもので養われる知識と言つたら、専門用語か血の飛び方、身長を推測するなど。普通に警察でも簡単に出来そうなものばかりだ。

いや、だからと言つて推理小説を読むなという意味ではない。むしろ僕はドンドン人に薦めて行きたい。

専門知識なんてなんの役に立つんだよとか言わずに、非日常を求

めている人は是非とも読んだほうがいいと思つ。

推理小説つて、殺人を題材にしているのが多いから、いつ自分の身近で起きてもなんら不思議ではない。事実、僕も昔、それに遭遇した事があるし、悲惨な状況を見た時もある。

幼かつた自分には刺激が強すぎたせいで、脳が無意識の内にロックをかけているのかは分からぬが、記憶が不明瞭なんだけど……あの時に感じた感情は絶対に忘れない。

と、少し話が脱線したけど、推理系の小説やマンガなどで起つていることは、自分の知らない場所でも頻繁に起つてている。違うのは、創作のように緻密なアリバイトリックや密室を暴く可能な探偵がない事くらいだ。

まあ、犯行に使われたであろうトリックやらなんやらは、模倣犯が出たら困るだろうからニュースとかには報道規制がかかっているだろうけどね。

「恭史、大丈夫？ なにか考え方？ 悩んでるんなら、私に相談してくれてもいいからね」

「ん、ありがとう。なんでもないよ。それよりも、喉が渴いたな。ちょっと買つてくるから待つてて」

僕は立ち上がり、一階にある自動販売機のあるロビーへと向かう。一階にある自動販売機の前に行くと、一台しかない機械の前に先客がいた。

「あつ、東条さん。こんにちは」

「ん？ おおー、真田くんじゃないか。こんにちは、こんちはー！ 元氣かい？」

「うん、元氣だよ。東条さんも相変わらずだね」

東条由実。トウジョウユコミ 今年は僕と楓とはクラスが違うが、一年、二年と、一年連續で同じクラスだった人だ。ちなみに中学では三年間一緒にたりする。

ショートカットにしている黒い髪が彼女がどれだけ元気なのかを

表していて、大きな瞳をいつも笑顔で細めている、とても元気がある女の子。

陸上部に所属しているので、小さいながらもひきしまった体だ。

「あれあれー？ なにか少しだけ元気ないんじゃないのかな？ 大丈夫？ 大丈夫？」

「あはは、なに言つてんの。僕は今日も元気だ」

「うーん？ まあ、真田くんがそう言つのなら、そうなんだろうね！ ジャあ、私はこれで。じゃあね、バハハーハーイ」

大きく手を振つて教室がある一階に上つていく東条さん。ハイテンションショーンすぎて着いていけない時があるが、今日はいつもの一割増しくらいの元気だ。

なにか良いことでもあつたのだろうか。

「あつ、楓待たせるんだ」

考え方をしている場合じゃなかつた。早くジュース買つて帰ろつと。

パックのオレンジジュース片手に教室に戻ると、楓はさつきまでいた席にはいなく、変わりに女子グループの輪の中心にいた。

しかし、談笑している気配でない。なにか、全員が深刻な顔をして楓に話しかけている。

僕の悪口でも言つているのかと少々、勘操つたが、そこはやはり僕の勘だ。

あてにならないものを上げると言われたら、最近の天気予報をぶつちぎつてトップに君臨するほど僕の勘は当たらないのだ。

別に女子から嫌われているわけではないので、僕はそのグループに近づいた。

「なにか重大な話でもしてるの？」

僕がもてる限りの営業スマイルを顔中に貼り付けて話しかけると、一番近くにいた女子が返答してくれる。

「あつ、真田くん。ほら、この近くに殺人犯が逃げて来ただじゃない？　ニュースとかに取り上げられた被害者の写真なんだけど、全員可愛い娘なんだ。それで、この地域では相崎さんが一番危ないよ、て言つてた所だよ」

なるほど、年下で可愛い娘が好きなんだなその犯人さんは。いや、僕らより年上だと決まつたわけじゃないけど。

だけど、その犯人は狂つてる。

そんな奴に狙われて命を落とした未来ある女の子が可哀想じゃないか。

人を殺していいのは、殺される覚悟があるものだけだ。

なんかの本の受け売り。とくに意味はない。知識を晒したかっただけなんです。

「それでね、真田くん。いつも相崎さんと一緒に帰つてるじゃない？　もし変な人に会つたら、相崎さんを護れるの？」

……護れません。

僕は犯人に瞬殺されてグッバイ。あの世で楓を迎える準備でもじてるさ。そんなの嫌だけど。

こんな僕でも大切な人の身代わりになるくらいは出来る。あつ、でも。どつちにしても僕は死ぬじやん。

「うーん。善処します」

「善処するだけじゃ駄目だよ！男の子なんだから」

男というだけで、身代わりにならなきや駄目ですかね？

男女差別だ。これは裁判にいくべきだ。

男女差別についての法律を脳みそから絞り出し、これで裁判に勝てるだろうかいや勝てないという結論に達したところで、輪の中心にいる楓が声を上げた。

「駄目だよ。恭史が死んじゃつたら、私、嫌だからね！　だから危ない事はしなくていいよ」

「うーむ、そうか。

楓は僕が死んだら悲しむか。だから危ないことはしないでいいん

だな。

よし、分かつた。

「絶対に助けてあげる！」

『危ないことはしなくていいって言つてるのに！？』

なぜかクラス全員からのツツコミを受けた。こんな時だけ妙に息がピッタリな人達だ。

だつて、ほら。入るなつて看板があると入りたくなるじやん。逆に、入つていいよつて言われたら全く興味失うじやない。今の感覚もあれに近いね。

クラス全員からのツツコミという初体験をしてから時は経ち、今は放課後になつていた。

まだ春なので陽が落ちるのは早い。

赤い光と暗闇が支配する人気がない教室。

そんな場所に僕は一人で窓際に立つていた。

理由は簡単。楓に残つてゐるよう言われたからだ。……ハイ、嘘です。

本当の理由は、ただ単に六時間目の授業から、ついさつきまで寝ていたからである。

誰か一人ぐらい僕を起こしてくれてもいいのだが、それは楓によつて阻まれていたのだろう。

あいつは、就寝中の僕をあまり起こしたくないらしい。下手をすれば朝の時間がない時にまで寝顔を見ているような奴だ。で、なんでさつさと帰らずに窓際でボーッとしているのかといふと、後輩に呼び出された楓をここから眺めているわけだ。

この教室から下を窺えば、校舎裏がまんべんなく見下ろせる。近くに植えられている桜の木から離れた薄いピンク色の花弁が、普段は砂利だけの道に豪華な絨毯のようにならぶ。

そんなピンクの絨毯の上に、一人が立つていた。

一人は僕のクラスの女子がカツコイイなどと黄色い声を出していた一年生の男の子。

そしてもう一人が人気少女でモテモテ少女でほぼ万能少女である楓だ。

ここからではなにを喋っているのかサッパリ分からないが、それでも楓が首を横に振つているのが見える。心の中で安心の息を吐きつつ、後輩くんには追悼の念を送つておく。

そのままボーッと教室に残つていると、廊下の方から足音が聞こえてくる。

楓なのかと思い、そっちの方に視線だけを向ける。しかし、教室の扉の隙間から顔を出したのは僕が待つている彼女ではなく、黒いショートカットの女子、東条さんだつた。

「あれれ？ 真田くんかい？ こんな時間になにしてるの、なーにしてツンの」

「ちょっと寝過ぎしちゃつて。東条さんは？」

「私はね、この近くで探しモノをしていたら、学校に忘れ物をしたのを思い出したのよつ。で、取りに来たら人の気配がしたから様子を見に来たのだ。ふふふどうだい真田くんつ、私には人の気配がわかるのだよつ。すごくないかい？」

「そりなんだ」

駄目だ。寝起きだからなのか、東条さんのハイテンションに着いていけない。

このまま会話をしていても疲れるだけなので、彼女には帰つてもらうのが一番だ。

「東条さん」

「なにかね？」

「……今日はなんだかテンション高いね」

帰つてもらうための口実が思い浮かばなかつた。だから、また自分が疲れるためにするような会話の種をまいてしまつた。

東条さんは今まで以上に目を輝かせ、顔全体に誰でもつられて笑

いそうになる笑顔を浮かべた。

「おお～、分かるかい。さすが真田くんだ。私が見込んだ男だけはあるね、うん。実はね、私が小さい時から探していたモノがようやく見つかったのだよ！だからもう、嬉しくて嬉しくて。にやはは」

（

「それは良かった

帰りたいです。

「でもでもでもー！私の探しモノはまだまだあるのだ！だから、また探しに行かなくちゃ。じゃあね、真田くん！お元氣でー！」

「あっ、うん。さいなら～」

嵐のようにやってきては嵐のように去っていく人だ。
あそこまでテンション高いと、人生楽しいんだろうな。

「うーん？」

楓がやって来ない。先に帰ってしまったのだろうか。

別に待つてと言っていたわけではないので、楓が帰路に就いていても僕にはなんも文句は言えないけどね。

さて、どうしようかな。帰っちゃおうかな。このまま夕方の教室にいても、ドキドキワクワクイベントが発生するなんて思えないし。
「帰つて寝よ～」

机の横についているフックのよななものに提げていたカバンを取り、肩にかける。

そこから歩いて生徒玄関に。

中靴を外靴に履き替え、外に出た。

朱色の光が玄関前のアスファルトを赤く染めている。春独特の強く生暖かい風が頬を撫でてくる。

制服の隙間から侵入してきては、好き勝手に暴れて出て行く。まるで東条さんみたいだ。

朝に楓と歩いた道を引き返していく。その時には無かつたものが、今の時間には出没していた。

片側一車線の道路。中央分離帯を挟んだ向こう側には、パトカー

が何台も通り過ぎていく。

なにがあつたのかは明白だつた。

昼にしたクラスメイトとの会話を思い出す。

『連續殺人犯がこの街に逃げてきてるんだって』

その搜索を、あのパンダカーはしているのだらう。

森羅万象におけるなにものも寄せ付けない神祕さに憧れ、神様を信じるかどうかしつこく尋ねてくる宣教師はまさに黒いチヨークのようだが、一石二鳥のように見えたそれは、実は捕らぬタヌキの皮算用的なことなんて誰も信じないような、それでも僕はなにがなんだが分からなくなる前に漁夫の利を狙つて失敗してしまつた近所のA君が殺し屋になつていた。

そんなんの意味もないし、使い方が間違えまくつて、ただの言葉の羅列を脳内でキャッチアンドリリースしていたら、あら不思議。

いつの間にかパトカーがたくさん集まつて、いる場所に僕は来ていた。

人が集まつて、いるので、少しずつ搔き分けながら最前列に行く。

「おい、君！ ここは立ち入り禁止だ！」

「あっ、すいません」

今、僕がいる場所は背の高いビルとビルの間に、ある薄暗く、細長い道の入り口。

警察の人がキープアウトと英語で書かれて、いる黄色いテープを入り口に繋げていた。

「ここにがつたんですか？」

首を伸ばして奥の警官が一杯集まつて、いる場所を見ようとしたのだが、巡査さんにそれを阻まれる。

「一般人に教えることはない。ほら、早く帰つて帰つて」

「はあ……」

視界は全く効かないが、その代わりに鼻がよく通る。

向こうの方から風に乗つて流されてきた匂いが、僕の嗅覚を刺激した。

それは鉄のような匂いだつた。

それは、怪我をすると毎回、嗅ぐことになるあの匂いだつた。

「……血？」

脳がその匂いの元凶を今までの経験から導き出したと同時に、体が一斉に僕の意思とは無関係に震え始める。

「……ハツ……ハツ」

呼吸が苦しい。

全速力で三百メートルを走つた以上に心臓が早鐘を打ち、短い呼吸がさらに短くなる。

「お、おい。大丈夫か？」

血の匂い。

「おい、君！」

血の匂い血の匂い血の匂い血の匂い。

「大丈夫か！？」

過去の思い出したくもない記憶が、この鉄の塊みたいな臭いに呼び起こされる。

「……ハツ……ハツ……ハツ」

「誰か来てくれ！ 男の子の様子がおかしい！」

足から力が抜け、人形のように体が崩れ落ちる。地面に四つん這いになりながら、目の前に広がる舗装された道路を見た。

しかし、瞳に映つているのは無感情なアスファルトではなく、赤い、紅い、朱い思い出。

辺り一面に広がる赤い海。床一面を覆い隠すほどのグロテスクな島。

今以上に鼻を刺激してくる、理性が崩壊してしまうほどの悪臭。

誰かのすすり泣く声。今にも消え入りそうな、風が吹いただけで

飛ばされそうな、危うさを含んだそれは……。

「……嫌だ」

思い出したくない。

今ここでやつと忘れかけていた記憶を思い出せば、僕は絶対にこの日常に戻れない。

「大丈夫か!? 待つてろ、今すぐ病院に連れて行くから!」

「……大丈夫です。……ちょっと持病の、『いきなり目眩病』の发作おこしただけですから」

「いや、そんな病名聞いたことがない。いいから、病院に行つた方がいい」

「大丈夫です!」

僕はそう叫ぶと、思った通りに動かない体に鞭打ち、その場から走り去つた。

蘇りかけた記憶を吹き飛ばそと、全速力で街を駆ける。通行人にぶつかつても謝らず、ただただ、あれが脳内で再生されないようにするだけで精一杯だった。

街から、舗装されていない細い道へと出た。通行人なんていやしない。

「……ハア……ハア」

息切れが起き、さつきの時以上に心臓が高鳴る。

「あんな場所に行くんじゃなかつた」

好奇心に負けたせいか。

パトカーがたくさん車道を走つていて、それらが人が集まっている近くのビルを目指している事に気付いてしまつてからは、行つてみたいという気持ちが大きくなつて、変な言葉を考えながら野次馬根性を發揮したのがまずかつた。

それと同じくらい的好奇心もあつたのだが……。

「僕はバカか……」

学校で聞いたじやないか。連續殺人犯がこの街に来ているつて。

集団下校にならなかつたから、それはクラスメイトが流したテーマだと思っていた事はあるんだけど。

しかし、あんなに警察の車があつたんだ。

さつきのワードと警察という単語が合わさつたのなら、大体は想像がつくじやないか。

殺人が起きたんだ。

この街で。

無関係だと思っていた僕の近くで。無情に。非常に。異常に。狂つた一人の人間が、同族を殺すという最悪な罪を犯したんだ。

……そう言えば。

「殺された人は誰だつたんだろうか」

呼吸を整えながらゆっくりと砂利を踏みしめる。

通行人なんていない、街から僕の家がある田舎へと続くこの道。いつもなら横に楓がいて、もう少し楽な気分で歩けるのだが、今はいらない。

だけど、今は一人の方が良かつた。

さつき頭をよぎつた言葉。殺された人は誰なんだろう、というものが。

クラスメイトの話が本当なのなら、おそらくは可愛い女の子がその人生を閉ざされてしまったとしか思えない……。

だけど、可愛い娘なんて、こんな田舎にもいくらでもいる。

それに、なぜ犯人はこんな白昼堂々殺人を犯すなんて馬鹿げた行為に及んだんだ。

昼間に犯罪を起こせば、それだけ捕まるリスクも跳ね上がるというものだ。

明るいのだから目撃者だつているだろうし、ワードやなにかで顔を隠していくとしても身体的特徴くらいは当てられるだろう。

もしかして、それらリスクを楽しんでいる……とか？ よく快樂殺人者なんてものもいるんだ。

そんな趣向を持っている殺人犯がいてもおかしくはない。ギリギリの緊張感を味わいたいから、人目につく昼間を選んで行為に及んだ。考えられるかな。

「……なんで僕はこんな事を考えているんだろ?」「

探偵にでもなつたつもりか?

一般人は一般人らしく普通に暮らしていればいい。こんな事件は警察に任せておけばいいんだ。

それから数分歩いて、僕は家に帰った。親に帰宅を報告してから二階にある自分の部屋へ直行する。

制服を脱いでハンガーにかける。鞄を机の上に放り投げて、薄手のパークーとジー・パンという私服へと着替えた。

それから一階に戻り、居間に入る。母さんがソファに寝転んでテレビを観ていたので、僕もその近くの椅子に腰を下ろした。

煎餅バリバリお茶、ゴク、ゴク。と、専業主婦の楽しみを味わつている母がテレビジョンに顔を向けたまま、今しがた入ったニュースの話題を振つてくる。

「街の方で、殺人事件があつたらしいわね。あんた大丈夫? 結構、学校の近くじやなかつた?」

「うーん。僕は大丈夫だ。ちょっと殺人現場を見て別世界に行つちやつたけど

無理に平静を装つて軽い感じで言つてみた。しかし母にはそれが通じなかつたようだ。

「……無理するんじやないよ」

それでも、それ以上の事は言つてこない。

「僕が無理なんてするはずないよ。」コミが道端に捨てられてゐるのをみただけで、すぐさま110番に連絡する男の子だぜ

「そんな事で警察を呼ばないの」

そんな母さんのありがたい忠告を受けて、僕はさつきからリポーターがやたらと興奮しているニュースへと顔を向ける。

『えー、繰り返します。殺人事件が起きました。この静かな街には似つかわしくない事件が起こって、辺りは警察や関係者で溢れかえっています。犯人は、警察の公表によると、最近この街に逃げてきましたと言わされている連続殺人事件の容疑者、不同^{フドウ}集成^{シュウセイ}。被害者は遺体の損傷が激しく、また、身元を確認するものがいため、確認が難航しているとの事です！！』

物騒だな。早く捕まればいいのに。

それにしても、不同集成……か。なんだか聞き覚えがあるような……当たり前か。何週間か前にも、こいつが起こした事件が報道されていたもんね。いや、それ以前から、ずっとずっと前から、僕はこいつの事を覚えてるけど。

不同集成。

テレビから得た情報によると、この人は十年くらい前に僕が住んでいるこの街で初めての犯行に及んだ。

一家惨殺を二件。だが、奴はどちらの家で凶行に及んだ際に、小さな子を見逃している。

一人は友達の家に外泊していたので無事だった。もう一人は、クローゼットの中に隠れていて助かつたらしい。

命だけは。

その衣装箱の中にいた子供は、一生消える事がないであろう傷跡を心に負つた。

見ていたのだ。

クローゼットの中で。

家族が逃げ惑い、
家族が腕を失い、
家族が泣き叫び、
家族が血を流し、
家族が息絶える。
そんな光景を延々と。

気が狂いそうになるまで。

大声で叫ぶのを我慢して。

……今、その子供は大丈夫。

余りにも悲惨で、凄惨で、無惨な事件だつたため、報道規制がかけられた。そのため、本名は全国に知られていない。

それが被害者にとつては唯一の救いだつたのだろう。

テレビではここまで詳しくやつてなかつたけどね。

ほとんどが、子供の頃にした僕の推測だ。この不同集成とかいう名前を聞いたら、段々と思い出してきた。

「さて、ど。恭史はなにか食べたいものある？」

「んー、今は特にないや。出来ればどら焼きが食べたいけど」

「それはお菓子でしょ。母さんは夕飯を訊いてるの」

僕は首を横に振つた。食べたいものがないから。

夕飯を食べ終わり、風呂にも入り終わつた僕は自室にて漫画を読みふけつていた。

普段はラノベとか小説を読んでいるけど、やつぱり漫画も面白い。絵があるのだから頭の中で想像しなくてもいいし、作者が考えている背景と不一致する場合もない。

時刻は二十一時をちょっと過ぎた所。

ベッドに寝そべつたまま、近くにある窓から外を眺めた。

そこには、街灯がほとんどない田舎には当たり前の風景が広がつていた。

夜空一杯に広がる星空。そこに一際輝く大きな宝石、月が見えた。学校がある街から一、二キロほどしか離れていないのに、なんでここまで田舎なのだろうか。

もう少し栄えていてもいいではないかと思えるが、ここにはここならではの良い場所もある。だからこのままでいいのかな、なんて事を考えていたら、ベッドとは反対側にある机の上に乗つけていた携帯が音を奏で始める。

「こんな時間に誰だる……？」

ベッドから降りて、携帯を取るために少しだけ歩く。近代技術の塊であるそれを開き、ディスプレイに表示されている名前を見たのだが、番号が出ていただけだった。

アドレス帳に登録していない人から来るなんて、珍しい事もあるもんだ。もしかしたら、悪徳業者かもしれないし、出ないほうがいいかな？

……悪徳業者だつたらどうしようとか考えていたけど、よく考えたらそんないかがわしいサイト行つてないや、といつものに辿り着き、電話ボタンを押そうとした。

けどそこでまた新たな疑問が浮かび上がった。

友達が教えてたらどうしよう。僕を身代わりにするために、この電話番号を献上したのかもしれない。

……電話番号教えるほど仲の良い友達なんて楓と東条さん、アキラ明くらいしかいない事に気付いた。

あの人たちなら信頼出来る。それにしても仲の良い人少ねえ、ふはははは。笑えないよ……。

と、こんな事を思考している間にも着信音は鳴り続けていて、とつぶに諦めてくれてもいいんじゃないのか?と思えるほど電話の主はしつこかった。

このしつこさは、あいつしかいない。そう、明だ。やつは明だ。明の電話番号登録してなかつた。

仕方が無いので、ピッと電話ボタンを押す。

「もしもし」

『真田か!? なんだよ、もひひよつと早く電話に出てくれても…』

…』

「1めんなさい、僕は真田じゃないです。真田1号なんです」

『意味分からん!! 1号だか1号だか知らねえけどよ、緊急事態だ!!』

『パチンコ屋の看板で、パの電気が消えてるのでも見つけた?』

『それが緊急事態の訳ねえだろ！…』

「僕にしては緊急事態なんだ！…』

『小っちゃん！… 緊急事態小せえ！…』

ふう……。やつぱり明をいじるのは面白い。

僕は携帯電話が耳から離れないよつこしながら、夜の街中を走り回っていた。

殺人犯がうるついているのだから、夜間の外出は避けるべきだが、今はそんな事を言つている場合じゃない。

「明。楓がいなくなつたつて本当なの？」

僕の耳に押し当てている電話から、明が答えてくる。

『ああ、本當だ。東条が相崎の家に行つたけど、電氣は消えてるのに鍵がかかってなかつたんだつてよ！それだけならまだいいさ。少し出歩いているのかもしれない。だけど、夕方に起つた事件のせいでさ……どうしても心配になるじゃんかよ』

「そんなん……」

なんで東条さんは明に電話をしておいて、僕にはしてこないのは不思議だが、それは二の次だ。

楓がいなくなつた。それだけで今は頭の中が一杯だ。

明の話によると、自分達が知る限りで、楓が行つていそうな場所は全て捜したらしい。

しかし、そのいすれにも彼女はいなかつた。

そうなると当然、さつき明が言つていた事件が存在感を高める。損傷が激しく、身元も確認できるものがなかつたので名前すら分からぬ遺体。

それが、まさか……。

東条さんは今の考えに行き当たり、今は泣きじやくつていながら、僕は断じて認めない。絶対に認めるわけにはいかない。

明は、自分たちが知つてゐる範囲で捜したと言つていた。

ならば、僕と楓しか知らない場所には行つていないとなる。
考える……どこだ……？

「あつ、そつか！」

僕は一度家に戻り、必要な物を詰め込んだショルダーバックを提げ、そして自転車に乗つてから街とは正反対の方向に向かつている。正反対の方向とはその通りで、僕が住んでいる田舎よりもさらに田舎へと行つてているのだ。

理由は簡単。楓がいそうな場所に見当がついたからだ。

明や東条さんには分からぬ。一人とは中学時代からの友達だ。明も東条さんのように僕たちとはクラスは違うが、それでも休みの日に遊びに行くことぐらいはしている。

つまりは、結構な時間、あの一人とは一緒にいるのだ。

中学時代からの付き合いである友達が知らなくて、僕と楓という昔からの間しか分からぬ場所。

中学生よりも前の、二人の思い出の場所を捜しに行けばいい。

そして、小学生くらいの時の思い出の場所といつたら、一つしか思い浮かばなかつた。

街灯がさつきよりもまばらになり、左右にあつたでかい田んぼも姿を消し始め、代わりに雑木林が姿を現し始めた。

灯りは等間隔で離れた位置にある街灯と、僕の自転車から発せられるものだけ。

正直、足がくたくただ。街に行くのに約一キロ。家に帰るのにさらに一キロ。そしてここまで三キロくらいだらうか。

学校の授業でもここまで走つたりしない。

息が上がり、ペダルを踏みしめる足に力が入らなくなってきたが、それでも鞭を打ち強制労働させる。

もう少しで、僕の目的地が見えてくる。

雑木林を抜けると、野球グラウンド以上もある開けた場所へと出

る。

そして、その広場にはでかい家が建っていた。

西洋のお城をイメージでもしているのだろうか。所々に小さな塔が突き出しており、小窓が見える。

街外れにある田舎。さらにそこからも離れた位置にある廃墟。

元はどこかの金持ちがバブル時代の昭和に建てたものらしいが、バブル崩壊とともにその金持ちも予算を全て失い、この家を手放してしまつたらしい。

その後、見た目の豪華さに惹かれて何人もの買い手が見つかったのだが、誰もが長続きしない。

幽霊が出るのだとか。

中には、自分そつくりの人間を見たとか言っていた人もいるらしい。ドッペルゲンガーフかっての。

話はそれてしまつたが、楓と共有している小学生時代の秘密の場所といつたら、ここしか思い浮かばなかつた。色々あり、落ち込んでいた楓は一人になりたがつていた。無論、僕は彼女を心配して一人にはしなかつたけど、その時にここを見つけたのだ。

ここなら殆ど人が来る事もないし、ゆつくりしていられる。

それからというもの、元気になつた後の楓や僕は、なにか嫌な事があつたり、悲しい事があつたりした場合はここに来るようになつた。

別に今の楓がなにかを抱え込んでいるとは考えていない。しかし、ゆつくりと考え事をしたかつたのかもしれない。それだったら、ここが一番のベストだ。

……ここまで来といてなんだが、もしも僕の予想が外れていいたらどうしよう。

僕の予想は、勘と同じくらい当てにならない。いや、でも、今回のはちゃんとした理由もあるのだから、当たつている可能性は極めて高い……と思う。

「ええい！！」

なにを迷っているんだ僕は。楓がここにいるかもしないのだから、行くのは当たり前だろつ。

ここにいなかつたら、記憶を掘り返せばいい。なんなら、幼稚園時代まで遡つてもやるさ。

自転車を漕ぎ、豪華な玄関の前まで行く。獅子の顔の形をしたノックにも使える取つ手を引つ張り、重たい扉を開ける。

ギイイイイ、という。錆びついた嫌な音と共に、闇へと続く口がぽつかりと開いた。

一步、中に踏みいる。

ホコリ臭さが鼻をツンと刺激し、吹き抜けになつてゐる二階の窓から怪しげな月光が侵入してきていた。

僕は鼻水をすすりながら、さつき家へと寄つた時に持つてきた懐中電灯を、ショルダーバックから取り出す。

この場で持てる唯一の光源のスイッチを入れて、目を光らせた。

「うわあ……」

光に照らされて浮き彫りになつた中は、昔となんら変わつていな。その事に感激を覚え、思わず声を出してしまつた。

僕がいる場所は、でかい四角形のよつな場所。反対側の辺には、二階へと上がる階段がある。

甲冑やら絵画やら、なんか不気味な置物などがあるが、やつぱり懐かしいと思えた。

小学生の頃、楓とよく遊んでいた空間。一人だけの秘密基地みたいにしてたつて。

前述の通りに落ち込んでいた楓を、普通の状態にまで持ち上げた後にだけどね。

このお屋敷。一階部分には広いリビングとキッチンがあるだけだ。他の部屋は全て二階にあり、娯楽室もあつたはず。さてさて、一体、楓はどこにいるんだろうと、脳細胞に思い出すように命令しなくとも、僕にはなんとなく分かっていた。

楓がブルーな気分でここに来たのなら、ちっちゃかつた時と同じ行動をとるはずである。

つまりは過去の記憶からそこにいけばいいと、海馬を鞭で打つ事なく、楓が居そうな場所を過去の記憶から勝手に知らせてくれていたのだ。うむ、大変素晴らしい働きである。讃めてつかわすぞ、海馬。

さて、脳の記憶を司る箇所が無償で教えてくれたために、僕はそれに従つて扉の近くの床をライトで照らす。

光の輪つかに明るく照らされて不機嫌な埃は、僕が歩くたびに宙に舞い、鼻水垂らしの刑を執行していく。僕は結構なアレルギー持ちなのである。

「……あつたあつた」

床に積もつた埃と埃の間が、やけに大きく開いている箇所を発見。その辺りをさらに注意深く観察すれば、細い切れ目が見える。

これは、地下通路に繋がる入り口である。

四方が一メートルくらいある地下への扉の切れ目を正確に見極め、積もつている埃を足で払う。

袖で鼻元を覆い隠し、あらわになつた四角を見つめた。

この扉には取っ手というものがない。しかし、扉を開ける方法は存在する。

四角形の四つ角を左上から右上、右下、左下と軽く叩く。

中央の部分を叩き、その場でコサックダンス……はしない。

中央を殴つたら、左側面と右側面を同時に叩く。

この動作を、一秒の間を空けずに行っていくと、なにやらカラカラと歯車が回る音がしていく。

それから地下への扉が、微かに横へとスライドされる。埃を砂のように舞い上げ、スライドさせた僕に対して怒りを露わにする扉様。

一秒の間にほんの少ししか開かないそれに対して、微量のイラつきを覚えながらもジツと待つ。

そして、地面より下への入り口がぽつかりと開く。

「さてと、楓はここにいるのかな？」

地獄（少し過剰表現あり）への道は、ハシゴのよつなものが壁に取り付けられているので、容易に侵入する事が出来る。

まずはその鉄の取つ手を掴む前に、しゃがみ込んで埃の積もり具合を確かめる。すると、埃がなくなっている場所を一本につき二ヶ所発見。どうやらそれは、楓が降りるために使用した形跡のようだ。

「うむ。行きますか」

後ろ向きに六へと入り、慎重に一本一本、足を滑らせないように降りて行く。

埃と湿気が同棲している地下に踏み入る。

ふと上を見ると、自動的に扉が閉まるところだつた。

思い出すなあ……。ここに入つたはいいものの、扉が閉まつたせいで出られなくなつた事があつたつけ。その時は一日間くらい出られないで、地上では誘拐か殺人かとか騒がれてたな。

僕たちは僕たちで、暗闇の中、持つて来ていた頼りないランタンの明かりで気が狂わないようにするだけで精一杯だつた。

お腹が減つてきては、目の前にいる楓が美味しそうに見えてきたけど、あつからも肉食獣の視線を無料でプレゼントされてきていたので、行動には出なかつたけどね。

うむ、大変懐かしい。外に出た後に、僕の両親から楓も一緒に叱りを受けてたつけ。

あの時の楓は少し嬉しそうだつた。なんでかは大体、想像がついたけど。

さて、回想はこの辺で終了して、先に進みますか。

この地下は人が一人通れるほどの狭い一本道だ。このまままつすぐ行けば、広間のような場所に出る。

そこにはなぜか生活必需品があるので、おそらくは楓があそこに

いるのだろう。

生活必需品といつても、空の冷蔵庫とか硬いソファだけね。

一步踏み出す。

カツーンと靴の音が地下内に反響する。

懐中電灯の明かりを頼りに進んでいく。時々、ネズミの死骸やらなんやらが散見されるが、気にしなくてOK!

しかし、

「鼻水が止まらない……」

こんなアレルギー培養地下に入るんなら、マスクを持つてくれればよかつた。

くつそー、海馬め。少しばかり働くのが遅かつたようだな。罰として今後、一時間はなにも記憶しないからな。

暇で暇で一ノ一の気分でも味わうがいいさ、ふはははは。

閑話休題。

楓探しに火力を注ぎますか。

と言つても、もうすぐでこの地下で唯一の部屋に到着するわけですが。

肌寒さを感じながら、自分の足音を響かせていく。

この虚しい空間に空虚な自分の足音だけを反響させるのもなんなので、どうせならリズミカルにやつて少しだけでもこの場を明るくしてみるかとは思つていない。

僕はそんなに性根が明るい方ではないのだ。

歩き、懐中電灯の光を頼りに奥へと進んでいく。

そして見えてきた。細い洞窟の通路のようだつた道が、一気に洞穴へと変貌する。

四方をコンクリートの壁に囲まれた無感情な空間は、電灯のようなものがなく暗闇のはずだつた。

しかし、今は微かな灯りを見る事が出来た。それはロウソクの火のように揺らめき、微風でもその存在をかき消されてしまうような危うさがあるものの。

僕はその光源に近寄る。発生場所はこの部屋にある、石製かと疑うほどに硬いソファの近くからだ。

そこには、リボンを蝶々結びにして、ポニーテールを作っている女の子が座っていた。

それは、僕が捜していた人物で、今まで心配していた少女だつた。捜索人物が無事に見つかった事により緊張が解け、今まで内に溜めこんでいた疲れが全て表面に出てきた。

足取りが重くなり、ふらついてくる。思わず床に座り込みそうになつたが、それをなんとかこらえた。

「なにしてんの？ 楓」

自分の声が少しだけ震えていた。

ソファに体育座りをしていた楓が、その綺麗な瞳に不安の色を宿らせながら、ゆっくりとこちらに振り返る。

「…………恭史。なんでここに？」

そこにはいつも笑顔はなく、ただただなにかに怯えているような、そんな小動物みたいな顔をしていた。

「…………恭史。私、恐い」

「恐い？ なにが？」

「だつて、この街にあの殺人犯が来てるなんて……嫌だよ。なんでまたこの街に来たの？ なんで……」

「楓…………」

ニュースでも話題になつてゐる連續殺人犯・不同集成。こいつの存在が全ての人々を不安にさせているのは言うまでもない。彼女もその例に漏れず……いや、それ以上の不安を胸にかかえているはずだ。

だから、僕は。

「楓、今日のお昼に言つた事さ、覚えてる？」

なるべくこれ以上の不安を楓に与えないように、僕は優しく語りかける。

「恭史が言った事？……あの、ふざけて『絶対に守つてあげる』つて言つたやつ？」

「そ、それ。いやー、でも酷いな、楓は」

「なんで？」

「あんな言葉、ふざけて言わないよ」

「え？ それって」

「うん、楓になにかあっても、僕は絶対に君を助けてあげる。だから、安心して。ねつ」

人を安心させるのに笑顔を使うのは苦手だが、そんな事を言つている場合じゃない。本当に助けたい人なのだから。

僕の言葉で楓が少しでも救われるのならば、たとえ恥ずかしくても口にするしかない。笑顔を作るための苦労なんて、いくらでもしてあげる。

「ふふつ」

やつと楓が笑つてくれた。

もちろん、僕の言葉で全ての恐怖が消え去つたわけではない事は分かっている。

それでも、こんな僕でも楓は信用してくれて、今まで自分を覆つていた感情を少しだけ小さくしてくれた。

「本当に、恭史は優しいんだから」

「ははは」

楓の笑顔に赤面しそうになつたので、横を向いて頬を搔く事で意識を背ける。

「……でもね、やつぱり、あまり危ない事はしなくていいからね？ 私のせいだ恭史が怪我したら、嫌だよ？」

「あー、うん。肝に命じておくよ」

適当な感じに命じるだけで、強制はしないけど。つむ、やつぱり危険な目に遭つても僕は見捨てないぞ。

決意を固め、楓の前に回り込む。そして手を差し伸べた。

「さつ、帰ろう？ 明とか東条さんが心配してたよ」

「ありやりや。少し悪いことしちやつたね」

少しだけ眉を下げる、楓は少しどころか大変悪い事をしたという風に反省していた。

出来心で作った落とし穴に、大きな人がはまり出られなくなつた光景を見ながら反省しているかのような……うん、意味分からん。楓は僕の手を握つて立ち上がつた。立つ時に良い香りが鼻を刺激して、少しだけぽわわんとする。

「大丈夫？……近くで見ると、鼻水垂れてるよ」

「アレルギーだから仕方がない」

最後に格好つける事が出来ずに多少落ち込みながら、僕たちは帰路に就いた。

第2話 君と街へ

『恭史！ 街に行こ』『よ

楓の搜索アンド発見を行つた日から数日が経つた日曜日の朝。僕から惰眠を奪い去つたのは、朝から元気な楓の電話だった。眠い目をこすり、頬を何度も叩いて脳を目覚めさせる。そして携帯を耳に押し当てて、

「街つて……殺人犯がいるんだから、なるべく外出しないようひつて学校から連絡来てるでしょう？」

楓を見つけた次の日。学校に行くと先生からこんな事を言われた。なるべく部活動は明るいうちに終わらせ、なにもしていない生徒は速やかに下校するように、というのが通達だ。

さらに、登下校はなるべく複数の友達と帰るように推奨された。なにか怪しい人物を発見したら、すぐに通報して欲しいとの事だつたので、マスクを着けてレインコートを羽織つていた人を通報したら、警察の人に怒られてしまったという記憶がある。

捜査員だったとか。だつたらあんなに晴れている日にレインコートなんて目立つ服装はするなと言いたかつたが、それをグッと飲み込んだ……と見せかけて、某大型掲示板に書き込んでやつた。すぐに消去されたけど。

閑話休題。

「殺人犯がうろついている場所に行けないよ。大人しく家にいた方がいいんじゃないかな？」

『駄目駄目。ただでも暗い雰囲気に流されてるんだから、少しでも明るい気分を味わうために街に行くべきなんだよ！』

「……つて、東条さんに言われた？」

『あはは。バレちゃつた』

バレるよ。楓はそんなに行動的じやないんだし。

で、その日の午前十時。

楓の「遊びに行こう」という連呼に根負けしてしまった僕は、駅前にある『残念犬駄目公』象前に来ていた。

この残念犬はどこぞの忠犬とは違い、もつあらぬ点で駄目だつたらしい。

飼い主を待つているのかどうかは知らないが、糞尿をその辺に垂れ流し、綺麗な女性を見つけてはその後を鼻息荒く追いかけまわし、小さな子供には吠えるわ吠えるわ。

最後には保健所に連行されていったね。残念だ。

なんでこんな犬を銅像にしたんだろう……？

こんな事を考えながら待つ事数分。楓はまだまだ来ないのは当たり前だ。

なにせ待ち合わせ時間は、十一時からなのだ。

別にハリキリ過ぎて早く来てしまったとか、そんな事はあり得ないでの誤解しないように。

時間つぶしに空を見上げる。抜けるような青空が広がっていて、この街に異常がないという事を強調したいかのようだ。実際は異常だらけなんだけど。

周りを見てみると、人は結構歩いていた。殺人事件なんて自分には関係のない、紙の上だけの物語だとでも思っているんだろうか。僕の前を横切つて行つたカツプルが、白昼堂々とキスをし始める。しかも深い方だ。

恥ずかしくないのか若者よ。青春だからってなにをやっても許されるわけじゃないんだぞ。

もしここにバットがあつたら、男のゴールデンボールをホームランにしてやるのに。

適当な事を考えながら陽射しを浴びること数分。楓は意外と早く待ち合わせ場所に来た。

赤と黒のチェックバルーンスカートに、タートルネックセーター、ロングブーツという服装をしている彼女は、銅像前に僕を見つけると走つて近寄つてきて……

「きゅっ

転んだ。

なににつまづいたんだろうか。舗装されていて割と綺麗な歩道なのに。

仕方がないので僕は楓に近寄り、腕立て伏せをしている最中のような姿勢で鼻を押さえている楓に手を差し伸べる。

「大丈夫？」

「う、ううん……ありがと」

恥ずかしさのせいからか、少し赤面しながら楓は僕の手を取つて立ちあがる。

「あ、あはは。カツ！」悪い所を見せちゃつた。折角のお出かけなのに

スカートの端を払いながら上田遣いで僕を見てくる楓。可愛いから許す。

というのは、まあ、一割がた嘘だとしてもね、鼻をぶつけて若干涙目になつている楓は、いつもより可憐だった。

「もしかして、待たせちゃつた？ 私、二十分前行動を心がけて来たんだけど……」

「甘い。甘いよ楓。僕なんか一時間前行動を心がけているんだ」

「むう。じゃあ、次は二時間前行動を心がける」

「じゃあ僕は三時間前行動だ」

「じゃあ私は三時間一分前行動！」

「僕は絶対に楓より早く来る。ふははは」

なにか言い返してみなされ。ほれほれ。いざとなつたら、一日前行動をみせてやる。

なんていうどつでもいい会話をしてから、僕たちは街を歩き始める。

ここまで徒歩で来たので少し疲れたなー、とか思いながら店が並んでる地域に向かった。

駅前には必ずといつていいほどに商店街が存在する。今、僕たちが向かっている場所もそいつた感じで、様々な店がある。いうならば、店の集落である。

歩くこと数分。

楓を横に引き連れて、うはうは気分を堪能していると、よつやく集落の入り口に着いた。

ここは人で賑わっている。

いくら殺人犯がいるといつても、遊び心には勝てないのだろうか、それとも先ほど思った通り紙の上だけの事だとでも思っているのだろうか。まあ、どっちでもいいけど。

「楓、どこの店に行きたいとか考えるの?」

「え? うーん……そうだなあ……。特に無し!」

「そんな威張つて言われたら、僕としてもどうこう風に対応したらいいのか分からないや」

楓の計画性のなさに少しだけ呆れながらも、僕は周りを見てみると、そして、一番最初に田に飛び込んできた店にしようと思つた。

「じゃあさ、あそこの店にでも入ろうか」

「ん? どうじ?」

僕が指差した方向を、楓が見る。すると、嬉しそうに顔を綻ばせた。

「ファンシーショップだ。いいよ、早く行こうよ」

「焦らない焦らない」

僕の手を引つ張つて先を急ぐ楓を見ながら、僕は笑みを浮かべていた。

「あつ、これ可愛いー!.. どうじ?、恭史ー..」

「うん、可愛いんぢゃない」

左目に眼帯をしていて、体は包帯だらけのパンダ人形を持ちながら、楓は無邪気な子供のように店内をはね回る。

楓は昔からこういったものが大好きで、少し前に家に行つた時も可愛いものが一杯飾つてあつた。

……まあ、楓が今持つているもののどこが可愛いのか、僕には分からぬけど。

暴走列車の如く店の中を走り回り、可愛い物を発見しては作り物じゃない笑顔を浮かべる。

しかし、この店内。狭い割には所狭しと棚が並べられていて、可愛い系の人形などが敷き詰められている。『川』の字のように並べられている棚の内、真ん中にある所を物色していると、服の裾を引つ張られた。

引っ張るな服が伸びるだろコンチクショーンとは思つていながら、折角、自分が買う物が見つかりそうな場所で邪魔されたので、少し不機嫌になりながらも、それを感じさせないような笑顔で振り返つた。

「恭史なんか怒つてる？」

一発でバレた。なぜだ、出来杉くんでも引くような爽やかな笑みを浮かべていると自負していたのに。

「いや、別に怒つてないよ。それよりも、なにか用？」

僕がそう聞くと、楓はなんだか少し恥ずかしそうにしながら、後ろ手に隠していたものを全面に差し出してきた。

両手を胸の前で×のようになに交差させ、その中心点で人形を抱くよう握りしめている。

そしてリボンの蝶々結びで、ポニーテールにした髪を揺らしながら、可愛らしく首を傾げた。

さらには僕を低い位置から見上げてくる。身長差からなのでこれは仕方がないのだが……かなりドッキドキします。

楓が持つているのは大きな熊の縫いぐるみ。何年か前に流行した、

『テデエ・ベア』というものの。

ふわふわした毛に手を埋めて、僕を見上げてくる。

今の楓は、人形を抱いた幼い子供のように見え、その容姿と相まって年下ではないかと疑つてしまつた。

「どうしたの、楓」

熊を大事そうに抱えたまま一向に喋らない彼女に、僕もこのまま無言を貫き通し、珍しく赤面している楓の容姿を鮮明に描写しようかと思っていたが、止めておいた。

今のこいつを見ていると、大昔に置いてきたはずのあの気持ちが再燃してしまいそうだ。

「えーとね、恭史」

楓は人形を持った手を、僕に押しつけるようにして出した。

「これ、買つて」

赤面したままの笑顔で、精一杯の勇気を振り絞った感じの声。いやしかし、これは珍しい。楓が僕にものをねだつてくるなんて。いや、たぶん初めてじゃないか？今までこんな事を言われた記憶がないのだが。それゆえに、今の楓は真っ赤なんだろうけど。僕の返答は考えるまでもない。

「いよっし、買おう！！ もう、なんでも買つてあげる！！」

「本当！？ やつたー！」

テンションが高くなってしまっているのは、初めて楓にねだられたからだ。

いや、だけどこれでさつき買い物した分も含めれば、今月は金欠になっちゃつた。どうしよう。

楓はスキップしながらレジへと向かう。

僕は彼女が跳ねるたびに遅れて揺れる髪の毛を見ながら、ああ、やっぱり可愛いな……という前世の自分からのお告げを聞いていた。

「恭史、早く早く！」

見てるだけで人を幸せにするあの笑顔。僕は昔からこれに救われてきたのである。

人形のよつに整つた顔を破願させた楓は、レジの前で僕を待っている。

その近くにいる店員さんが楓に色目を使つてゐるよつに見えなくもなかつたので、僕も女の店員さんに色目を使ってみた。もちろん、嘘です。

ポケットからここに来る前に買ったものが落ちないよつに気をつけながら長財布を引き抜き、大して中身が入つていないのでガバッと勢いよく口を開けてやる。

二コヤカなハンサムスマイルを携えている男の店員に、僕は先ほどの出来杉くんも引くぐらゐ完璧なスマイルを向けた。

相手は顔をひきつらせたが、それでも対応してくる。

「一千円になります」

「ほいほい」

「一円じゃなくて、一千円です」

ちよつとした悪ふざけなのに、目の前の男は額に青筋を浮かべている。

短気は損氣だぜ、お兄さん。ふははは。

悪ふざけはこの辺にしておかなれば、殺人技をかけられそうだつたので僕は神がかつた早さで紙幣を取り出して店員さんの顔面目がけて放り投げた。冗談だけどね。

僕達はファンシーショップから外に出た。

楓は買つてあげた熊の縫いぐるみを大事そうに抱えて、にこにこと穏やかな笑みを浮かべている。

その笑顔に僕も嬉しくなり、さつきから連発している例の笑顔を貼り付けた。

そんな僕を見て、楓は訝しむよつな視線を向けながら見上げてき

た。

「恭史……その笑顔、なんだか変だよ？」

「どこが？」

「うーんとね……笑つてゐるよつな、引きつてゐるよつな、怒つてゐるよつな、泣いてゐるよつな……なんだかよく分からぬ顔してゐる」

「……ていうか、そんな複雑な顔をしてゐるのに、よく笑顔だつて分かつたね」

「そうか。僕はそんな顔をしていたのか。だから楓には一発でばれて、店員さんは引きつっていたんだ。」

今度からはこれは自重しようつと。

温かい春の日差しを背中に受けながら、楓と街を歩く。

街は穏やかな雰囲気に包まれていた。学生や老人、若い夫婦など。みんながみんな、笑顔で街を歩く。

しかしそれはどこか、無理をしているよつな感じのものだつた。

「……なんか、気持ち悪いな」

「そうだね。みんな、なんかおかしい」

僕の独り言に、楓が反応してきた。

どうやら、同じ考え方だつたらしい。

ここに来ている人達も、僕達と同じ事を考えてきていたのだろうか。

ただでさえ陰鬱な事件があつたのに、家に引きこもつていて、さらに嫌な気分になるとか。

「お腹減つたね……」

もふもふした縫いぐるみの毛に、顔をうづめながら楓が言つた。

「ああ……そうかもね」

僕はそんなに減つていないので、楓が減つたと言つてゐるんだからもうお昼時なのだろう。

携帯の時計で時刻を確認すると、十二時だつた。

「じゃあ、どつかで食べよつか」

「そうしよう」

「ぱつと楓は、『ご飯をねだるよつな子供の笑顔をする。』の表現でこうと、僕は楓の親か。少しへこんだ。

彼女がお腹をさすりはじめ、今度は悪さをした犬が、餌を抜かれた時に見せるような、なんとも悲しそうな目で僕を見てくるので、急いで飲食店を探す。

「あっ、あそこに入ろっか

前方に見えたお洒落な店を指差す。確かあそこは、地元の雑誌に載っていた、この辺では有名なファミレスである。

ファミレスを載せる情報誌つてどうなの……？ とかいう疑問はさておき、色々とバリエーションがあつて美味しいらしい。

「おっ、いいね、いいね！ ジャあ、行こうっ？」

「うむ

偉そうに頷きながら、楓に手を引かれて僕達はファミレスに向かつて行つた。

ファミレスの外見を近くで見た時は、お洒落なレストランかなにかかと思つてしまつた。

外装は赤いレンガのよつたもので造られ、モグラ叩きのモグラのようだ、屋根には所々、突起物があつた。

中に入つてみると、落ちついた感じの家具で統一されていて、音楽は今流行りのものよりも、クラシックのよつたものが流れていた。

「ファミレスじゃないよな、ここ」

「なんか凄いね。あはは、私なんか緊張しちゃうかも」

店内に流れる落ちついた音楽や内装のせいか、僕は少し緊張しながらも窓際のボックス席に座つた。

赤いソファのよつた椅子は座り心地がよく、僕の体重分だけ沈んだ。

机を挟んだ向こう側には楓が座つた。

「なに食べる？」

店員さんが運んできてくれた水を含み、口を潤す。今までマシンのよつた香りだった僕の口臭が、一気にラベンダーに変貌する。自分の口臭なんて知らないけど。

楓はなかなか決める事が出来ないのか、メニュー表を見てうつとうん唸っている。

仕方がないので僕もメニューがまだ決まっていない振りをしながら、ポケットの中に入っているものを触感だけで確かめる。

「どうしようかなあ……」

「恭史も決まつてないの？」

「あ、いや……うん、まあね。あはは」

心の中で詠めておくべき言葉が、つこつこ口に出していくたらしげ。

心め、お前まで反抗期か。

それから考え」とが口に出ないようにするための特訓を人知れず行っていると、楓がメニュー表をパタンと閉じた。そしてひとつ。「恭史にお任せします」

「あい、任せました」

なんとなくこの展開が予測できていたので、僕は今日のお勧めメニューと一緒にやらを店員さんに注文した。

「いやー、どうこうお店はメニューが一杯あつて恼みますなあ」

「そうだね」

「別に私は決まつてたんだよ? だけど恭史にエスコートしてもらいたいなつて思つて」

「ダウト」

「あはは、バレた。なんで分かつちゃうの? おかしいな、おかしいな。私つてそんなに顔に出やすいのかな?」

楓と雑談をしながら、時間を潰す。店の中は混んでいたため、料理が出てくるのには時間がかかりそうだった。

僕は出された水を飲む機械のように、それを燃料にして言葉を吐き出す。なんとエコだ。素晴らしい。

「でも、由実ちゃんつて、私とほとんど同じ背の高さなのに、五百メートルを五分前後で走るんだよ?」

「へー、凄いね。僕なんか、六分前後だ」

「もつと頑張らなきゃ。男の子なんだからね。サッカーはもうやら

ないの？」

「うーん……飽きた」

元からあまり好きじゃなかつたし。楓に近づきたいから、僕も頑張つてただけなんだしね。

笑いながら話をしていた僕達の耳に、不快なニュースの音声が流れ込んできた。

それはカウンター席の近くにあるテレビからで、内容は不同集成のものだ。

最近はこの街も、悪い意味で有名になつてしまつた。

元々、不同の生まれ故郷やらなんだかで、被害者遺族からは理不尽な怒りを頂戴したりしていたが、今回の奴が潜伏しているせいである。

「ねえ、恭史」

楓の位置からは僕の後ろにあるテレビが見えるようで、彼女の深い黒の瞳はニュースの画面を映し出している。

さつきまでの笑顔は、姿を消していく、どこまでも無表情だった。

「犯罪者って、死んだ方がいいと思う?」

「……そうだね。人の人生を奪つておいて、その罪を償おうともせずに逃げているような奴 この、不同みみたいな人だつたら、死んでもいいと思うかな」

最近の楓はこういう物騒な話題を振つてくる事が多くなつた。

推理小説に影響されているのか、昔からこいついた話題はあるにはあつた。

だけど今は、不同集成のせいだ。それは高齢の方が多くなつて、るよう、抗う事が出来ない事実なかもしれない。

彼女は僕と一緒に、不同みみたいな殺人者は大嫌いだつた。

だけど、僕と楓では、嫌う理由が違う。

僕はさつき言つたとおり、罪を犯したくせにそれを償おうともしない、その腐つた精神が大嫌いだ。

しかし楓は、一般的な嫌い方だ。人を殺すから嫌い。人の人生を

奪つたから嫌い。死んで欲しい。後、一つは。

「ねえ、恭史。あの人死んだら、嬉しい？」

「……楓、いい加減、この話は止めない？ 物騒な話題は、テレビの中だけで十分だよ」

「答えて」

楓の表情はまだ無だ。普段笑つてゐる彼女がこういつた顔になると、いつものギャップからかなり怖く思える。

だからといつてではないが、僕は僕なりの答えを口にする。「そうだね、不同が死んでくれたら、僕は嬉しい。あんな奴が生きていても、これからもっと人を殺す。たくさんの人的人生が奪われる場所を見るのは、一度で十分だよ」

楓はまだ納得していらないような表情をしてゐる。仕方がないので、さらに言葉を続ける事にした。

「あいつは絶対に改心しない。ここまで来たら、絶対に逃げれる場所まで逃げるだろう。時効はなくなつたけど、そのうち未解決事件になつて、誰もあいつを追わなくなる。だから、そうなる前に、あいつには死よりも苦しいものを与えてから、殺してやりたい」

途中からは嘘だけだ。僕に人を殺せるような度胸はないし。

「そつかそつか」

僕の言葉を聞いた楓は、水泳のオリンピックで金メダルを取つた選手のような笑顔を浮かべる。

「だよね。罪を償つてもらわないとダメだよね。うんうん」

さつきまでの無表情はどこにいったのだろうか、と思うほどの笑顔を浮かべる楓。だけどこれは、笑顔という仮面を顔面に貼り付けているだけだ。それを外してしまえば冷徹な表情をしてゐる事だろう。

なんでそんな顔をしているのかという理由はなんとなく分かるが、僕は追及しなかつた。

仮面を被るのを楓が選択したのだから、僕がそれについてとやかく言ひ資格はない。

だからこいついう場合は、僕も適当に愛想笑いを浮かべるだけいいのだ。

「恭史は人を殺したら駄目だよ？たとえそれが、あんな人でも「分かつてゐるよ。それに、僕にそんな度胸がないって事は、楓が一番分かつてゐるでしょ？」

「それもそうでしたな。料理来る前に、お手洗い行ってくるね」

「うむ」

適当に頷き、周りを確認してみる。さつきまで物騒な話をしていたのだから、周囲の人々が聞き耳を立てていなかを確認するためだつたが、それは必要ない事だつたらしい。

それぞれの席についている人は、自分達の話題で忙しいらしい。それはまるで、ピーチクパーチクとさえする雛鳥を連想させた。自分で言つといでなんだが、いまいち分かりにくい。

さて、楓がおトイレから戻つて来てからすぐに料理が出てきた。店員さんが楓の帰りを待ち望んでいたかのようなタイミングだつたので、僕は思わずジト目を向けてしまつとこ「う嘘。

……今更だが、僕はいつからこんなに嘘つきになつたのだろうか。昔は……駄目だ、思い出せない。

もう少し素直で、ふりていーでは一っぽいるどでだんでいーだつた気がしないでもないような気がした。

……なんだこの表現。言葉の一つ一つをミキサーにかけて、粉々ミンチにしても交わりそうにない単語ばかりだ。

どうでもいいや、僕の性格の起源なんて。考えるだけ無駄。

思考を中断して、目の前にある料理を意識の内に入れる。

デミグラスハンバーグにみじん切りのキャベツ。白米とコーンスープとコーヒーが献立だつた。

これでお勧めなのだから、少しだけ呆れる振りをしながらも僕は瞳に星を入れる努力をしてみる。無意味だけど。

「いただきまーす」

「いただきます」

全く関係のない事を考え込んでいた僕を置いて、楓が先に挨拶をしてしまった。だから、急いで僕もその後に続く。

付属していたスプーンとフォーク 学校の給食によく出てくる、フォークとスプーンが一緒になった食器を掴み、ハンバーグに突き刺す。思いのほか肉は柔らかく、抵抗なくそれを受け入れた。肉汁が飛び出し、中身を露にする。

なんでスプーンがここで使われているのかどうかは追及しない。だってここ、ファミレスだしね、という理由で無理やりに納得してみる。

いや、だけどいいわこれ。中学校以来だけど、使い勝手が良すぎる。

と、またこんなどうでもいい思考をしていたから、切り分けた肉を食べるのを忘れていた。

僕は結構、食べるのが早い方だ。

小さい頃からなぜかそういう教育をさせられていたので、食事開始から十分以内で全てを平らげる。

例え大盛りでもそれは変わらず、この前行ったラーメン屋で大盛りラーメンを食べたら無料になる奴に挑戦し、三十分以内の所を十分一秒前に完食した。

あの時の店長さんの顔は忘れない。『こいつ、化け物か?』。嘘じやなくて、本当にこんな顔をしながら、箸を休めない僕を凝視していた。

早食いと大食いは違うという事実には気付かない振りをするのが、社会の常識なのです。

さて、本題に入ろう。

僕は全てを食べ終えてしまつたので、暇だ。楓はまだ一生懸命に食べている。

机に頬杖をついてそれを眺めている僕に気を使っているのか、い

つもの数倍早いスピードなのだが、それでも僕から見たら亀のよう
に遅い。お主もまだまだよのう。

……あー、駄目だ。

冗談言つて、気持ちを誤魔化そうと思つたけど、無理っぽい。

「楓、楓」

「なに？」

僕の呼び声に、楓は一端、手を休める。

「そんなに焦らなくてもいいよ。ゆっくり食べて」

「で、でも……恭史を待たせるわけには」

「そつか。じゃあ、今から五秒以内に食べきれなかつたら、一秒オ

ーバーする」と罰ゲームね」

「ええ！？ ……ちよ、なに言つてるの恭史。なんでそんな事をし
なくちゃ」

「はい、六秒。罰ゲーム一個追加。あ、二個追加になつた
「……むー」

楓は軽く頬を膨らませて、僕を睨んでくる。

「あーあーあーあー。リセットリセットリセット。電源オフ、再起
動。よし、戻つた」

僕は昔、年齢がまだ一桁だったころの事だけど、少しだけいつ氣
が強かつた。

よく、口で楓を虐めては、喜んでいたものだ。だけど、駄目だろ
う、真田恭史。

お前はこの性格が一生、外に出ないようになると誓つたじゃない
か。それをなんだ。

少し楓の恥じらう顔を見て、今は一生懸命食べているのを見ただ
けなのに。こんな事で、大昔に置いてきた感情を再燃させでは駄目
じゃないか。

いや、しかしですね真田隊長。

昔々に封印したものが、お湯に入れたワカメのようになつて、
理性に襲いかかってきたわけですよ。あれでは、発砲スチロールで

出来た堤防なんぞ、すぐに破壊されますだ。

むつ、それは困るな。それでは一度と出でこないよ、泥で補強しておけ。

あいあいわー。

などという脳内会議が終了し、僕は楓に頭を下げた。

「ごめんなさい」

「少し反省して欲しいかな」

「本当にごめんなさい」

万が一の確率だが、もし最悪な事態が起きたらどうするんだよ。だから僕は、この性格を封じ込めたっていうのに。

「ゆっくり食べてね、楓。僕はコーヒーでも啜つてゐるから」

「むう」

「ははっ、睨まないでくれ

「…………」
なかなか直らない楓の機嫌に対して僕が行つた行動は…!!

特になにもせずに凝視するだけ。だつて、なにも思い浮かばないだもん。

「そんなに見ないで」
僕の見つめ攻撃に屈したのか、頬を赤くした楓はぷいとそっぽを向く。

うーん……赤いのは怒つているからなのか。それとも……いや、これ以上は自意識過剰と言われかねないので自重しておこい。
そして、自重のついでに自嘲もしておく。

「楓、楓。機嫌直して？横にいる熊は、楓が笑つてゐる方が好きだつて」

本当は怒つてゐる顔の方が好きかもしれないけど。そういうえば心なしか、楓の横に置かれてゐる熊のぬいぐるみが、少しだけ口元を綻ばせているような……いや、気のせいだ。

「どうか、事実無根だ。

さて、閑話休題。

楓の機嫌を直す方法は熟知している。だけど、結構恥ずかしいもので、人前では絶対にやりたくないものだ。

それはまるで、裸の王様のようだ。馬鹿には見えないとかなんとか言われて、その辺を漂つている空気を服だと勘違いしているみんな感じ……ではない。途中から自分でもなにを言つてているのか分からなくなつていた。

またもや閑話休題。一分の間に一回もこの単語を使ったのは初めてだ。

さて、どうしようか。やるうかな。やらないかな。

うーむ、楓の事を好きな僕がこれをやると、かなりあばあばばばな展開になるんだよなー。僕の脳細胞は死に至る可能性もある。……人目につくとか気にしている場合なのかな。僕としては、楓の機嫌を早く直して街に出かけたいのだが。

しようがない、か。

「よいしょ」

立ち上がり、テーブルを回り込んで楓の横に座る。

「こっち向いて

耳に口を寄せて、囁いてみる。

「恭史？」

驚いたような表情をした楓が、ゆっくりと僕の方に振り返つてきただ。

僕は少しだけ身を引いて、楓の瞳に映る自分がどんな表情をしているのかを、余裕ぶつて確認してみた。

顔はポーカーフェイスでいつもの無表情を維持しているみたいだけど、本当は心臓バクバクだ。冷汗だつてダラダラ流れできている。僕のポーカーフェイスも中々のものだ。

「えいっ

「ひやっ

横から思い切り楓に抱きつく。

抱きついた瞬間に鼻をくすぐる、シャンプーの良い匂いに、甘い

香りが僕の理性を……崩壊には至らなかつた。泥で補強しておいたのが、こんな場所で役立つとは。

いやー、しかし柔らかい。いいねえ、この触り心地。肩を優しく掴んでみると、ふわふわとした感触が返つてくる。

男と違つて、女の子の体はやーらかい。

「た、たたた恭史。な、なんの真似なの？」

「んー？ 楓の機嫌が悪いから、小さい頃にやつていた楓機嫌強制移転方法をやろうと思つて。どう？ 落ちついた？」

「ぜ、全然」

不健康な程に日光を嫌う白い肌に、朱が侵略してきた。

楓の瞳は拳動不審に動き回り、僕の方をまともに見ようともしない。

「ここまで照れてくれるど、僕としても抱きついた甲斐があつたもんだと、少しだけ誇らしげな気持になるわけない。

「か・え・で。機嫌、直つた？」

わざとらしく、一言ずつ区切つて話しかけてみる。しかも、最大限、耳に口を近づけて。

「ひやうっ」

ついでにわざと吹きかけた息が耳に当たつた楓は、くすぐったそうな、なんとも可愛らしい声を出し、肩をぴくつと震わせた。

これ、僕が女の子にやつてもらいたいショチュエーションで、三位にランクインされるんだよね。それを、逆に女の子にやつてているとは……。

僕はなにをやつているんだか。

ついでに第一位は、浴衣姿で膝枕をしてもらつての耳掃除だ。想像しただけで、鼻血が百メートル先まで吹つ飛ぶ。過剰表現だけど。そして一位は……自重しようかな。

……む。これはいかん。Sの僕を抑えきれなくなつてているではないか。

えーい、リセットだりセットー！

もう、一度といふ性格は出さない。そつ心に決めました！
勝手に出てこないでくれよ。

一機嫌……直つた？」

首を傾げて、楓の反応を窺う。すると彼女は真っ赤になつた顔のまま、僕に近づいてきた。

楓の瞳に映つてゐる僕がだんだん近くなつてくる。

楓は、カメとウサギが駆けっこした時、ウサピヨンが亀吉にジエツト機で追い抜かれた時みたいに驚愕に支配されて動きが止まってしまった。

僕の髪は最大限近づいてしまったので遠まわしにはなったけど、その場で止まつただけである。

お互いの瞳に映っている自分がハツキリと窺える距離。吐いた息が、相手に簡単に届いてしまう。

なんてこんな事態に陥ってしまったのか、やっぱり、S復活のせいだ。あればなれば、こんな事にはなつていなかつたと思つ。

楓との距離を取ろうと、上体を少しだけ倒す。

そんな無邪気

そんな無邪気と意地悪が同棲していそうな声を出しながら、楓はもはや、ソファの座る部分に、楓の両手が着地している。僕はもう、ほとんど横になつている状態だった。

なんだこれ。

「母娘がお出でになつたので、お出でになつたのです。」

「……楓に言われたくない」

彼女の息は少々荒くなつており、頬は上氣しているよつて赤くなつていた。

僕は横目で周囲を確認してみる。

「……楓」

「なに？」

「みんな、見てるけど」

「え？」

楓はゆつくりと周囲を見渡す。

「え……あ……あう」

自分の大胆な行動に今更、気付いたとでも言つかのように、楓は羞恥心からこれ以上赤くなつたら地球上の物体で表現出来ないぞ、というレベルまで上り詰める。

馬の尻尾にした髪の毛を手で払いながら、僕から一瞬にして離れた。

瞬間移動の使い手だつたのか。約十八年間一緒にいて初めて知つたよ。

両方の手で顔を覆い隠し、イヤイヤと首を横に振る楓。見られただけでそんなに後悔するなら、最初からやらなくちゃいいのに。

冷静を装つている僕だが、もつちよつとで泥で補強したなにかが崩壊するところだった。

だつて、楓のくちびるがすぐ間近にあつたんだもん。

ダッキドキでうつははつはダラダラですよ。

「楓、外に出ようか？」

とりあえず、これ以上楓のこんな姿を見ていたら、例の性格が出てきそうだったので、口を逸らしつつ手を差し伸べる。

「……」

しばしの逡巡の後、楓の柔らかい手が僕の手を握り返してくる。抜けない力の力をみんなで一斉に引っ張る時のような声を発しながら、楓を引っ張り上げる。

それから、机の上に置かれていた明細書を取り上げ、好奇の視線

が注がれる森の中から脱出するべくレジに向かう。

楓の手をしっかりと握り、先行する。首を少し動かして後ろを見
てみると、彼女は袖で顔を覆い隠していた。

お金を支払い終え、僕は店の前で待機していた。

楓は今、御手洗いに行っている。

暖かい五月の陽射しが絶え間なく注がれ、春とは思えない程の気
温を維持し続いている。

太陽は少しだけ頑張り過ぎだ。少しばか父さんを見習つて、ビ
ールでも飲んでぐでんぐでんになつていればいいのに……酔うと光
量が増すとかないよね？

父は酔わなくとも、日に日に光を強めているけど。主に、頭部的
な意味で。

僕の将来も心配だ。

などという、蟻に雌雄があるかどうかを観察するぐりぐりつでも
いい思考を繰り広げていると、楓が店内から出てきた。

「……お待たせ
「待つてないよ
「そう」

「うん」

……楓が僕と田を合わせようとしてしない。

それほどまでに、先ほどのことが尾を引いているのだろうか。
彼女は街を歩く人々に視線を送る事に熱中しているようなので、
僕は仕方がなく楓を凝視する事に熱中する事にした。
なにが仕方なくなのかは、言及しないでおく。

「あんまり見ないで」

「おう」

なんだ、横目で僕をコッソリ観察していたのか。だったら、僕のよ
うに堂々と見ていればいいものを。
全く、最近の若者はけしからん。相手を直視する事さえできないの
かね。

「……ふう

飽きた。

少しだけお爺さんの真似をしてみたけど、なんだこれ。

空に浮かんでいた雲に隠れて、太陽が地上を照らす事をサボり始める。

「次に行きたい場所とか考えてた?」

まだ僕に顔を向けて来ない楓の横顔に、問いかけてみる。

「うーん……特にないんだよねえ……。恭史が行きたい場所とかないの?」

君と一緒にならどこでも行きたいや、なんて言えない。もし言つたら、体中の穴と「う穴が限界まで開き、更にはサメ肌よりもザラザラすること百パーセントだ。

「あー……」

ちょっとだけ想像してみたせいで、鳥肌がぶつぶつと浮き出でる。

「うわあ……絶対無理だこれ。恥ずか死ぬ。

「恭史もないんだね。どうしちよか

「どうしようね?……あつ、そうだ。もう少し行った先にバッティングセンターが新しく出来たはずだからさ、そこに行つてみない?

出来もしないバッティングだけど、どこもこいから目的地を設定したかったのだ。

「うん、そこに行つてみよっか

「おー」

楓は、やつと僕に笑顔を向けてきた。しかしそれも一瞬で、すぐに顔は前に背けられた。

別に寂しくはない。

「楓ー、なんで僕の方を見ないんだよ?」

「あつ、いや、だつて……」

顔を赤くして、僕とは正反対の方向に視線を投げかける。

別に寂しくはない。

「こっち向いて？」

自分でも気持ち悪いと思う、猫なで声を出す。

「あっ、良い天気」

明らかに僕の方を見ようとしない。

別に寂しくはない。

楓が僕の方を見ないようにしてくるので、僕は彼女の視界に入るよう不可解な動きをしていたらバッティングセンターに到着していった。

楓の視界に入った回数と避けられた回数を比率で現すのならば、1：9だらうか。

なんであんなにも反射神経がいいのだろうか。いや、それとも僕の動きが単調すぎて読まれるのか？

これはいけない。元サッカー選手としては致命的ではないか。

いうなつたらスーパーコンピューターでも予測できないような動きを完成させるしかないと僕は思うながら、僕は百円硬貨を投入する。

バッターボックスの左側に入り、ヘルメットを被り、バットをしつかりと握った。

後ろをみてみる。緑色のネットに挟んだ距離に楓がいる。体はこっちを向いていたが、やっぱり視線はどつか彷徨つて居る。戻つてこーい。

あつ、そうだ。

「楓、これでホームラン入れたらや、僕と付き合つてよ」

「いいけど……どこに？」

ネットで遮られた僕と楓の間。近いように見えても、絶対に手を触れ合う事は出来ない。

これはなんだか、僕が常々感じていた楓との距離のようだ。

だからだろ？か。さつきのよつた事を言つてしまつたのだが、なんで君はそんな天然で返してくるかな。

「これでも結構、言う努力をしたのに。男殺しめ。

「そういう意味の付き合つじやないよ。恋人になるつて事。YES ? NO ?」

「え？ ……ふえ？ あ……ん？」

「なんでそんなに混乱してるのさ」

楓がネットの穴を指で掴んで、牢獄中の囚人みたいにガシャガシヤ揺らし始めたのを見て、思わずそう言つてしまつた。

顔を夕日よりも赤くした楓は、お医者さんが見れば速攻で集中治療室に連れて行かれるかもしれない。

間の抜けた声を未だに発しながら、楓の囚人ごっこは終わらない。仕方がないので、僕は一度、ネットで囲まれていた場所から外に出て楓に近寄る。

「大丈夫？」

「あ……ああわあわわわわわわわ」

「……じゃないね。僕、そんなにおかしい事、言つたかな？」

「言つた言つた言つた言つた」

「壊れたレコードみたいに、同じ事を繰り返さなくともいいよ。聞き取りづらいし」

しかし、こんなに楓がおかしくなつたのを見たのは久し振りだ。小学校以来かなあ……。

「もう一度、言おうか？」

「ぶんぶんぶんぶんぶん！」 激しい速度で首を横に振られた。そんなに拒否しなくてもいいのに。なんかショックだ。

「楓、落ち着いて。そんなに取り乱さなくともいいじゃないかよ。僕の気持ちに気付いてなかつたとか、そんな事を言つつもりなのか？」

「コクコクコクコク！！ 残像が見えるくらいの速さで首を縦に振る。うわあ……凄い、楓の顔が何個もある。

「……僕の気持に気付いてなかつたのか。初めて知つた嘘だけど。

なんとなく、分かつてたけどね。僕の表情や言動からは察し難いだろうし。

いつまで経つても楓の顔色は平常に戻らない。
だから仕方がなく、
僕は楓の頬を引っ張つてみる。

「いふあいふあい！ なにふるのふあふあふみ！」
「止めるからさ、そろそろ返事くれない？」こう見テ

「ここ汗かいてるんだから」

なに考へてゐるか分かりづら、一時があるんだよね。

「今も、無表情？」

「自分で気付かないの?
今は少しだけ呼吸が速くなっているけど、
表情は無一丘一かな

「ほう。なるほど。で、返事はどうですか？」

その本題に入つた途端、楓は露骨に僕から視線を外す。

「そんな事なー!!

「むしろ?」

うむ、それを聞いて少しだけやる気出た。頑張るぞー！」

タードボタンを押した。

我ながら大胆な発言をしてしまつた事は分かつてゐるが、それで
も美は無い。まことに二重一重だ。

心臓が早鐘を打ち、上手くバットを握る事が出来ないけど、頑張るぜ。

一球耳

一球目。

空振り！！

三球目。

空振り！！

「ていうか。球速いよ！！」

見忘れていた球速表示を確認する。

145キロ。素人には少しきついんじやないか？

ここにバッティングセンターは、百円で二十球出でくるらしい。気分は扇風機だった僕は、それら全てに空氣を当てる事だけを意識していた。空振りしてただけなんだけどね。

「あたたた」

二十回も慣れないスイングをしていたせいか、肩や一の腕が筋肉の張りを訴え、これ以上、労働させる気なら、賃金の代わりに栄養素をくれと伝えてくる。

しかし、本性はUである僕は、それら全てを無視し、なおかつ、鞭で打つて奴隸のように扱う。ふははははは。

「恭史、大丈夫？」

「あー……うん、なんとかいける。球の速度にもだいぶ慣れたし」「これはサッカーをやっていたおかげか。僕は結構、動体視力が良い方なのだ。

どんな速度も、三球も見れば慣れる。でも、目で見えても、体がなかなか動いてくれない。

そのせいで、かなり空振りしてしまったのだが。

「よし、いける」

体もようやく目覚めてきた。サービス時間は終わりだ。

もう百円投入し、ゲームスタート。

バットを持ち、野球のゲームの見様見真似で、フォームを整える。少し離れた位置にあるピッチングマシンから、白球が放たれる。タイミングを合わせて、一気に振りぬく。

ガギイイン、つていう金属音が鳴つて、手が凄く痺れてきた。芯に当たらないで、端っ子に当ててしまつたか。

もういっちょ。

次に出てきた球をまたもや芯を外して打つてしまい、球は僕をあざ笑うかのようにファールの白線を軽々と越えてしまつた。

修学旅行の夜に、男部屋で集まつてえつちな本を見ていた時くらい集中して球を見なきや。

……一応、断つておくけど、僕はそういう本に興味はない。

読んでいたのは明とかその他数名で、僕は先生の足音をいち早く察知する係りに任命されていたのだ。

どうでもいいや。さて、次の球が来た。最大まで見極めて、バットを宙で走らせる。

そして当たつた。今までのガギイインていう汚い金属音ではなくて、キイイイン、という澄んだ音が僕の鼓膜を刺激する。

球がバットに当たつた時も、それまでのようには反動は一切なかつた。

これが、真芯で当てた時の感触か。癖になりそうだ。

さて、僕が打つた球は、ピッチングマシーンの遙か上空を飛んでいき、ホームランと書かれている丸い看板の方向に真っ直ぐ進んでいく。

「行け！！」

調子に乗つて大声を出してしまつたが、球は途中で失速し、緩やかな放物線を描いて看板の少し下の位置に激突した。

「あー……」

「惜しい。恭史、頑張つて」

「うん」

楓が応援してくれているので、僕はまだまだ頑張れます。

その後、計五百円を使用し、百球の球を目で追いかけ、バットで連續的に暴行を加えた。

この表現を人間に使つたらかなり危ない感じになるが、相手は白球なので、そういうた苦情は甲子園球児に言つて欲しい。
その結果は……。

「一回もホームランにならなかつたね」

「……ごめんなさい」

あんな事を言つて格好つけてバッター・ボックスに入つたくせに、いい打球は十球あるかどうかだつた。

僕と楓は今、バッティングセンター内にあるロビーにてジュースを飲みながら休憩中。

青いプラスチック製の長椅子に座り、壁に背をもたれかけながら、衝動的に買つた甘すぎる「ココア」をすすつた後、燃え尽きたボクサーみたいに目をつぶつて俯く。

「恭史、そんなに落ち込まないで？」

右横から楓の心配をしているような声が聞こえてくる。

あーあ、ビギナーズラックとかあると思つたのに。やつぱりスポーツは甘くないですなあ……。

「大丈夫？」

「あー……うん。なんか腕がふるふるし始めたけど、後百球はいける。というかいつてみせる」

そうしなければ、あの言葉が嘘になつてしまつではないか。僕にだつて、嘘にしたくないものぐらいはある。

「無理しないで？」

「……楓。そんなに僕が信用できないの？大丈夫だつて。次こそ余裕でホームランだ」

「でも」

「さてと、もう十回ほど、暴行加えにいくか」

五回ぐらい、ピッチングマシーンが反抗期に陥つて、暴行加えられそうになつたけどね。

結局、ホームランなんていう夢物語は実現するわけもなく、無駄

に疲れた体を引きずりながら、僕たちは夕陽に染まつた帰り道を歩く。

人気のない田舎への細い通り道。楓とは反対側の横に、小さな川が流れ、自然の音楽を奏でていた。

「もう少しだつたね」

「……そつかな」

最後の方は疲れてきたせいか、スイングスピードが遅くなり、フアールとか空振りしてばつかだつた。……虚しい。

「そんなに落ち込まないでよ。……あつ、そうだ」

横を歩いていた楓は、手をパンと叩いてから、夕陽に着色された顔を破顔させた。

「ん？」

急に立ち止まつてしまつた彼女に、不審を乗せた視線を投げかける。

楓は赤い光を背景にして、僕に微笑みかけてくる。
そして、少し離れて立ち止まつている僕へと招き猫のよつに手を動かして、こっちこいと示してきた。

「なに？」

僕は楓の指示通りに、彼女の前に立つ。

すると。

「えいっ」

「うわ！？」

いきなり楓が飛び付いてきた。

そんな、いきなりの出来事に硬直してしまつた僕の耳に、楓の唇が近づく。

「恭史」

「な、なんでしょうか」

「ふふつ。な、こそ、その返事」

楓が喋るごとに、耳に息が吹きかかり、全身、余す場所なくゾクゾクとにかが駆け抜けていく。

楓の体が発する蜜のようないい香りが僕の鼻孔から体内に侵入し、思考をショートさせようと暴れまわる。

「か、楓？」

彼女の大胆な行動は本日一回目。なんていきなり……。

「ねえ、恭史？」

「は、はい」

肩に顎を載せてきた。淡い栗色の髪が、僕の首筋を掠め、体を震えせる。

「良い事を教えてあげよっか？」

「良い事？」

実は宇宙人なのー、とか？　いや、別にそれは良い話じゃないや。僕は宇宙に興味ないし。

そんな事はさておき、楓の顔は見えないけど、なんとなく笑っているような気がする。なにを言われるんだ、本当に。

「私ね……」

楓はそこまで言つて言葉を溜め、息を吸い込む。一体これからなにを言われるのかと、僕は戦々恐々していた。

僕の背中に回されている手に、優しく力がこもった。

体は今まで以上に密着して、僕のハートブレイクはもう限界値にまで達そうとしていたのだが、それに止めを刺す言語が鼓膜を搖らす。

「恭史の事が、だーい好きだよ」

「…………あう？」

「だ・か・ら。私こと相崎楓は、幼なじみである真田恭史が大好きつていう話。もちろん、異性としてね」

「あ……その……ええ！？　あ、あの、ホームランは……？」

「あの約束は恭史がしたものだよね。で、果たせなかつた。だけど、これは、私が自分の意志で言つたもの。反則じゃないよね？」

は、反則じゃないよね？　なんて耳元で言われたらあばばばばおつと混乱してしまつた。

「え、えっと。ほ、僕なんかでいいのかな？」

「恭史じゃなきや、駄目なの」

楓は僕から一歩離れる。そして夕焼けに染まっているのか、それとも本当に朱くなっているのか顔は肌色じゃない。

チンピラに囮まれて、財布だけじゃなくて命の危機に晒されている一般人のごとく動搖しまくっている僕には、それが判別できない。ただ、楓の表情だけは分かった。僕の大好きな、彼女の温かい笑み。

恥ずかしくてそれを直視する事もできないので、僕は目を逸らしながら答える。

僕にまだ、動搖なんていう感情が残っているなんて驚きだ。

「そつか。……えーと、よろしくお願ひします」

「ふふつ。」ちらりと

「……えーと、いつから僕の事を好きだったの？」

「え？ うーん……秘密かな」

「えー」

「ふふつ、いつか教えてあげるから。すねないで」

こうして、僕達は恋人になりました。

これから、楽しい楽しい日常が待っているという事を、僕は全く疑つていなかつた。

だけど、すでに壊れ始めていた日常は、そう簡単に戻つてはくれない。

「ここから回り始める。

狂狂^{クルクル}と。おかしな、おかしな、歯車が。

人気のない裏通り。街灯さえまばらな、その廃れた通りに、一人の男が横たわる。

最初から決めていた。

殺すなら、私とはあまり関係の無い人物にしようと。それでいて、いなくなつても誰も悲しまないような社会の「ゴミ」なら、もつといい。

そう、「ゴミ」。

生きていても人に害しかもたらさないような、あの人が大嫌いだと言っていた、犯罪者。

私の目的とは少しずれてしまつけど、それでも、初めて人を殺すのだから、難易度は低い方がいいに決まっている。

「た、助けてください」

目の前にいる「ゴミ」が震えながら喋つた。

散々、痛めつけて、動けないようにしたのに、まだまだ喋る気力があるなんて、少し驚きだ。

「や、止めてください。もう、こんな事しませんから」

今にも泣きだしそうな声。だけど、聞く耳もたず。

無言で「ゴミ」に近寄り、そいつの左手を掴む。そして手近にあつた岩の上に、岩盤浴させるように置く。

右手に持つていた金属バットを両手で握り、頭上高く振り上げる。

「や、止めてください！」

とうとう泣きだしてしまつたその男の腕に、岩に載せられて衝撃を和らげる事が出来ないそこに、私は力の限り振り下ろす。

「ぎゃああああ！」

「ガーン！」 という音が響く。人を殴ったような感覚じやなかつた。硬い岩を本気で殴つたような感触が、バットを伝つて手に戻つてくる。

る。一発だけじゃまだまだ喋りそうだったので、さうこ一発二発と、叩く場所を変えて振り下ろした。

手のひらにぶち当てた時は、その裏側にある爪が、プラスチックが割れるような音を発して碎け散り、綿に染み込ませた水が滲み出でくるように血が溢れだす。

息が止かり、暑くもないのに汗が噴き出しきて来る。額に浮かんできた汗を拭う。

こんな場所に、自分がいた痕跡を残してはいけない。

なる。

そうが、ならば、駄目だ。和の目的が果たせなくなり、だから、証拠を残すような馬鹿な真似は出来ない。

灰色の地面を赤く着色している「II」を眺める。ここは、犯罪者。罪は怪力で、心が狂う才ひが、陳情台に立つては又が地に立たない。

たのだから仕方がない。

ろうか。

そんな事を考へると、自然と息が正常に戻る。汗も止まつた。
後は、このゴミを、本物のゴミに変えるだけ。動かない人間はた
だのゴミ。 いらない。死んじやえ。

「へえ……せ、せ」

ぶるぶると震え、体の至るところから血を流している丸々と太た顔にメガネをかけたゴミの頭部を、金属バットで殴りつける。

ゴン！ といつ音がビルの壁に反響する。頭はひしゃげ、白眼を剥き、割れた額から赤い水を流すそれを見ても、私はなにも感じない。

「あは」
心が全然痛くならない。これもそれも、あのせいだ。

一度零れた笑みはもう止まらず、その勢いを殺す事も出来ない。

一
あは

アーティ、『ドミナ』に粗鄙しき場所に放置してあげなくちや。

第3話 君とバイト場で

バイトをする事にした。

なんの変哲もない日常の中から、僕の事を抜き出してみたけど、特に驚く事はない。当たり前だが。

楓とカツポオになつてから一日が過ぎた月曜日の放課後。僕はファミレスの面接に来ていた。

ここは昨日、楓と一緒に入った、ファミレスっぽいなにかという雰囲気を持つファミリーレストラン。

制服姿のまま窓際のボックス席に座り、向かいにはひいこの店長さんが腰を下ろしていた。

学校帰りになんとなくこの辺をふらふらしていたら、昨日は見かけなかつたバイト募集という張り紙を見つけ、ふらふらと夢遊病者のごとく店の中に足を踏み入れた。

そして張り紙を見たという事を店長さんに伝えると、早速面接やるぞ「ヒラアーーなどと脅されてしまつたのだ、Li.eだけど。

「採用！！」

「え？」

清潔な白衣を身に纏い、白いコック帽を被り、顔には無精髭を生やしている穏和そうな店長さんが、いきなりの大声で合格通知の言葉を白球のように放つてきた。

それを僕は、昨日のバッティングセンターで嫌といつほどやつた動作を繰り返し、見事ホームランにした。

……というのはやはり無理だったので、素直にそれをグラブに收める。いや、待て待て待て。

「あの、僕、履歴書すら見せてないんですけど」というか、まだ作つてないし。

「いいんだ、採用！！ そんなの後で見せてくれば文句なし。採用！！ イケメンが欲しかつたんだ！！ 採用！！ ウチの厨房に

はフツメンしかいないからな、採用！－

ちょ、どんだけ採用採用叫ぶんだこの人。なんかもう、口癖みたいになつてるじゃん。

というか、僕はイケメンですか。眼科に行つた方がいいと思つけど。

「いつからバイトに来れる！－？」

「え、えーと、今日からでも大丈夫です

「分かつた！－ ジやあ、明日から来てくれるか！－？ 学校には行つてるよなあ！－？」

「はい」

「じゃあ、明日の午後六時にこの店に来てくれ！－！」

「はい」

「じゃあ、よろしく！－！」

「よろしくお願ひします」

店長さんに挨拶をしながら、僕は店を出た。東条さんと同じくらしいハイテンションな人だから、少し距離を置いて接しようと。ローテンションな僕には、ハイな人と触れ合つのは凄く疲れる事なのだ。

次の日の放課後。一緒に帰ろうと言つてきた楓や明からの誘いを断り、適当に時間をつぶしながらやつて来ました商店街。

お洒落な外装の店の中に入り、店長さんの姿を捜す。

「おお！ 真田！－ よく来てくれた！－ では早速、この服に着替えてくれ！－ 君には主に接客を担当してもらつからな！－」

「え……厨房じゃないんですか？」

「厨房は間に合つてるんだ！－ 君は顔がいいからな！－ 女性客にモテモテだ！－」

「……僕、彼女がいるんで、そういうのは遠慮したいんですが」「じゃあ、モテなくてもいい！－ むしろ俺に寄こせ！－ ただし、

営業スマイルは忘れるな！！

やつぱり駄目だこの人。話してると疲れる。歌が下手なガキ大将が唄う時ぐらいい声がでかいし、いちいち取る仕草も大げさだし。ふう……。

でも、仕事なのなら、別にいいかな。楓も納得してくれるだろうし。

最初の三十分間でレジの使い方を芸を覚えさせられるイルカのように叩きこまれ、接客の仕方を餌で釣つて色々させる熊みたいに仕込まれた。

この表現でいくと、僕は明らかに人間扱いされておらず、客寄せパンダのような感じだ。さっきから店長が『君がいると女性客は増える！』などと言つてるので、パンダというのは間違いではなさそうだ。

というか、僕はそこまでモテないぞ。告白されたのだって、昨日の楓のが初めてだし、女の子が男に黒い物体をプレゼントするバレンタインデーとかいう行事には全く縁がなかつたし。

あつ、楓からは手作りのチョコケーキを貰つてた。羨ましいか、野郎ども。

僕が色んなものを教え込まれている間には、お客様さんは来なかつた。夕飯時なのに、これいかに。

この店の制服である、白を基調としたエプロンの裾らへんを、なんの意味もなくにぎにぎしたりバツバツしたりして時間を潰す。

「笑え！！」

「グハツ」

店長さんに思い切り背中を叩かれた。一時的に息を上手く吸い込む事が出来なくなり、本気で店長さんを睨みつける。

「睨むな睨むな。笑つて笑つて！！ 営業スマイル！！」

そう言つて二カツと白い歯を出して笑う店長さんは、僕の汚れた心では直視出来ないぐらい、純粹そうな人に見えた。灰になりそう

です。

「あつ、そうだ！！君に店の仲間を紹介しなくちゃな！！ すまんすまん、気がまわりにくい男つて評判なんだよ、俺！！ ガハハハハ！！」

そこは笑うべきじやない。

店長さんが僕から離れて、置くの方に行く。

「こつちに来てくれ！！」

店長さんに促され、暖簾がかかっていて中が見えないようになつている場所 廚房の方に歩いて行く。

フロアと厨房を僕の独断と偏見で評価するならば、砂漠と南極だらうか。

フロアの方はお客様のために効きすぎじやないかつてぐらいの冷房を入れているので涼しげつーか、むしろ寒い。この店の制服が半袖なのも、寒さを手まねきしているだらう。

で、厨房。

中は広く、洗い場、野菜などを切る場所、肉を焼く場所、コンロがいくつも置かれている場所などと分かれていて、壁際にはでかい業務用の冷蔵庫が二つ並べて置かれていた。

そして……暑い。

今は稼働していないが、コンロで火を使つたり肉をジュー・ジューしたりするので、その時にかなりの熱を放出するのだとみた。

そして、まな板の前に一人の男性が立ち、暇そうにしているが、あれは置物だらう。などと有り得ない事を想像してみました。

「はい、ちゅううううう もおおおおおおおおくううううううゲホッゲホッ！！」

むせる前にその大声を止めればいいのに。

「あー、仕切り直し。えー、彼が新しく入つたバイト君だ。イケメンだからつて嫉妬して虜めないようにな、フツメン達よ！！ がははは！」

「よ、よろしくお願ひします」

なんか凄く挨拶しづらへする紹介内容だ。

厨房の人達への挨拶が終わつた時、来店を知らせるチャイムが店内に軽快に鳴り響く。

「あつ、真田くん、客だ！！初めての接客を成功させてみろ！！」初めて能力に目覚めた主人公みたいに、最初からなにもかもが上手くいくわけないじやないか、とは思いつつも僕は言わない。

頬をかいて、「はい」とか真面目くんを装つてみるだけなのだ。厨房が外部から見えないように設置されている長すぎる暖簾を左右に開いて、僕はフロアに戻る。

僕の初めての接客相手は、若いカポオだった。

初体験がこんなバカッブル（推定）だとは、なんかやり辛いなあ……。

女人の方に話しかけたら、彼氏から色目使つてんじゃねえよ！

！とか言われたら嫌だ。……言われないって。

「笑つて行つて来い！！」

「こうですか？」

持てる限りの営業スマイルを顔に張り付けて、僕は店長さんを見る。

「なんか陰があるようにな見えるけど、それでもよし…… ああ、行つて来い！！」

「はい」

金魚すくいをやる時みたいに、少し緊張しながらバポオ（バカッブルの略ですぜ）に近づく。

「いらっしゃいませ。二名様ですね？きちゅえん席と禁煙席どじゅらが……すいません、死んでもいいですか？」

「ええ！？」

僕のいきなりの発言に、彼氏さんが大げさに驚く。

「大丈夫です、あなた達に迷惑はかけないんで」

「そういう問題じやないでしょ！？ ちょ、店長さーん！…」

店長さん呼ばれて来る 僕は厨房にいた男性その一に肩を掴まれて拉致される 店長さんが必死に謝つてるのを遠目に見る 「うむ、なんとも僕らしい なんて思つていいか分からなかつたので、とりあえず納得してみる。

「誰でも失敗はある…… 落ち込むな…… しかし、死んでいいですか、とは流石に聞いちゃ駄目だ……」

「すいません」

「分かつたらOK!! ほら、水を汲んで持つてけ!! 注文が決まってたら、一緒に聞いて来いよ……」

「はい」

清潔なガラスのコップに水を注いで、お客様が座つた店の真ん中辺りにあるボックス席に近づいていく。

お盆からコップを取り、一人の目の前にそれを置く。

そして、僕は無料で提供できるスマイルを顔に浮かべる。どうでもいいけど、笑顔つて疲れる。頬の筋肉がピクピクしてきた。

「ご注文はお決まりでしょうか」

先ほどの僕の狂言を真に受けていた彼氏さんが、恐々と見上げてきながら注文する品を言つてきた。

僕はその品を、小さな電卓みたいな機械に打ち込み、注文をとる。

「分かりました。少々お待ち下さいませ」

よつしー 言えた!! 今度は噛まなかつたぞ! うつしゃー、テンション上がってきたー。冗談です。

客に頭を軽く下げるから、店長がいるカウンター席の中に入る。「やればできるじゃないか!!」

「ガハッ」

「ガハハッハハ!!」

別に僕は笑つたわけじゃない。ただたんに、店長さんがゴリラもビビるくらいの力で背中をバンバン叩いてくるから、声が出ただけなのです。

暴力はよくないっす。

料理が出来上がったので、厨房の人が作った湯気が立ち昇るそれを、お客様の席に持つていき、それぞれの前に置いた。

全部、注文が来たかどうかを確認してから、フロアに戻った。教えてもらつた仕事である食器洗いを機械の如く行つては、横からガキ大将もびっくりな大声で話しかけられる。

「真田くんは、もう夕飯は食べたのか！？」

「いえ、まだです」

「よおおし！！ それじゃあ、新商品の味見役になつてくれないかね！！ 廉房の一人に頼んでも断られてしまつたんだ、がははは！」

「いいですよ」

ちょっとお腹が減つてきたし。味見役つて事は、料金とかも支払わなくていいのかもしない。

「よおし！ よく了承してくれた！！ それでこそ男だ！！」

「……ありがとうございます」

この程度で褒められてもいいのだろうか。

僕はあまり、人から褒められるような人格じゃないから、なんだか落ち着かない気分になる。

店長さんに連れられて、僕は厨房の奥にある休憩室に来ていた。狭い空間に、机と椅子があるだけの簡素な室内。

そして僕の目の前には、紫色のパスタっぽいにかつてか、私危ないですよー的なオーラを放つてはいるものが皿に盛られて置かれていた。

ふむ。社会になんの影響も与えない僕なんて死んでしまえという、店長からの無言のアピールだろうか。

死んでたまるかー、これから楓とバカツブル路線をジェット機で激走するんてい。

「どうした真田くん……さあ、食え！！ 遠慮なんてするなー！」

「はい」

遠慮をするなどか言われても遠慮したいものは世の中には「ローロー」と口しているという事実を、正面に座っている店長さんに言おうと思つたけど止めておいた。なんて反論されるか分からないからだ。

フォークを手に取り、毒物かなにかと勘違いしてしまひほどの毒々しい色をしたパスタを巻きつける。

うわ……具のHビすら紫色。なにで着色すればいいんだろ？

？絵の具？

巻きつけた麺を鼻の先に持つていい、匂いを嗅いでみる。うん、

ケチャップの良い匂いはする。しかしなぜか紫色。

「さあ、食つてみてくれ！？」

「はい」

ここにきて僕はもの凄く後悔していた。厨房の一人が味見をすることを断つていたのには、こうした感じになるのが分かり切つていたからだろう。

だつたら僕にも教えてくれればよかつたのに。あれか、生贊ですか。平成の日本で僕の尊い命を毒味役という職業で消し切るつもりなのか。

許すまじ……！

とかなんとか思いながら、僕はパスタ（だと思つてたけど実はナポリタンだった。恥ずかしいからパスタのまま通すぜ）を口に運んだ。

「むつ

「美味しいか、真田くん！？」

「不味いです」

こんなのも食えるかー、と僕はフォークを机に叩きつけた。
なんだろう、これ。

イカのように歯じたえがある麺だがもはや分類不能、そして茄子のような味。ここまではまだいい。まだ我慢できる。
噛んでみると、それらの味の奥からなにかが顔を出す。

「これは……。

「柑橘系の味がします」

「正解！！ 隠し味にオレンジの汁を麺の生地に練り込んでみたんだ！！ 味はどうだ！！」

「だから、美味しくないですか」

「ビニが不味いんだ！？」

シンジラーナーイとこう顔をしながら、机に身を乗り出し、接近していく店長さん。

ビニがと言わいたら全部としか答えようがないのだが、それを言つたらなんとなく銃殺されそつたので口をつぐむ。

「うむ……なんて言つたらいいのや。」

ビニは得意の嘘を交えながら、遠回しに伝えるべきか。

「えーとまずですね、この麺なんですが。こう、噛んだ瞬間に爽快感とは逆の感覚が襲いかかって来まして、あれ？僕、ゴム噛んでたつけ？とかなりまして、いつたいなにをビニやつたらこんな未知の触感を出せるのかと少しばかり感動しますが、そこはやはりあれです。うん、不味い。あれ？ヤバい。遠回しに言つつもりだったのに、結構、率直に言つちやつてるとかいう考えにたどり着くわけですごめんなさい」

あちやあ、やつちやつた。

駄目だしばかりじやん。まあ、しじうがないよね、僕つて嘘をつかない正直者だし、てへつ。

もう、最後まで言つても大丈夫だろ。むしろビニで止めた方が店長さんのためにならない。

「あと、これです。麺の味。なんですかこれ。昼の砂漠を素足で歩いて、夜の砂漠で地面に寝転がつて寝るぐらい暴挙ですよ。もつというなら、アマゾンの奥地に半袖短パンで行くぐらい無謀です。さらに言つながら、南極の調査隊に裸で同行するぐらい命知らずですね」

「「つる採用！！」」

「……「つるサイヨウ？」」

「「つる採用！－！ うつ採用！－！ うつ採用！－！」」

……ああ、もしかして、「つるさ」にっていう意味の、『「つるさこよ』か？発音の仕方が採用にしか聞こえないのだが。

あの後、なにを言つても『「つる採用！－！』としか言わなくなつたリピート店長を仕方がなく無視して、僕は休憩室の扉を開ける。そしたら、扉に貼りつくヤモリみたいに、厨房にいる男性その1とその2が聞き耳を立ててている体勢で固まつていた。

「なにしてるんですか？」

「まあ、ほほ予想通りだ」

「ははっ、俺つてば予知能力もあるんじゃねえ？」

その1とその2が訳の分からない事を言つて、散つて行く。この人たちも無視しようかと思つたけど、やつぱり、その1だけを捕まえて聞いてみる。休憩室の扉を閉めて、その人と向き合つた。

「もう一度、聞きますが、なにをやつていたんですか？ その1さん

「なんだその呼び方。オレの名前は小堂 ショウダウ 楔 クサビ だつて教えただろ？」

「分かりました小1さん」

「ごつちやになつてんじやん。あんまり先輩舐めてると、あつあつチヤーハン食わせるよ？」

「それは恐い」

「……スープをストロー使つて直接喉に流し込むぞ？」

「実にユニークだ」

「敬語すら使わないとか、なんなの君」

「実に面白い」

「面白くねえよ」

なんか、突つ込みもボケもローテンションだ。この人は僕と同様に低血圧の人なのかも知れない。

この小堂さんは、黒髪のウルフヘアでメガネをかけていて、そ

の下にある眼光は結構、鋭い。醸し出している雰囲気はクールとう感じだろうか。

「それで、小堂さんはなにをしていましたか？」

話を誤魔化す気だったのかもしれないけれど、僕はそう簡単には誤魔化されないぜ。

小堂さんは、視界の端に芸能人でも見たかのように、僕から露骨に視線を外し、頬をポリポリと搔く。

「あー、まあ、あれだ。君が休憩室に連行されていったのを見て、ちょっと心配になつてな。ここのお店長は、ゲテモノしか新商品を考えないくせに、それを批判されるとかなり怒るんだ」

「あ、あれですか？ うる採用！！ とかいう、不可解な言語を発する状態になるんですね？」

「おつ、敬語になつたな。その調子で頑張れ。店長の状態はそんな感じだ。ああいうふうになつたら、無視するに限る。大丈夫。三十分もしたら、元通りになるから」

「わかりましたー」

小堂さんとの会話が終わり、僕はフロアに戻つた。僕以外のフロアのアルバイトさんと雑談をしながら、客がくるのを待つ。なかなか雰囲気が良い場所だから、ここなら以外と長く続くかもしれない。

まあ、店長さんの病気みたいなのに關しては口を瞑つ。チリチリーンという風鈴みたいに涼しさを与える音が出て、お客様の来店を告げてくる。

練習した営業スマイルを、顔面の筋肉を酷使して顔面に貼り付けてから、入口の方に顔を向ける。やっぱり疲れるなあ……。自然に笑うのならば、どうつてことないのに。

「おつ、真田くんじやないかあ！ なにしてんのつ、こんな場所でつ！」

「東条さん」

外と中を繋ぐ扉を開けて入ってきたのは、学校の制服を着ている、

ハイテンション娘・東条さんだつた。

東条さんは一人のようなので、カウンター席でいいかどづか尋ねた所、「ちつちつちつ。甘いな、真田くんつ。私は今日は、デートなのだつ」とこう、言葉を戴いた。

ほう、『テー』ト。

東条さんの周りを確認してみる。

男、いない。女の子、いない。幽霊、たぶんいない。近くにいるのは接客をしてくる僕だけだ。

「……あー、なるほど。空氣と『テー』トなんだね。安心して。僕なんか、一昨日まで三五六十五日、空氣と『テー』トしてたから」

「馬鹿にしないでくだせえ！…！これでも私は男の子にモテるんだぜ～！…！」

「それは知つてるよ。でも、空氣と『テー』トなんでしょ？」「違つていつてるじゃないかっ！…！もう少ししたり、お相手が来るのであ！…！」

「口一口笑顔のまま怒るといつ、僕からしたらギターを一日でマスターするぐらい難しい事をやる東条さんを、少しだけ尊敬した。いやあー、はつはつはつ、冗談でつせ。

お相手が来ると何度も言つてるので、その言葉を信用した僕は、彼女をボックス席に通し、水を置く。

「おおつ！…！」

「……どづいたの？」

あまり関わりたくないテンションの高さだけび、自然と話してしまうのは、彼女の憎めない性格のせいだらうか。

「いやあ～つ。真田くんに接客されるなんて、少し照れるじゃないかあつ！…にやははは～！…」

「そつか。では、『じゅつじつ』

東条さんが言つていたお相手は、約十分後に来店してきた。

「あれ？ 真田。お前、こんな場所でバイトしてたのか？」

「……明。え？ なに、明が東条さんのデート相手なの？」

学校の制服を着たままの、茶髪ツンツンヘアで見るからにチャラそうな男、カミヤマアキラ上山明アキラだった。

「うーん……デートになるのかな。お前に断られて傷心しながら学校の中を歩いていたらさ、部活帰りの東条を見つけて、ここで飯を食わないかって誘つてみたんだ」

「へー。本当に明は女好きだよね。中学の時に二度の飯、ていうか、酸素よりも女が好きだつて断言してたよね」

「事実だが、今ここで言つことじやない」

眉間に皺を寄せたチャラ男が、店内に視線を走らせる。そしてボックス席に座つている東条さんを見つけると、パツと笑顔になつた。

「んじゃ、俺はもう行くから」

「待てえい」

走り去ろうとする明の腕を掴み、思い切り後ろに引く。彼はバランスを崩して地面に倒れこんだが、ダルマのように瞬時に起き上がる。妙な場所だけ俊敏な奴だ。

「なにすんだよ」

「いや、暇なんだ。相手してくれ。その間、バイトは休むから」「バイトしてろ！ 堂々とサボり宣言してどつすんだ！」

「独立宣言なんてしてないよ」

「誰も言つてねえだろ！」

ゴリラのように胸を拳骨で殴り、ウホウホウホ！ といつ奇声さえも発する。うん、冗談です。明は端正な顔をしたゴリラみたいな容姿じゃないんだ。

結局、明は東条さんのいる席に行つて、談笑し始めた。

明から注文を受けてからカウンター内に戻つてきた僕は、いつの間にか戻つてきていた店長さんにお咎めの言葉を戴いている。

「あんな、真田くん。いくらなんでも、サボり宣言を店内でしちゃ駄目だ」

「すいません」

さすがにふざけ過ぎた。

昨日から、なんだか僕の心なのに他人の心のように分からなくな
る事がある。

あー、あれだ。

心の中に封印していたあの性格が久し振りに自己主張をしてしま
つたからで、しかも閉じ込めている間にもう一つの性格の方はかな
りレベルアップしてたらしい。

今では、無意識の中にぐしゃばるようになってしまった。抑えきれな
くなっているんだ。

楓が相手ならば、まだ理性がいつもの数十倍働いて、Sを丸めて
「ゴミ箱に捨ててくれるのだが、東条さんや明相手だとなぜかサボり
始める。

だからさつきから相手をおちょくるような発言ばかりしていたの
だが、気を悪くさせてしまつただろうか。

もうしそうなら後から謝らなければいけないなと思い、二人が座
つている席を横目で確認してみる。

「そうなのだよっ、上山くん！！ またにその通りなのだつ、にや
はは！」

「だよな！！ 真田つて基本的にむつりだよな！！ いつも無表
情のくせに、相崎と一緒にいると体ばっか見てるし！！ あははは
は！！」

……うん。

とりあえず言いたい事は、僕は楓の体ばかり見てません。

謝らなくてもいいというか、むしろぼくの方が心理的虐待を受け
たので損害賠償を請求したい気分だけど、それは呑み込んでおく。
「あ、それと真田くん！！ 知り合いで、あまり長話してはいけ
ないぞ！！ 仕事中だという事を忘れるな！！」

「次から気をつけます」

「よし！！ それじゃあ、新商品の……」

「食器洗つてきますね」

なんだこの店長さん。ついさっき駄目出しされたばかりなのに、全く反省の色を見せないどころか、暴走の色を濃くしてゐよ。

「待つてくれ真田くん！！ 今回は自信あるんだ！！ 本當だ！！」

お願ひだから食つてくれ！！」

「……さて、食器洗わなきや」

「あー！！ 無視された！！ バイトの子に無視された！！ 僕が爬虫類っぽいからか！？ だから無視するのか！？」

ダンプカーが砂利道を五台続けて猛スピードで走り抜ける時ぐらいうるさい声を発しながら、店長さんは僕の肩を掴んできた。嫌々、振り向いてみると、なんだか泣きそうな顔していた。

「……本当に、自信作なんですね？」

「ああ！！ 間違いない！！ 今度こそ、君の肥えた舌も満足するに決まつていいーーー！」

「分かりました。それでは、もう一度だけ」

別に、僕の舌は肥えているわけじゃなくて、店長さんの舌が壊滅的に損なわれているだけなんだという事実は伏せておく。

「つる採用！！」

「失礼しました」

「つる採用！！ つる採用！！」

あれで自信作だと、本当に店長の味覚と視覚と嗅覚とセンスを疑う。

地球育ちのサイヤ人が、笑顔で人類抹殺計画を遂行するくらい有り得ない料理を出されてしまつた。

とりあえず、壊れた店長を休憩室に放置して、僕は厨房に出る。なにかの料理を作りながら、小堂さんが僕の方をチラツと見てきたが、結局はなにも言わずに火の調整をし始めた。

さつきの宣言通り食器を洗おうと思つたら、すでに誰かがやつていた後だったので僕はフロアに戻り、机でも拭こうかと思い布巾を濡らした。

丁寧に絞っていると、ニュースキャスターの冷静な声で異常な事件を説明しているのが聞こえてきた。

『今日の朝八時頃、ゴミ箱に入っていた身元不明だった死体の身元が判明しました。佐々木^{ササキ}頼一^{ヨリカズ}、二十一歳。大学生のようです。これも不同集成の犯行なんですかね、御陵さん^{ミササギ}』

顔を上げ、ニュース画面を注視する。

御陵と呼ばれた男の人は、犯罪心理学に精通しているらしく、その筋では有名な人のようだ。

その人が偉そうに今回の事件についての見解を話し始めたが、僕の視線は、佐々木頼一の顔写真に釘付けになってしまつ。

そうだ、この、丸々と太つた顔に良く似合う丸メガネ。ボサボサになつてゐる髪の毛。細く、気持ち悪い目は、忘れようにも忘れられない人物だ。

チラッと、無意識の内に東条さんの方を見てしまう。

僕が見てゐる事に気付いた東条さんが、笑顔で手を大きく振つてきた。僕はそれにアイーンをして返す。冗談でつせ。

東条さんから視線を外し、もう一度テレビ画面に映し出されている写真を見る。

うん、やつぱりだ。

今報道されているこの事件は、今日の朝に死体が発見されたものだ。

頭は食虫植物のように口を開き、爪は赤い花を咲かせ、体は暴力のフルコースを堪能していたらし。

そして発見された場所が、工場のゴミ箱というものだから、犯人の異常さが窺えるというもの。

加害者はゴミはゴミ箱に捨てようとか思ったのだろう。僕だったら間違いなくそうする。

そして犯人の思考が一緒だつたとしたのなら、僕も異常者の仲間入りという事になる。

犯行時刻はおそらく、今日の深夜二時頃。どこか別の場所で殺害

されてから、「ミニ箱に入れられたというのが、ネットやテレビで集めた情報である。

そして、この佐々木頼一といつ男とは、直接的にではないが面識がある。

中学三年生の夏。

蝉がやかましく鳴き、コンクリートが熱を反射してくる住宅街。うだるどこりか、茹あげられるような暑さの中での学校からの帰り道、僕や楓、明は東条さんからある相談を持ち掛けられていた。

『ストーカー被害にあつてゐるって?』

『そうなのだつ』

いつもよりも元気が九割ぐらい減つてゐる東条さん。顔は未來から来た自称猫型ロボットよりも真つ青になつてゐるようにみえた。

『最初は勘違ひだと思つてたんだけど、さすがにいつものように視線を感じいたら、そんな事はないはず。でね、最近は部屋に置いてある家具の位置が微妙にずれていたりするのだ。私、どうしたらいいんだらつ……?』

家具の位置がずれているという事は、ストーカーは家の中に入っている可能性が高い、というかもう入つてゐるのだろう。

東条さんは親が海外赴任中であるため一人暮らし。ゆえに、親などが家具をずらしたとは考えられない。

『そつか……。警察には行つたの?』

僕がそう聞くと、東条さんはゆるやかに首を横に振つた。いつもの元気を銀河の果てに遠投でもしてきたのだろうか。

『だつて、ドラマとかだと、なにか起こつてからじやないと、警察は動いてくれないみたいだし。いつ変な人が入つてくるのか分からぬ怖いながら暮らすなんて、もう嫌だつ』

『まずはあれだな。うん、やつぱり警察に行くべき。そこで相手にされなかつたら……そうだな……俺達がつきつきりで警護してやる! なつ、真田?』

『うん、それはいいかもしないね』

こんな会話が過去にあり、僕達は東条さんの周りを常に観察する事についていた。

街に出かける時も僕達がついていき、周囲に怪しい人物がいないかどうかを確認する。

その結果、いつものように少し離れた位置からこっちを見てきている男を発見する事ができたのだ。

そいつが、佐々木頼一。東条さんのストーカー。高校に入つてからはその話を聞いていなかつたので、被害は治まつたらしい。

まあ、その後もこの男は、色んな人の後を追跡してたらしこけど。それにしても、殺されたのか……。驚きはするものの、可哀想だとは思えない。

だつて、犯罪者だもん。不同集成に比べればまだ可愛いものだけど、それでも罪を犯しているという点においては、この人もあいつも同じ。

それに、ストーカーだし。女性に与える精神的な被害が尋常でないっていう話だもんな。死んでも、どうでもいいやつ。

今まで捕まらなかつたのだって、警察が動かないからつていう以外にも、こいつが上手く隠れているという理由もあるだろうし。犯罪者のくせに、精神的被害を負わせているくせに、根本的に逸脱しているくせに、逃げまわる。本当に、腐った男だ。

「どうした真田。なんか恐い顔してるぞ」「別になんでもないですよ」

なぜか隣にいた小堂さんにそう言われ、僕は慌てて顔の筋肉を緩める。恐い顔をしていただなんて、佐々木に対する嫌悪が出ていたのだろうか。

「それにも……」

さつきからこの御陵つていう人は、とんだ的外れの事を言つてる。なにが不同的仕業で間違いないだ。あなたはなにも分かつていな。それで本当に、犯罪心理学に精通している人なの?

今回の犯行は、絶対に連續殺人犯・不同の仕業ではない。僕はそう断言できる。

だつてさ、明らかに殺し方が違うから。

例えば。

つい最近、起きた殺人事件を挙げよう。
僕が好奇心に負けて、別世界に逝つてしまつといつ異常に陥つたあの事件である。

被害者はまだ身元が判明せず、捜査も難航しているようだけど、あつちは不同集成のもので間違いない。

だつて、殺害方法が昔、この街にいた時と同じだから。同一じやない点を挙げるならば、家族を狙つていかない所かな。

被害に遭つたのは、どこにでもいる普通で平凡な一般家庭だったし。

だけど、殺害方法は同じ。

身元不明になるまで被害者の顔をぐちゃぐちゃにして、身元が判明するようなものを全て盗んでいく。

そして、人を恐怖に陥れる。

一度、あいつに会つたら聞いてみたい。

なんで、人を殺すんですか って。

人を殺しても、メリットよりもデメリットの方が大きい。

そいつを殺して、その代償として自分の人生を棒に振るような危険を冒してまで、殺す価値がある人なのだろうか。

捕まらないためにありとあらゆるトリックを用いたとしよう。でも、そんなものを考える時間、労力、頭脳、それら全てを消耗してまで、本当に殺す価値があるのだろうか。

さりに言つてしまえば、上記のような事を考えて、価値があるのかどうかを思考するくらいの価値があるのかな……？

僕は、その辺が知りたい。

なんで人を殺せるのか。

突発的なものならしづがない。そんなものは、たぶん生きてれ

はあるだろう。

計画的に、知能犯が行つような感じの事件。だけど、殺したいから殺しましたとでも言いたそうな感じの不同集成。なにがしたいんだか。

首を何度も傾げ、思考を百八十度回転させたあとに百八十度回転させる。無意味だけどね。

「うぬぬぬぬ」

「どうした」

小堂さんが話しかけてきた。横で唸っている僕を見捨ててはおけないらしい。

「いえ、低スペックなパソコンみたいな感じの僕の脳では決して解く事が出来無さそうな問題にぶち当たりまして。もづ、解かないで、ハンマー使って壊そうと思つんですけど、どうですかね？」

「好きにしたらいいんじゃないか？……好奇心から聞くけど、どんな問題だ？」

「うーん、小堂さんに言つても理解してくれるかどうか分からんんですけど。一応、言つてみます。宇宙つて、どうやって出来たんですかね？」

「ビックバンとかいう爆発のせいだろ？」

「いえ、それは分かつてます。だけど、ビックバンが起る前は、どうなつてたんですかね？ 宇宙つていうものが存在しないんですねから、そこにはなにか別のものがあつたのか、それともなにもなかつたのか。なにかあつた場合は、僕たちとは別の世界があつたのかもそれませんし、なかつた場合は、なんで爆発が起きたんですかね？」

？」

「分かるか

「そんな単語で片付けられたら困るんですよ。初期ファミコン並みの処理能力しかない僕の頭が必死に稼働して、もうオーバーヒート直前なんですから」

「落ち着け。まずは落ち着け。どうしても分からぬのなら、ネッ

トで調べよう

「いえ、これは自分の頭で考えるから面白いんでして」

なんか口に搭載されているエンジンが全力で動き始めたよつとした時、来客を知らせる音が鳴り響く。

「いらっしゃいませー」

どうだこの完璧な営業スマイルは。今日、練習しまくったおかげで、こんなにも自然に出るようになつたではないか。

相変わらず頬の肉がピクピクするけどね。

小堂さんとの会話を途切れさせたお客が中に入つてきて、僕は思わず苦笑する。

「楓……」

なんなんだ今日は。なんでこんなにも僕の知り合いが集まるのだ。これはなにか？僕は知り合いを集めるよつな蜜を毛穴から発しているのだろうか。

「あれ？ 恭史！」

薄手のパークーにショートパンツ、いつも黄色いリボンで結んだサイドの髪がピヨコソと一房、下ろした髪から独立宣言でもしているように飛び出している髪型の楓が店内に入つてきた。

「恭史つてここでバイトしてたつけ？ 一昨日、初めてきたんじやないの？」

「今日からバイト始めたんだ。何事も経験が必要だからね」

「そつかそつか。良い事だね、うん」

納得し始めた楓をカウンター席に座らせて、前に水を置く。

「ご注文はお決まりでしょうか？」

「あははは。恭史にそんな言葉遣いされるの、新鮮で楽しい気分になる。ねえ、あれ言つてよあれ

「……あれつて？」

「お帰りなさいませ、つひやつ」

「ここは執事喫茶じやないよ」

「あははは

なにがそんなに楽しいのか、楓は表情を崩して、心からの笑みを浮かべ、人目もばからず快活に笑つた。

「楓、なにしにきたの？」

周りに誰もいないのを確認し、新しいお客様が来る様子もなかつたので、僕は目の前に座つて、楓に話しかけた。

「もちろん、ご飯を食べにきたんだよ」

それ以外になにかあるの？とでも言いたそうな眼差しを向けてきたが、僕はそれを右から左に受け流す。

「ふうん……。で、なにを注文する？ なんでも言つていいよ、厨房にいる人が作るから」

「まるで自分が作るかのように、自慢げだね」

「うん、九割は僕が超能力で作つてるから」

「え！？ 淫いね」

「あ……うん。淫いでしょ」

なんか信じられた。

こんなの、ガキ大将の後ろにくつつて、トンガリ頭の金持ちが、冴えないメガネの少年に財産を全部譲るぐらいありえないのに。

メニュー表を見て「うーん」とそれっぽく悩んでいた楓は、今日は自分でちゃんと決定した。

「じゃあ、ナポリタンで」

「却下」

「なんで！？」

「僕は、ついさっきナポリタンで死にかけたんだ。それを食べるなんて、腹ペコのライオンを砂漠に置き去りにするぐらい駄目な心の持ち主なんだよ」

「普通に注文しただけなのに……」

いや、これは別に意地悪をしているわけではなく、さつきの新作店長ゲテモノ料理が出てきそうな予感がしたので、楓の身を案じての発言なんだけれどね。

結局、楓はお手軽チャーハンを頼んできた。

僕はそれを厨房の人に伝えて、楓とばつかり話していたらまた店長の毒見役をやらされそうだったので、仕方がなくフロアのお客の手元にあるコップに水が入っているかどうかを確認しにいく。

といつても、今、この店内にいるのは東条さんと明のなんちゃつてカツプルと、バカツポオと楓しかいない。

なのでバカ（『ツポオ』をつけるのさえ面倒になつてきた）達の所へ先に行き、その後で東条さん達の席に行く。

僕がおわりの水を持つて一人の席に行くと、まずは東条さんが笑顔で迎えてくれて、明はどことなくダルそうな感じの顔を向けてくる。

「水のお代わりいる？」

「もううのだよつ！」

「サンキュー」

一人ともそれぞれ返答してきて、僕は東条さんのコップに水を注ぎ、明のコップには氷だけ落としてその場を去る。

「店員さーん！」

「なんでしょうか？」

「うわつ、白々しい笑顔！－ 分かってんだろ、俺のコップにも水を注いでくれ」

「その氷が全て解けましたら、水になると思いますが、……」

「なにを当然の如くほざくか、この野郎！－ 水、水をくれ」

「うーん……駄目だ。実験してみたけど、やっぱり抑えられないや。もうこの性格で押し通すか。楓以外には、

嘆息しながら、明のコップに水を注ぐ。もちろん、表面張力で水が綱渡りをするかのような危なつかしさを演出するのは忘れない。

一応、お客様なので、東条さんには営業スマイルを使って接する。

「あつ、そうだ。東条さん、あつちに楓がいるんだけどさ、呼んでこようか？」

僕は、この席からは真ん中に居座っている態度のでかい柱のせい

で見えない、ちょっと楓が座っている辺りのカウンター席を指差す。「あいちゃんがここに来てるの? よし、それじゃあ呼んできてもらおうかな。上山くんはもつづかに行つていいのだよつーつわつ、ひつでえ……」

東条さんの無邪気な笑顔から繰り出された言葉に、『戦国我双』というゲームで、百人斬りをした時に感じさせる、達成感や爽快感を味わつているような表情をする明。明つてマゾだったんだ、うわあ……なんて思わない。だつて『冗談だから』

邪魔者扱いされてしまった明を、腫物を扱つかのような纖細さでカウンターに導き、適当に座らせる。

そして、僕は楓の椅子に近づき、営業スマイルは貼り付けないで話しかける。だって、あれ疲れるし。

「楓、あっちに東条さんがいるからさ、話してきなよ。ここにいても、僕はバイト中だから、あまり話してられないし。楓も、暇するのは嫌でしょう?」

「え? う、うん、分かった」

楓は、なんだか少し考え込むような顔、というか、なんか納得いかないとでも言いたげな表情で僕を見つめてから、東条さんの席に向かう。なんなのだろうか。

明がカウンター席に座り、机に奇妙な言葉を書き始めるのとほぼ同時に、またもやニュースの話題がさつきの事件についてになる。最新情報を伝えるつもりなのかと思い、それを見ていると、唐突に肩を後ろから叩かれる。

「なに、君つて、あのニュースの話題に興味あるのか? さつきからあの時だけ、テレビ画面を見ているみたいだけど」

小堂さんだつた。出会つてからまだ一時間も経つていないが、向こうから話しかけてくるのを考えると、だいぶ打ち解けてしまったようだ。

「いえ、ただ単に、不同的の動向が気になるだけですよ」この事件に不動は関係していないけれど。

「ふむ、不同……ね」

天井を仰ぐように見ながら、ポリポリと頬をかく小堂さん。

「なにか知ってるんですか?」

「いや、噂なんだけどさ」

そう言つて、小堂さんは僕の方を見てくる。

「十年くらい前に……そうだな、不同と同時期にこの街にいた放火魔を覚えてるか?」

「ああ……はい、なんとか。確か、火野^ヒ 美見^ミつていう女性の犯罪者ですよね」

「ああ、そうだ。よく覚えてるな、君は」

「個人的に興味があつたので、覚えていただけですよ」

「へえ。俺の知つてている噂はさ、その火野つていう女が、不同と一緒に行動しているつていうものなんだ」

「なるほど。犯罪者同士で傷の舐め合いでもしてるんですかね」

僕がそう言つと、小堂さんはネタが出ない時のゲームクリエイターみたいに「うーん」と悩み始め、「そうじやないっぽいんだよな」と続けた。

「そうじやないって……ああ、傷どころか怪我をしたせいで見えてる筋肉を舐め合つていう意味ですか? それは過激ですね」

「全然違う」

「それじゃあ……」

「それも違う」

「僕はまだなにも言つてませんよ」

「君がいう言葉が予想出来たから、先手を打たせてもらつたんだ。とにかく、俺が知つてている噂はそういう類のものじゃなくて、二人でこそこそ話し合つてているとか、新しい犯罪を行おうとしているとか、そんな感じ」

新しい犯罪か……。不同はまだまだ人を殺し足りないのか? 火野はまだまだ燃やし足りないのかな?

火野という犯罪者は、さつき小堂さんが言つていた通り、不同と同

時期にこの街で活躍…… というか迷惑を振り撒いた放火魔の事。わずか一ヶ月の間に、十以上の家に、花咲じいさんみたいに、燃え盛る花を咲かせた糞野郎である。

犯行を行う時は、必ず水曜日の夜に出没していた。もちろん、警察も色々と捜査をしていたが、結局、捕まつていらない。

僕の嫌いなタイプの犯罪者。死ねばいいのに。

というか、この街は犯罪者のバーゲンセールでもやつているのだろうか。激安だけど、買い取つたら殺されても文句言わないでください、とかそんな感じの。ないか。

「それでも、火野と不同つて、どこに接点なんかあつたんですかね？」

「知らない。逃亡者同士でたまたま会つたんじゃないのか？」

「なるほど」

随分と投げやりな答えだつたが、僕は表面上だけでもそれに納得してみる。

それで会話が途切れ、小堂さんは欠伸をしながら厨房の方に消えて行つた。暇だつたからここにきたのか。

僕は一度、中断していたテレビ観賞に戻る。

画面の下の方に小さな文字が現れたが、少し離れた位置にいるのでそれが見えなかつた。なので、少しだけ近づいて文字を読む。

「……」

別に新しい情報じゃない。さつきのニュースを繰り返し流していただけらしい。

溜息を吐き、僕は左に視線を投げた。さつきまでいた位置からは、大きな柱のせいで楓達の席が見えなかつたけど、ここからならよく見渡せた。

四、五歩しか違ひがないのに、これだけの違いがあるのか。

楓と東条さんは向かい合つて、笑つてゐる。時折、東条さんが売れない芸能人みたいにオーバーリアクションをしている場面が見受けられた。

「平和だな……」

この街に殺人犯がいよつとも、この街で殺人事件が起きていよつとも、この街が狂い始めていよつとも、僕の世界はなにも変わらない。

だつて、僕の世界の登場人物は、誰も狂っていないし、壊れていない。平和だ。

「なつ、明」

「なんだよいきなり」

カウンター席の端で俯いている傷心明に声をかけてみたが、いつものようなお調子的な答えはもらえなかつた。

藍色よりも濃い空気を鎧のように身に纏つているブルー戦士は放つておくとして、僕は他のアルバイトの人々が洗つた食器を拭く作業をする事に。

「あつ、これで最後ね」

「うん」

同じ年の女の子が手渡してきた食器を横で受け取り、ブーメランのよう投げる……のは妄想でつせ。布巾でキュツキュツと拭いていく。

「さなつち」

「さなつち？」

横にいる女子が僕の皿を見つめながら、なんかポケットなモンスターの名前にありそうな、なにかを口に出した。

その、子守唄のように心地よい声が耳に届けられて、僕は寝ぼけているのではないだろうかとかなんとか疑つてしまつ。

だつて、会つてから一時間も経つていない女の子からあだ名つづか、取りよつよつては嫌味にも聞こえる名称で僕を呼ぶんだもん。

とりあえず水気を取つた皿を指定の位置に置き、女の子と視線を合わせる。名前なんだっけな。

馴れ馴れしい女子、略して馴れ子ちゃんは僕よりも頭一つ分小

さく、黒い髪にカチューシャをつけている活発そうな子だった。

第一印象としては東条さん以上にハイテンションだとは思えないけど、それと同じくらいはいくかもしね。僕の周りに騒がしい人がまた増えた。

「あつれー？」もしかして忘れてる？三歩、歩けば忘れるかー頭みたいに？」

「カ一じやなくて鳥ね」「あつそりか。ごめん

「ね

どちらにしても、使い方は間違ってる気がするけども。

かんなのこのこをさやかにこなす実験がはじまるんだ。

「でね、せなひせなひ

「外へ前じやん

「……………当たり前かな？」

うん、分かりにくい。人と話すのに、なんでこんなに頭を回転さ

「で、本題に入るんだけど、もう言いつつ、馴れ子ちゃんはこな
せないにはいけないんだ

の可愛い女の子は、さなつちの彼女?「

七三「ン髪」でいやまあ 今日の櫻の髪型はそんな感じだけ。 だけど、そんなウサギの跳ね方みたいな呼び方にしなくても。

とかなんとか思いながらも、馴れ子ちゃんに楓との関係をズバリ

言い当てられた僕は、驚きのあまり、アクション映画のように後方につづつ飛んでしまった。

顔はいつも無表情を保ちつつ、内心ドキドキしながらも、馴れ子ちゃんに頷く。

「うん、そうだけど。あの子、楓とは幼なじみでね、それで昨日、

思い切って告白してみたら、見事成功したってわけ

「へえ……そういうのいいね。なるほどなるほど、昔からの想いを伝えようと一念勃起したわけだね！」

「女の子がそんな事を言っちゃいけません」

いちねんぼつき。いちねんぼつき。平仮名で書けば結構似てるけど、意味は出来杉くんと駄目なメガネの少年くらいの差があるね。

「え？ あつ……ああ！」

自分の言った言葉の卑猥さに、ようやく気付いたのか、馴れ子ちゃんは顔を真っ赤に染め上げる。

馴れ子ちゃんはイヤイヤとでもいう風に首を振りながら、フロアから厨房に走って行ってしまった。

「さなっちに汚された！！」

「……」

捨て台詞と取ろうか。いやでも、止めてくれ。今の言葉を楓が聞いていたらどうする気だ。

逃げ惑う虫を笑顔で踏み付けるような、純粹さと狂氣を兼ね備えたバーサーカーが出来上がるかもしれないぞ。

楓にはそんな属性とも、特徴とも言えないなにかを習得して欲しくはない。

試しに、少しだけ場所を移動して、楓の席が見える位置に立つ。親の反応を窺う子供のような純粹さを瞳に宿らせるように努力しながら、僕は、楓からの睨みを頂戴しました。じつそう様です。

『聞こえてた？』

瞳に載せた言葉を、眼球で蹴り飛ばして楓に届ける。

ゆっくりと、彼女は頷いた。

『怒ってる？』

眼球に載せた言葉を、体罰教師が生徒にケツバットをするついでに、一緒に殴つてもらい、楓に届ける。

彼女は机に置いてある紙ナップキンの中心ら辺にボールペンを貫通させ、笑顔で頷いてくる。

- 1 -

楓の怒つてる姿を見るのは少し楽しいが、しかし、今日はなんだか異常な感じがする。

眞に宿している色が、怒りや懲しみなどではなく、さう、あれは昔、嫌といつほど体験した、殺意といつ名の感情のように思える。

「 というのは僕の勘違いだとしてもだ。
せたのだろうか。なんかの比喩？」

お前の体もこんな感じで、風通しをよくしてやるがケヴァヴァ
ヴァヴァー！的な？

机が僕の方を見つめていた。なぜか座席の下はいたるところ東条さんが出てきた。

卷之三

「あつ、
うん。バイバイ」

「真田くんを虜めちや駄目だぞ！」
付き合い始めたばかりなん
じょー？」

東条さん、
ナイス。楓の表情を少しだけ緩ませてくれた。誉めて
つかわすぞ。

東条さんが席から離れ、走ってカウンターの方に向かってくる。馴れ子ちゃんがどつかに行つてしまつたので、フロアには僕しかいない。なので、習つたばかりのレジ打ちをする。

二二二

「じゃあね、真田くん。あこちゃんと仲良へするんだよ。」

「うん、東条さんも昭と一緒に帰つたら？」

「ううん……残念ながら、また探しモノをしなくちゃいけないのだよー。見つけるモノが一杯あるから大変なのだー！」

「そつか。じゃあね」

「バハハーハーイー！」

元気に走り去つて行く東条さん。暗闇に支配され始めた街の中で、輝くような存在感を放つていた。

うーむ、やはり東条さんだ。馴れ子ちゃんとか店長とは比べよつもないほどのハイテンション。

馴れ子ちゃんの第一印象で、東条さんレベルだと感じたが、この何日かで東条さんはREV-ERL MAXにまで近づいている。

それは、跳ねるしか能の無い鯉の王様と、愛くるしい顔とは裏腹に、雷を繰り出していく電気ネズミぐらの差がある。うむ？ これではイマイチ分かりにくいか。やり直し。

「ミジンコ」とアメーバぐらいの差がある。……あまり変わらないので閑話休題。

「真田くん。君はもう、上がつてもいいぞ」

「あつ、はい」

どうやつたらあの差を上手く表現する事が出来るのかと、一人で頭が蒸発しそうなほど悩ませていたら、後ろから店長さんに声をかけられた。

時計を見てみると、なんと、もう八時だ。あれ？ 一時間しか働いてない。あまり働いた記憶ないけど。暇だからしょうがないね、がはは。

「明日からは十時ぐらいまで働いてもらつたが、大丈夫か？」

「はい、大丈夫です」

「遅くなる事は、親に伝えておくよ。バイトをしている事を学校に伝える義務があるのなら、一応、報告もしておこう」と。分かつたか！？

「分かりました」

「というか、僕の学校は原則アルバイト禁止なんですけど。すつか

り忘れてた。うーん、ばれなければいいか。これで見つからなければ、完全犯罪成立ですな。

犯罪じゃないけど。

ファミレスの制服から学校の制服に着替えた僕は、楓と一緒に帰路に就いていた。

明は、なんかコーラで酔つてたっぽいから、放置してきた。

「いやー、それにしても恭史の接客は、なんだか愛想が悪いよね」電灯がポツポツと頼りなく歩道を照らす帰り道。車道を走る車はあるけど、人は帰宅中のサラリーマンとかしかいない。

僕たちみたいな学生は、不同を恐がつて家に絶賛引きこもり中なのだろう。そんなことをしていても解決にはならないと思うけどね。いや、むしろそっちの方が危ない。だって、あいつは住宅に侵入して犯罪を起こすんだから。

「あれ？ オーイ、恭史」

「……え？ 「ごめん、なに？」

考え事をしていたせいで、楓が話しかけてきている事に気付かなかつた。

横にいた彼女がいつの間にか僕の前に来ていて、手を左右に振っている事さえ、脳は認識しなかったのだから職務怠慢も甚だしい。

「もう、恭史は本当に考え事をすると、周りの声が聞こえなくなるよね」

「ごめん」

ふうっと頬を膨らませた楓を見ると、両頬を手で摘まんで、ふしゅーつていうのをやりたくなる。

しかし今は怒られている身。想像の中でやるだけに留めておいた。

「もう、愛想がないのはいつものことだもんねー」

「なにいつてんの。僕だって笑う時は笑ってるよ。いつも仮面つてわけじゃないでしょ？」

「わけじゃないでしょ？」

「それはそうだけど……」

そう言つた後、楓は複雑そうな顔をする。

なにをそんなに悩んでいるのか僕には理由が分からないので、さつき彼女がしてきた質問を必死に思いだし、遅い答えを口にする。

「僕の接客が愛想ないなんて言わないでよ。あれでも結構、営業スマイル頑張つてたんだからさ。一昨日、街に行つた時に見せてたやつよりはマシでしょ？」

なんだつけ。楓曰く、怒つているような、泣いているような、笑つているようなよく分からぬ笑み……だつけ？

それぞれの言葉をひき肉にして、ハンバーグを作つて食べたら、胃の中で四方八方に広がつて死に至るぐらに反発しあう言語だけ。うーむ？ 僕も自分でなにを言つているのか分からぬ。疲れで脳が働いてくれない。

氣を抜くと欠伸が出来うるので、口元をずっと引き結びながら歩き続ける。

あんな暇なバイト場でも疲労つて溜まるもんなんだ。初めて知つたよ。

「確かにそうだけどさあ……」

なんか釈然としない。とでも言つかのように、楓はふいっとそっぽを向いた。

これは一昨日、バッティングセンターに行つた時と同じ行動を取るべきだなど瞬時に悟つた僕は早速、楓の視界に入り隊（隊員募集中）の会長らしく、逆方向を見つける楓の視界に回り込む。

どうせ今回も視界に入る事はあまり出来ないのだろうとタカをくつっていたのだが、なんと今回は一発田から楓の目に映る事ができた。

昨日から比べたらもの凄い進歩だと、自分で自分を褒めまくった後に、ちぎつてやろうかと思つた。だけど。

「あつ……」

襲つて來るのは、嬉しさではなく後悔。それは、水に垂らした墨

汁のように広がり、僕の心の中を満たしていく。

僕には、よく分からぬ怒りを楓は抱いているのだ、と思つて、いた。しかし、それは違つたようだ。

立ち止まつた場所の近くにある、黄色が混じつた街灯の光に照らされる歩道。すれ違う人達なんて田舎に近づいている今ではない、そんな道で。

「……泣いて」

「いる？」

「なんで？」

楓は、僕に見られた事が恥ずかしいのか、それとも見られたくなかったのかは分からぬけど、頬を流れた水の軌跡が残つて、顔を背ける。

今度はふざけて回り込もうなどと思えない。だって、訳が分からぬから。

楓の涙を最後に見たのは、確か小学一年生の時。それ以来、僕の前では一度もあんな顔を見せなかつた。

分からぬ。分からぬ。

彼女は震えた声で、聞いた人の涙も誘いそうな悲しい声音で、呆然としている僕を見ないまま、一つの質問をしてきた。

「ねえ、恭史？ 私の事、好き？」

静かな、静かな、声。

なんでこんなにも、楓は不安そうなのだろうか。僕の知らない間に、なにかあつたのかな？

「どうしたの、楓。なにかあつた？」

さつきの質問には返答せず、涙の原因を追及してみる。だって、僕の気持は前に伝えたから、分かっているはずだから。

楓の横顔を見つめ、返答を待つ。しかし彼女は首を横に振ると、雨の下に晒されている弱々しい口ウソクの火のような声を出す。

「答えてよ……」

僕は、一体なにをしたのだろうか。

一体、なにをして、彼女をここまで弱らせてしまったのだろうか。いつ、なにをやらかした。

バイト場に来た時の楓は、まだ普通どおりに見えた。僕と談笑して、東条さんと一緒に話して笑つて。

……いや、ちょっと待つて。

そう言えば、おかしい。

楓がファミレスに来る事が。楓は家で大人しく本を読んだり、料理を作るのが趣味の女の子だ。東条さんみたいに活発な子とは違う。最近こそ、東条さんの考えに同意しているからなのか、僕を街に誘つたりして活発そうに見えるけど、本当はその逆。

夕飯だって、自分で作つて食べる方が美味しいとか言って、外食はしない方だ。

たまには外食もと思うけど、そういう時は大抵、誰かと一緒にだ。例えば僕とか。

おかしい事があつたのに、僕は今朝起きた殺人事件の話題で一杯一杯だつた。

それに思考の半分以上を持つていかれていたせいで、楓のおかしな動向に気づくのが遅れてしまった。

そこでまた、楓の泣き顔が視界に入った。そのせいで、思考が中断させられる。

「……あははは」

唐突に楓は笑つた。マイナスドライバーでプラスのネジを回すかのような、無理やり感があつた。

「冗談だつて、冗談」

僕に背を向けて、楓は歩き出す。声には湿気が混じつている。

「冗談のはずがない。……けど、せつかく楓がそう言つているので、僕もそれに乗つた。

「だよ、ね。冗談だよな。僕は一昨日、自分の気持ちを言つたばか

りだもん。そう簡単に心変りはしないよ

「というか、これから先もする予定はない。ずっと、ずっと。

「うん、そうだね。……」」めんね、変な事を聞こひやつて

「いや、僕の方こそ『ゴメン』。なにか不安にさせるような言動をした
んなら、謝るから」

僕の言葉に、楓はしつかりと首を左右に振った。

「つうん、大丈夫。私が勝手に考え込んで、暴走しただけだから

「そう? それでもさ、なにかあつたら言つてよ。僕は絶対に楓の
味方だよ。なにがあつとも、ね」

「それってさ……もし、私が殺人犯になつても?」

「え? それは……殺した人によると思うよ。罪もない一般人を殺
したのなら、僕は楓に自首を勧めるし、最悪、僕が捕まる。でも、
殺されて当然の奴なら、僕はなにも言わないよ」

「そつか……」

楓の声から陰りのよつたものが消えて、いつもの鈴のよつに綺麗
な音が鼓膜を刺激する。

「恭史、帰る?」

じつらに振り返った楓の顔には、むづ涙の跡は残つていなかつた。
まるで最初からなにもなかつたかのよつな、そんな感じだ。

彼女は僕の横に寄つてくると、恋人っぽく自分の腕で僕の腕とを
絡ませるようにして掴んできた。

そして見上げるようにして僕を見つめてきたので、心臓が張り裂
けそうなくらい「ドキドキしてしまう。

こんなに密着しなくてもいいじやないか。

それか、密着するなら、イカやタコみたいにぐにゃぐにゃになつ
て、手足全てを絡ませるよつにしなくちや。冗談だけだ。

「あつ、凄いドキドキしてるね。あはは、緊張してるの?」

「そりやあね、こんな近くにいて、顔を胸の近くに押し当たられた
ら、誰でも緊張するよ」

「む……。それでも声は普通だね。全くいつも通り

「ポーカーフェイスが特技だからね」

「それは関係ないんじゃ ないかな？」

駄目だ、楓の突っ込みは甘い。僕としては、どこぞのハンターの相棒みたいに、一トンのハンマーでガツンと殴つて欲しい。それほど、僕は突っ込まれた……くはない。痛いのは嫌いだしね。

「よし、帰ろうか

「うん！」

いつものように楓は笑つて、僕もそれにつられて、少しだけ笑みの形を作つた。

せつかく、楓と恋人になれたのだから、こんな時間がいつまでも続くといいのに。

バイトの初日を無事に終える事ができた日の翌日。学校に行くために制服に着替えていたり、いきなり部屋の扉が口を開けた。

「……」

「……ごめん」

「……うん」

これから南国にでも行つてフラダンスをする妄想を行う予定だったので、僕はパンツ一丁だ。そうだね、理由は嘘だね。

そんな、ほとんど生まれたままの姿をしている状態の僕は、扉の近くで硬直してしまつた楓になんとなく謝つてしまつた。

楓はその声で少しだけ我に戻つたのか、顔を赤くして頷いてから出ていく。

「どうか、なんで彼女は人類の英知の結晶であるノックをしないんだろうか。」

僕だつたら楓の部屋に入るのに、三三七拍子を刻むかのようにリズミカルにノックしてから、その場でブレイクダンスをしながら出てくるのを待つぞ。あながち「冗談ではない」。

ちなみに、ブレイクダンスはそのままの意味で訳そうね。

プロの人気がやつているあんな格好良いものじゃなくて、僕のは壊れる踊りという風に解釈しよう。

とかなんとか一人で考え事をしている内に制服を全て着終わつたので、肩に教科書を詰め込んだ鞄をかけて部屋を出る。

一階にある僕の部屋の前には楓はおらず、どうやら一階に行つたようだ。なんの用があつてきたんだろうか。

階段を使って一階に下りて行くと、居間の方から笑い声が響いてくるのが聞こえてきた。

居間に繋がる扉を開けると、母さんと父さん、それと楓がソファに座りながら談笑している。

- ୧୮୫ -

「今田はなかなか早いじゃないか」

母ちゃんと父さんに挨拶を返しながら、僕は横目で楓を盗み見る。僕の方を見ようとはせず、ニュースに釘付けになつていていた。

ううに。ああ、そりやあね……少しアレがあれだつたかもしれないけど。

「分かったよ」

短く答え、居間を通り、その奥にあるキッチンに向かう。

そこには日本の朝ごはんと言つたらこういうのを想像するんじゃないかと思つほどどの、完璧な和食が用意されていた。

母さんは朝に動くのが嫌いだから、滅多に朝飯を作る事はない。朝からこんな料理を作るなんて、絶対にあり得ないと言つても

し
し

といふと、上のじ飯……父さん！？

よ、
極しがいないよね

つたのか。
納得。

とりあえず、椅子に座つて、鮭の焼いた奴を食べる。塩味がきいていて美味しい。じいざの店長とは違いますな。

朝ごはんを食べ終わり、自分の食器を洗い終わつてから、僕は居間に突如、来襲したエイリアンを見た民間人みたいな顔をしながら戻つた。うん、意味分からん。

「じゃ、行こつか楓」

「そうだね」

楓は僕の両親に挨拶をしてからソファから立ち上がり、そそくさと玄関に向かつてしまつた。

「じゃ、行つてきます」

僕もパピーとマミーに挨拶をしてから、玄関に向かつて楓の横で靴を吐く……うん、履くだね。

なんだよ靴を吐くつて。楽器の名前をしたナメクジみたいな名称の星人が、子供を産むシーンを靴に変えた感じの場面を想像してしまつた。

「楓、なんで今日は、僕の家に来たの？いつも待ち合わせしてるじやん」

楓のアパートと僕の家は結構近いけど、楓が僕の家に来ると学校とは逆方向に向かつている事になる。

つまり遠回りしてしまつてているのだ。どうせなら僕が楓を迎えて行つた方がいいんだけど。

「今日はね、なんか迎えに行きたい気分だつたんだよね。だから、気にならないで？」

楓は靴紐を縛りながら僕の方を見ずに言った。

「ふーん、そつか。あつ、それと朝ご飯ありがとね」

「いやいや、恭史つて、昔から朝は卵かけご飯か、納豆ご飯だつたよね。だから、たまには私が作つてあげようと思つてね。美味しかつた？」

「うん、凄く。久し振りにまともな朝食だつた」

「本当！？ ありがとー！」

「うわあ！？」

なんかテンション上がつたのか、楓は急に立ち上がり僕に抱きついてきた。

靴を履こうとしていた不安定な体勢だつたため、僕は楓の体重を支える事が出来ずに、そのまま倒れこむ。壁に後頭部を強打した。泣きそう。

「……うう

「あっ、ごめんね。ちょっと興奮しちゃって」「いや、別にいいんだけどね」

僕の上からどいた楓は、微笑えみながら玄関のノブをひねった。外の日差しが僕を照らして……僕は灰になる。

眠い……。

「ほら、恭史。いつまで横たわってるのさ。早く起きて起きて。学校に行かなくちゃ、遅刻しちゃうよー。」

「そうだね」

頭を何回か振つて、僕は脳に田覚めるよう命令した。しかしそれは大胆にも無視されて、しかも睡魔が頭上で遊び始める。なんかだるくなつてきた体を起こして、ふらふらと楓の後を追つて玄関の外に出た。

「あー……」

「どうしたの？」

「いや、なんか。頭がボーッとする。睡眠不足なんだな、たぶん」
さつきまではなんともなかつたのに、なんでいきなり。

「シャキッとして、シャキッと」

肩を何回か叩かれて、ついでに頭をなでなでされる。僕は子供か。仕返しついでに、楓の頭を撫でる。今日の髪型は……なんだろ。いつも黄色いリボンを蝶々結びにして、右サイドの髪を上げている感じかな。簡単に言えば、サイドボニーだ。

中年のおじさんの頭のようこ、桜の花という髪の毛がほとんど散つてしまつた寂しい禿げ頭……じゃなくて木々が連なる道を歩く。そして僕は段々と曇ってきた空の下、ゾンビのようになふらふらと足取り怪しく歩く。凄く眠い。

……これはあれだね。楓に一服盛られたね。あの朝食に睡眠薬が入つていたに違いない。そうだ、絶対にそうだ。

芸能人のそつくりさんとかいうテロップと一緒に出てくるの、元のもので、全然似ていなくて、一般人が出てくる時と同じくらいの確率で楓にやらされた。

くそつ、なにが目的だ。あれか、監禁か？

僕を監禁して、色々な暴行を加える気なのか？

「そんな事しないよ？」ていうか、睡眠薬なんて入れてないもん」

「……心の声を聞けるのかな？」

「さつきからぶつぶつ言つてたよ。ほんと、まる聞こえ」

「なんてこつた……。それじゃあ、真田幸村のマネをしながら、スノボーで雪山を転げ落ちたいつていう願望も聞こえてた？」

「……それは……聞こえてないかな。そんな願望あるの？」

楓がちよつと引いたような顔をしながら、僕から少しだけ距離を取つた。

「……うん。あるある。なにか問題でも？」

「いや、それはちよつと止めたほうが」

「ついでに、楓からの暴力を全て受け入れる事も出来るよ。僕は生糀のドエムだからね！」

「生糀のドエム？」

「意味分かんないよ……」

さすが楓。僕のボケにボケで返すとは。といふが天然か。そして僕はMじゃないよー。

「だからこの子の一一番可愛い所はこの足なんだってーー！ そう思つだろ、真田」

「知らない」

学校に到着して、教室に入った途端、他クラスの明が、今人気のアイドルのグラビア写真集を持って僕に迫ってきた。

といふえず軽くあしらつた後、一秒間に百回ほど明を殴つておく。妄想だけだ。

「あーー、なんで知らねえんだよ。この子、めつちや可愛いじゃねえか」

「確かにそうだね」

艶のある黒髪をポニーテールにして、深い憂いを帯びた瞳に童顔からはちょっと考えられないほどに発達した体。でも、芸能人なんて性格悪いだろうし。それに僕の中では楓の方が可愛いし。

「お前もこういう女の子好きだろ?」

「うん、好きだよ。だけど、もう少し胸は小さい方があだつ!」

急に、背中に痛みが走る。なにか細い物でつままれてひねられる。僕の背中はアンパンのヒーローみたいに簡単にちぎれないと。ちぎれても食えたもんじやない。

「いだだだだ」

「恭史。あんまり、変な事を言つちゃ駄目だよ?」

犯人は今、僕の後ろで無理やり笑顔を作つている事だろう。別に僕は楓の体が未発達だなんて言つた覚えはないのに。たぶん、怒つているのはそれが原因なんでしょう?

ていうか、後ろに楓がいるのを忘れてた。いきなり明がこんなもの持つて来るからいけないんだ。僕の平穀のために、早急に消えてくれ。

明は僕の心中での訴えに気付いたのか、それとも後ろで楓が行つている事に気付いたのか、苦笑しながら自分のクラスに戻つて行つた。

「そろそろ離してくれない?」

いい加減、痛いという感覚には慣れてきたけど、つねられたままでは嫌に決まつている。

「ダメ。恭史が他の女の子に色田使つた罰なんだから」

「……いや、芸能人じやん。どうせ、接点なんかないんだからいいと思うけど

「それでもダメ」

首を回して後ろを見てみると、彼女は人差し指を左右に振りながら笑つていた。なんでここで笑う事を選択したのだろうか。もういいや。

クラスメイトから送られてくる好奇や嫉妬、呆れが混じつた視線

の海を泳いで、僕は自分の席に戻った。
その途中で楓は僕から離れていった。

……嫉妬深い、のかな。

前まで……とこ‘うより、三日前に付き合ひまでは、僕が他の女子と話していたり、明にあんなものを見せられていてもなんにも言わなかつたのに。

鞄を机の横にあるフックにかけ、ボーッとしながら窓の外を見る。さつきまでは少しだけでも雲の隙間から日差しが漏れていたのだが、今はどんより曇つていて、今にも泣き出しそうな空模様。

一時間田に体育があるから、そこまでは雨は降らないでほしい。中でやっても飛び箱とかだし。それなら外でサッカーとかやってたまうがマシだ。

僕の願いは叶い、今は外でサッカーをしている。

体育は合同練習のため、隣には明がいる。

といつても、やっているのは他のクラスメイトで、僕は木が作つてくれる陰に隠れて、頭上にある枝に新しい髪の毛が生えているのを見発見したりしていた。

なんか今日はやる気でないや。

「なあ、真田。もう少し、生氣出そ‘ぜ」

「なに言つてんの、明。僕は生氣ぱりぱり漲つてこいる事で有名な男の子だぞ」

「いや、お前の場合は、『魚の死んだ目つてどうに‘う感じの事言つの？ ああ、真田恭史みたいな目の事を言つんだ分かつた』って言われるくらい、死んだ目をしてるぞ」

「……失礼な。僕の目はそんなに死んでないぞ。例えていうならば、釣りあげられて絶望に染まつてこいる魚の目だ」

「どういう目か分かんねえよ！」

「永久凍土に閉じ込められたマンモスの目でもある

「でかい！？」

「……突つ込むところはそこじゃない」

「むう……やっぱり明の突つ込みって、時々ズレるんだよねえ。もう少し上手くシッコニアは出来ないものか。」

閑話休題。

やっぱり僕の田つてそんな風に例えられているんだ。驚きはしないものの、ただ単に無表情なだけだと言い返したくな。

この無を死んだと捉えるとは、僕に対する罵瀉だ。まあ、別にいいけど。

明との会話が途切れたので、僕はクラスの女子と一緒にしゃいでいる楓を観察をする事に。

今は百メートル走を何秒で走れるかを競っているのか、ストップウォッチを持つ人目がけて走っていた。

だけど……。楓はあんまり運動する方じやないから、運動神経はひいき有りで、並みよりちょっとだけ上。運動部からの勧誘チラシは、楓の事を勝手に運動も出来ると勘違いしている奴らがやっている事。

今だつて、前を走っている女子に追いつけてないし。あれだつたら、よくて十八秒ぐらいかな……？

「そういえばさ」

明が曇空を見上げながら、ぼんやりとした調子で言つ。

「お前と相崎つて、付き合つてるんだよな？」

「そうだよ。三日前ぐらこから」

「ふーん。つまんねーの」

「なんで？」

「いや、なんかおさまる場所におさまつたなーって思つて。ほら、相崎つてモテるじゃん？だから、いつその事、真田以外と付き合つ方に賭けてたんだよな。お前より頬良い奴なら一杯いるしな」

「楓は頬じゃなくて、僕の体臭に惹かれたんだって」

「なんでだよ！ そんなに良い匂いしないぞ！？ 嘘つくなー」

「嘘じやないよ」

いや、嘘だけど。

「ちなみに、東条さんは自分より運動出来る人に惹かれるみたいだよ。今度、頑張つてみたらどうだ？」

僕の言葉を聞いた明は、「うーん」と唸り始めるが、自分の額をペシッと漫才のツツゴミみたいに叩いた。

「東条は良い奴なんだけどな。なんかあのテンションについて行けないんだ。一緒にいて楽しいんだけど、それは休み時間だけとか帰り道だけだからそう思うのであって、ずっと一緒にたらうんざりするかな」

「今の言葉、東条さんに言つてみようかな」

本当、失礼だ。

「おーい、真田！ お前もサッカーやろうぜー！」

木陰で休んでいる僕を、サッカーに白熱していたクラスメイトが呼んでくる。

その人の仕草を見れば分かる。サッカー・ボールを間違つて蹴つたとか言いながら、僕をリンチにする気なのだ。ある時は額に当たる時は股間に当たる時は目潰し、ある時は鈍器で撲殺。冗談だけど。

「しようがない、やるか

僕はどこぞの戦闘民族がエロい亀の仙人に修行を受けている時、きらきらした目をボールに向けながら、わくわくとは正反対の位置にどつかりと座つて存在する感情を銃殺する。

それは開脚前転をしながら、僕の中から逃げ去り、そして機関銃を持つて出直して來たので、バズーカでもう一度だけ殺しておく。横で明も立ち上がり、僕の頭を叩いてきた。なので右膝の裏にゴルデンショートを決めておく。

「おうふつ！」

などと言いながら地面に倒れた明を見てから、僕はクラスメイトの輪に混ざる。サッカーをやるのは久し振りだから、感覚を取り戻すのに時間がかかりそうだ。

とりあえず、いきなり転がってきたボールを、持つて「ハンド！」なにやつてんだよ、元サッカー部レギュラー！！」クラスの人たちから罵声（少し過剰表現）を浴びせられる。

知るか、とだけ言っておこう。

いや、知ってるけど。

それは置いといて。

サッカーをやっていると、なんだか昔の事を少しだけ思い出す。

昔 年齢が二桁になつて、一桁の時の思い出が全て走馬灯のように蘇つてこなかつたあの時、サッカーネットに入れたボールをなにかを考える事もなく、適当に蹴つていたら、横にいた楓の足が空を足蹴にしていきなり転び始めた。

「どうしたの？」

「私も運動上手くなりたいなーって思つて……」

そんな事を言いながら、今より髪が短い楓が立ち上がる。あの時は……肩までの髪だつたかなー。僕はの髪型も大好きだつたのを覚えている。

閑話休題。

先ほども思つたとおり、楓はそんなに運動神経はよくない。

しかし、向上心は人一倍どころか人百倍はあつた。さつき転んだのも、僕が持つているボールを横から蹴つて少しでも運動しようとした結果らしい。

「楓ちゃんは頑張るね。頭もいいのに、それだけじゃ不満なの？」
「うん……。恭史くんだけ、運動は出来るでしょ？」

「がんばってるからね」

「私はね、他の人が出来る事は自分でも出来なくちゃ、納得できないんだ。だから、人並みには運動できるようになりたい」

「へえ。頑張ってね。応援してるよ」

「うん！ 私を応援してくれるのは、恭史くんだけだからー絶対にお願いね！」

「任せときなさい。喉が潰れても、喉仏が死んで本当の仏になつて

も応援してあげるから」

あー、懐かしいな。こんな会話してたつて。サッカー繋がりで、こんな記憶が目を覚ますなんて……。まあ、嬉しいけどね。

「真田ー！ ボールいつたぞ！…」

「はいはい」

どこぞのスーパーヒーローよろしく格好良く吹っ飛んできたボールを胸でトラップして、足元に落とす。

空気と摩擦を起こすのが気持ち良くてたまらなかつたのか、ボールは一度跳ねてその快感を再び味わつてから、僕の右足によつて暴行を加えられる。

ボールの顔が一瞬だけひしゃげて、しかしすぐのハンサムスマイル（勝手にハンサムだと決めてみた）に戻つた球は、反対側にいた仲間の元に行く。

久し振りのサッカーなのに、感覚は衰えていない。それどころか、昔より体が動くかもしれない。

「あつー……」

だけど、体力はなくなつてゐる。当たり前か……。最後に真面目に運動したのは、一年くらい前だもん。

その後は、僕の蹴りに魅了されたボールが集まつてくるので、適当に捌いていた。

しかし何度も戻つてくる事に腹を立てた僕は、ゴールネットを女子高生の恋愛心のように揺らしてしまつた。

ネットにすら愛される僕つて、罪深いぜ！ 「冗談なのだ～。

「恭史カツコイイー！…」

「……ありがとう」

僕の心理なんて知るはずもない楓が、華麗なゴールシーンを見て賛辞の言葉を送つてくる。素直に嬉しいけど、開脚前転をしながら逃げ出したいほど恥ずかしい。

「どうわけで、『』は『』が一番という見解に落ち着くわけだな」

「知らないよ、そんなの」

暑さで溶けて、大地の肥やしになるかどつかの瀬戸際だった体育が終わり、今は小休憩時間だ。

グラウンドからの帰り道、ずっと聞かされていた『』談義が終わりを迎えたが、僕としてはどうでもいい話題だったの、ビラ焼き食べたいとかずつと考えていた。

そして、少しだけ斜め前にいる人物を窺つてみる。冷汗が流れた。「かーっ！ ニーソの素晴らしさを分からぬ、性格もセンスも視覚も嗅覚も全く無い馬鹿野郎がまだいたなんて！ いいか？ ミニスカートからはみ出る生足と、それをほとんど覆っている『』。その間にある……」

「もういいって」嗅覚は関係あるのか。

なんか定期的にノックをして訪れる痴呆をいやいや家の中に招き入れているお爺さんみたいに、明が同じ話を繰り返そうとしていたので、僕はアイアンクローをしてそれを遮った。

アイアンクローは嘘です。……なんとなく、斜め前……ていうか、反対側の席にいる楓を見てみる。頬がひきつるのを感じた。

「いーや。よくない！ お前もどうせ、ニーソ好きなんだろ！？」

「あー、はいはい。好きだよ、ニーソ。大好き。うん」

あーもう。ここに店長がいたら、耳元で『つる採用！』ってなんども叫ばれてるだ。

……楓恐い。なんか凄く、こっち睨んでくる。嫉妬？ いやいや、まさか。こんなバカ話に嫉妬するわけないじゃん、あんな完璧少女が。

『キーン』とか言いながら教室から出て行った明を横目に、僕は楓を視界の中心に收める。

「うむ、目の保養になりますな。

「真田くんっ！」

ボケーとしていたら、東条さんの声が花火の音みたいに心臓を震え上がらせるほどの大音量で、僕の寿命を縮めてきた。なにか恨みでもあるのかな？

とりあえず声が聞こえた方、教室の後ろ扉の方向を見てみる。そこには一口一口笑顔の東条さんが立っていて、手招きをしていた。気だるく椅子から立ち上がり、あんまり近づきたくないハイテンション娘の近くに行く。

「どうかしたの？」

「うむ！ 実はですな」

東条さんは、砂漠で遭難した人がオアシスを見つけたような顔を近づけてきた。

「明日、付き合って欲しい場所があるのだよー！」

「うん？ 付き合って欲しい場所？……うーん」

楓の方を見てみる。友達との会話に夢中で、じつには気付いていないみたいだ。

「場所によるかな……」

「それだつたら問題無しなのだよー！ もうすぐあるイベントを思い出してくれば、それで万事解決なのだー！」

「もうすぐあるイベントか……寝取り対決？」

「そうそう、独り身の男が、らぶらぶカップルの彼女をどれだけ寝取れるかを競う対決だねー！ つて、違うに決まってるじゃないかー！ そんなのが公認されてたら、この街は色んな意味で終わつてるよー！」

「じゃあ、あれだ。絶望対決」

「うんそうだね、自分の恥ずかしい過去を公の場で公開されて、どれだけ絶望するかを競う……つて、違うって言つてるじゃないかー！ ーもしかして、忘れたのかい？」

「そんなわけないじゃないか。あんな一年に一回のイベントは忘れられないよ。それに、今年は特別だしね」

楓の方をもう一度だけ見てみる。うむうむ。気付いていませんな。

「よーし……じゃあ、用事はそれだけだからっ……じゃあね真

田くん……」

「さいなら～」

ピューという擬音が良く似合つ程、東条さんはまさに風のようになつて去つて行つた。どこまでも元気な人だ。

あの元気があるんなら、走つて空を駆ける事も簡単ではないだろうか。

そんな事を扉の場所に立つたまま考えていたら、近くの曲がり角から先生がやつてきたのを発見した。

すぐさま自分の席に戻り、授業の用意をしてから、自分の瞼の上にペンで田を描く。これでいつ寝ても大丈夫だぜ。

先生が教室に入つてきて、それまで話し込んでいた生徒達が一斉に静かになった。こんな場所だけ、チームワークがいいんだから。

「さーて、寝るか」

小声で呟き、僕はそつと瞼を閉じた。頬杖をついて顔の位置を固定し、目がはつきり見えないように伏せた。

これで、一目見ただけでは、ばれない体勢の出来上がりだ。

「いだつ」

なんか頭叩かれた。

目を開けて周りの確認をしてみると、前の席に座つている男子……

名前なんだつけ？まあ、いいや。

カバ男くんが、教科書を持つてもう一発叩く準備をしている所だつた。

「なにをする」

とりあえず、一発目を防ぐために、教科書は没収。

ついでに、眠れそうな場所を邪魔されたので、少しだけ不機嫌。

「いや、先生がお前を起こせつていうからさ」

だからつて、人の頭を楽器かなにかの代わりのように、連発で叩こうとしなくてもいいじゃないか。

「そう。ありがとう」

しかしそんな心境は心の奥底にしまい込み、寝るのを諦めた僕は、黒板に書かれている文字を、前の席に座っている男子のノートに書き込んでいく。『冗談だけど。

実際は、書いている振りをしながら、東条さんと出かける場所を決めていた。

あのイベントの買い出しに行くんだから、女の子の意見を聞けるのは嬉しいかもしれない。もちろん、楓にはバレないようにななくちゃ。

どこがいいかな。

あつ、そういうえば、もう買つてあるんだ。あれと今度買いに行つた時の物を比べてくればいいか。

東条さんの意見も聞けるしね。

「はい、じゃあこの問題を……真田。答えてくれ」

「はい。えーと、文中に出てくる『リアルなんてクソゲーだ』と連発している少年は、リアルに絶望している事は明らかです。そして、彼はギャルゲー界では神と呼ばれている存在で……」

「今の時間は数学だ！！」

「じゃあ、 $x = 2$ で」

「じゃあってなんだ！ しかも今の時間は角度を求めるんだぞ。ちやんと黒板見るんだ！」

「あー、なるほど。四角形の角度のうち、二つは分かっている奴ですね……えーと、織田信長で」

「誰が過去の偉人を答えると…？ 彼はどうでもいいから、角度を答えろ！」

「織田様を馬鹿にするな…！」

「なんか怒鳴られた！」

この後、先生にこつてり絞られた。個人的には、腕を雑巾絞りとかやられるくらい苦痛でした。

先生の説教から解放された僕は、教室に戻ってきた。

寝ぼけていたんだから、あんな発言をしても許してくれたらしいじゃないか。まあ、無理だよね。常識から考えても。

自分の席に座ると、楓が近づいてきた。

「恭史、さっきの授業は寝ぼけてたの？」

「……うん、まあね」

「寝ちゃ駄目だよ。それだから、テストの点数が良くないんだよ？」

「そうだね」

「む……なんか上の空。どうかした？」

「眠い……」

僕がそう言うと、楓は少し呆れたように溜息を吐いた。
いや、だつて仕方無いじやん。昨日の夜はちょっと火野について調べていたんだから。

約十年前の事件だから、ネットで色々と調べてみたんだ。こうでもしなきや、当時八歳だったふりでいいな僕の記憶を呼び起こす事が出来ないと思ったから。

バイトの初日を終えて疲れてたけど、寝れなかつたので、眠くなるまでの暇つぶしというのが理由の大半を占めるのだけど。それで、調べた結果。

彼女はまだ、二十五歳前後だという事が判明した。なんと、頭が狂っている犯罪者をバリバリやっていた頃は、まだ十五歳だったようだ。

……名前や歳まで分かってるのに、なんで警察は補導までいかなかつたんだ？ ていう疑問はさておき、僕が感じた事は、やっぱりただの糞みみたいな犯罪者だという事。

火野美見が民家に炎を咲かせた回数は、正確にいつなら十五件だった。

そのうち、九件の家が全焼し、死亡した人は二十一人。

生き残った人は何人かいるみたいだけど、気付いたら火が迫ってきていたとかなんとか証言しているようだ。

火野の顔を見た人はいない。だから、昔の卒業アルバムとかの写

真がネットに貼つてあつたけど、どうせ整形してるんだろうな。

昔の火野の顔を表現するならば、端正な顔をした狸という言葉が

ピッタリだと思つ。

森に行けばオス狸にモテモテだらう。

火野の家族はすでに亡くなつていて、その死因は火事に巻き込まれたせいらしい。これもネットからの情報だけど、彼女の最初の犯罪が家族殺しだとか。

「恭史、大丈夫？ なにか考え方？」

「ん。いや、なんでもないよ。ただ、昔の事を思い出してただけ」「昔の事？」

楓は唇に指を添えながら、雲が覆い隠している空を見上げる。まだ少し早いけど、空には丸い月が浮かんでいた。今日は満月か。ウサギがぺったんぺったん餅をついて、それを地上に隕石のよう降らす日ですね。この日は、誰かが隕石に当たつて死ぬ確率が高いとか。

「……ありえないけどね」「

「ん？ どうかした？」

「いや、じつちの話」

「今日の恭史は独り言が多いよね」

「眠いからね」

「なんでそんなに眠いの？ 夜更かしでもした？」

楓が首を傾げながら聞いてくる。

「ちょっとネットで調べ物しててね」

「……えつちなもの？」

「楓……。僕は明とは違うんだから。そりやまあ、百パーセント興味ないのかどうかと言われたら、質問してきた人の首根っこを掴んで往復ビンタするけどさ。それでも、夜にそんなもの探さないよ」「うーん……なんか不健全だね」

「え？ なに？ 僕にそういうのを見るの推奨してるの？」

「あはは。それはちょっと嫌かも」

なんかハツキリしないな……。どうしたんだううか。

全く、今日の楓は一体なにを考えているのだろうか。

そんな事を考えていると、楓はパンと両手を合わせた。

「そうだ。今日の放課後、時間ある?」

「あるかないかと言われば、ないの方に頷くかな」

「分かった、暇なんだね?よしよし。じゃあ、二人で部活のスケッ

トに行こうよ!」

「えー」

「でね、その助つ人する部活なんだけど」

「あつ、僕の言葉は無視なんですね」

「なんと、映画撮影部なんだよ!」

「……そんな事言われてもね」

別に興味ないし。

ていうか、撮影部って、映画を撮るんだよね?そのヒロインに楓を起用とか?

だめだめそんなの。いくらお金を積まれても、僕が許しませんぞ。放課後になりました。

みんなが鞄に勉強道具を詰め込んで下校の準備をする中、僕達は一足先に教室を出ていく。

「恭史、はやくはやく」

「そんなに焦らなくとも。どうせ、部員だつて、ゆつくり部室に行くんでしょう?」

「それもそうだね」

そう言つて、楓の歩く速度が弱まる。

なんでこんなに楓は急いでいるのだろうか。いつもなら、いつも部活動けも断つてているのに。

なんで映画撮影部のを受けたんだろう。なにか理由があるのか、それともただの気紛れか。

楓の顔を見てみる。いつもの笑顔を浮かべていて、なにを考えているのか読み取る事は出来ない。

「うーん」

よく分からぬまま、僕は楓について部室に直行する。

文科系の部室は旧校舎にある。

僕達がいつも勉強をしたり図書館とか職員室がある場所が新校舎で、新しいのが出来るまで使われていたのが旧校舎だ。

といつても、この旧校舎。それほど古いものでもなく、築二十年前後のものだ。多少、外観は汚いものの、中は結構綺麗に保たれている。

三階建の校舎で、『L』字型になっている。

「この校舎にある一階の一一番奥に部室はあるんだって

「へー」

緩やかで温かい風が吹き、僕の目の前にそびえ立つ校舎にぶつかつていく。

「じゃあ、はやく行こうっ！」

「そうだね」

楓は足取り軽く校舎の中に入つていいく。

旧校舎に足を踏み入れた瞬間、カビみたいな臭いが鼻をツンと刺激する。

僕はそのあまりの臭さに地面をのたうちまわり、断末魔の悲鳴を上げながら外に退避する。

「恭史大丈夫！？」

割と嘘ではない。ほぼ本当の事なんです。だって、カビの他に湿気とか埃が凄かつた。アレルギーの僕には地獄だ。

しかし、結構、人が出入りする場所なのに、なんでこんなに埃が溜まっているのだろうか。清掃員さんが掃除しにこないのかもしないし、部員が埃を吐いているのかもしない。

「落ちついた？」

楓が僕の背中をさすりながら、心配そうな声をかけてくる。僕はそれに自分では絶好調だぜとかいう感じの笑顔で対応してみた。

楓の顔が引きつった。なぜだ。

「とにかく、もう大丈夫だから。早く部室に行つて用事終わらせよう?」

「そ、そうだね」

楓が頷いたのを見て、僕は大きく息を吸い込んだ。肺一杯に酸素を溜めて、いざ出発。

「恭史、じゅうじゅうじ

急いで先導してくれる楓の後を着いていき、息が限界になりそうだつたら近くの窓を開けて新鮮な酸素を吸つて、また移動を繰り返す。

そんなこんなで、楓が助つ人をする映画研究部の前についた。

「静かだけど、本当に人がいるのかな?」

「さあ、僕には分かんないよ。楓は今日、ここに来るよつて言われてるんでしょ?」

「うん」

「だつたらいるんじゃないかな。とりあえず入つてみようか」

以上、窓から首を突き出した状態の僕と、それを苦笑しながら見ている楓との会話でした。

楓が部室の扉を開けて、中に入ったので僕もそれに続く。中は大和撫子が座つても不思議じやないほどの和室で、六畳ぐらいの広さだった。

部屋の真ん中には、大黒柱のお父さんみたいにじりじりとした存在感を放つて木製の机があつて、それを囲むようにして幽霊みたいな顔をした四人が座つている。

幽霊という表現はひとまず置いといて、楓が中に入つてにこやかに挨拶をした。

「こんにちはー」

ぺこりとお辞儀して、顔を上げてから一同を見渡す。背後からでも分かるほど、困惑している。

「え、えーと……」

なにか言いたそうにしていた楓の肩を掴んで、僕は耳元で囁く。

「なにこの幽霊集団。夜に墓場で運動会でもする気? 試験も勉強もないとか羨ましい言葉を言つ気満々なの?」

「えつとー、それはね。今度撮影する映画の衣装とかじやないかな……あははは」

後回しにしていた、幽霊という表現についての説明でもしよう。なんかみんな、頭に三角巾つけて白装束着て顔が真っ青で驚くほど生氣がない顔をしているからだ。

と、その中の一人である、大柄の男性が僕達に近寄つてくる。「やあやあ、よく来てくれたねサナギ君」

「……蝶々とか蛾のサナギ持つてきたの、楓?」「持つてきてないよ?」

「じゃあ、なんでこの幽霊大将さんはサナギが来たつて言つてるのさ?」

そこまで楓が言いかけたところで、幽霊大将さんの武骨な手が僕の肩を掴む。

「無視するとは酷いな、サナギ君」

「サナギって僕の事ですか?」

なんとなく上級生みたいな雰囲気を醸し出している（僕は最上級生だけど、なんとなくそう感じる）幽霊大将さんにそう言つと、彼はその衣装とはとても似つかない爽やかスマイルを浮かべる。

「当然。ふう……駄目だ、喋るのめんどい」

「そんな笑顔を浮かべているのに、ミクロンも相応しくない言葉吐きますね」

「演技だ。あー、面倒」

なにこの人。

「とにかく、僕の名前は真田ですよ。サナギとかじゃないですよ。もう成虫です」

「お前は虫なのか。喋らせないでくれるか?」

「そつちから話しかけてきたんじゃないんですか」

僕とダルダル幽霊衣装さんがそんな会話をしていると、さすがに見かねたのか、奥のほうに座っていた女性が立つて近づいてきた。

「ごめんな、真田さん。」この人、ちょっと頭いってるから

「さらつと暴言吐きますね」

「」の女性は、おそらくは映画撮影部の中で唯一の女の子だと思われる。

他の人が死に装束みたいな感じなのに對し、彼女は清楚なワンピースを着ていて、頭には麦わら帽子を被っていた。

肩の上あたりを彷徨つて居る茶色い髪の毛は、クルクルとパーマがかかっている。

見た感じ、大人し目の女の子なのに、暴言を吐くのが趣味らしい。まだ知らないけど。

ていうか、なんで僕はさつきから丁寧語を使つて居るのだろうか。最高でも同級生なのに、こんな言葉遣いにする理由が皆無だ。

しかし、ここで気づいたことがあった。

「えーと、なんで僕に話しかけてくるんですか？ 楓に用があるんじやないんですか？」

僕の当然といえば当然の問いに、しかし目の前の二人は、なんでそんな事を聞いてくるのか小一時間程度、問い合わせたいと言わんばかりの顔を近づけてくる。

女性の方が首を傾げながら口を開いた。

「頭に蛆でもわいてるの？ おつと失礼。真田さんは本当に蛆だよね。おつと失礼」

「……」

「あれ？ もしかして怒ってる？ あはつ、珍しい。真田さんのそんな顔を見れるなんて、ミジンコが直立不動する確立くらい珍しいよね。おつと、ミジンコに失礼」

僕に失礼だろ？ それと、ミジンコが立つ可能性なんてゼロなんじゃないの？ 知らないけど。

「すいません。あたし真田さんのファンなんです。キャッイツチャッタ
ツタ」

「そんな事どうでもいいですから、なんで僕に話しかけてきたんですか？」

「あたし真田さんのファンなんです。キャッイツチャッタ」

「……どうも」

「ぶつきらぼうだね。そんなんだから、生きたまま解体される時の魚みたいな田だつて言われるんだよね。おつと、失礼」

「楓、帰ろう。こんな場所にいたら、精神衛生上よくないよ。特に楓みたいな子には毒だよ」

僕は楓の手を引っ張つて、その場を後にしようとする。しかし楓が動かない。

「どうしたの楓。早く帰りう？」

もう一度だけ彼女を引っ張つてみるが、地に根付いた大木のように動かない。一体どうしたのだ。

僕が『?』を頭上に浮かべていると、唐突に楓の手が僕の肩を掴んで、再び失礼な女子後輩 略して、口にチャックすればいいのにもしろ縫い付けるよちゃんに向かわせてくる。

「映画撮影部の皆さん、よろしくお願ひします」

なんかもう、後光が射すんじやないかつてくらい神々しい笑顔を浮かべた楓は、僕の背中を軽く押して何歩か前に進めてくる。訳が分からず、僕は楓の方を何度も振り返る。

しかし彼女は、幼子を見送る母親のように軽く手を振っているだけだった。なにをしたいのか意味不明なんだけど。

あれか、これから僕を集団リンチにする気なのか。それに楓が一枚噛んでるわけだ。女の子と話した罰なんだぞつ、とかそんな事言われそうだ。ありえないけど。

「真田さんは、まずこれに着替えてね」

口にチャックちゃんが僕に、白装束を差し出してくる。なるほど、勢い余つて殺つちゃつた時の服まで用意しているなんて、ここまで

くるともう感動なのだ。

「えーと、真田さんの役は、墓場から起き上がったゾンビだからね。ちゃんと演技してよ。猿芝居くらいはできるよね。おっと失礼」

むしろ僕の演技は大根なんだけど。

……ていうか、なにこの流れ。え？ なに？ 僕はこれから役者になるんですか？ なにをどうしたらそんな罰ゲーム的なことをやらされるんだろ？

「恭史、頑張つてー！」

楓の声援を背に受けながら、僕はこの世が滅亡でもしねーかなとか思いながら嘆息する。

あれから僕は、言われた通り白装束に着替えて、そして学校の中庭に来ていた。

春も中盤に差し掛かっている陽射しが降り注ぎ、じんわりと汗がかくほどの良い陽気になっていた。

「じゃ、真田さんはその芝生に寝転がって、出来るだけゾンビっぽく起き上がって」

口にチヤックちゃんとそう言われて、従つてしまつのはなぜなのだろうか。

とりえず寝転がる。草の先端が鼻に入つて少し痛かった。

「はあー、帰りてえ……あの頃に」

僕の横で同じようにしている大柄な人、さつき初対面の時、かなりダルそうにしていた男の人がそう咳く。相変わらず笑顔なのに吐く言葉はすごく湿っぽい。

「なあ、サナギ君」

「真田です。次間違えたら、十文字槍で突き刺しますよ」

「あーはいはい。ごめんなアナゴ君」

「……」

「で、サナギ君。君は帰りたい過去というものがあるかね？」

こきなりなにを言い出すんだよ、この人。そんなんのないに決まつてるじゃないか。

「無いですよ」

「そうかー。君は平和に生きてきたんだな。はあ……生きるのダリイ……」

帰りたい過去つてものはないけど。直したい過去ならある。それも大量に。

それでも、青い猫型ロボットがきて、なにか一つだけ過去をやり直させてくれるというのなら、僕は迷う事なく『あの日』をやり直す。

僕のせいで壊れてしまったあの娘を壊れさせないために。そのためなら、僕はなんだつてする。

「はい、真田さん立ち上がりー」

僕が過去の思い出に埋没していると、口にチャックちゃんがそんな事を言つてきた。

だから僕は、ゾンビを虐殺するゲームで見たような動きをしながら立ち上がる。

「違う違うー、セーフじゃなくて、もつと……」ひへ、ふらーっとぬめらーっと

ぬめらつてなんすか。

その後もチャックちゃんに言われた通りに演技をこなしていくが、どうこうわけか彼女のお気に入りな演技が出来ない。

「全く。ゾンビの役も出来ないなんて、なんのためにそんな目をしてるだか。これなら『ミジンコ』をゾンビ役にした方がマシよ。おつと

失礼

「……」

ミジンコ以下の演技力らしい。

残念だ。せめて大根以下にしてくれればいいのに。

というかですね、さっきから僕の横で「動くのダリイ」とか「死にてえ……」とか。笑顔で言つている人がいるからあんまり集中出

来ないのですよ。嘘じやないってのが悲しいね。言い訳だもんね。僕は、横で寝転がつたまま、いつ死んでもおかしくない死にたがり屋さんに話しかけてみる。

「あの、死にたいんだつたら、良い人紹介しますよ

なに言つてんだ僕は。まさかの他殺斡旋ですか。もしくは自殺教唆。殺人教唆っていうのも悪くない。それから、ドラ焼き食べたい。甘いものをください。

「マジか？あー、でも、その人に会いに行くのもダーリイ……」

とこどん駄目人間だな。そしてこの話題に食いつくな。

本当に紹介するぞ？ 不同集成を。まあ、紹介っていうよりも、狙われやすくなるようにアドバイスするだけだけど。

「恭史、頑張れー」

近くにある木の陰に入っている楓が、にこやかにほほ笑みながらエールを送つてくる。

「……」

その姿を見ながら、僕はようやく悟った。

なんで今日に限つて、楓が部活の助つ人を引き受けたのか。その理由は、おそらくは楓自身が対象じゃなくて、僕が対象だからだろう。

もしも楓が、役の助つ人として呼ばれたのなら、断つている可能性が高い。

しかし今日は、なぜか僕がその助つ人として呼ばれているのだ。

こんな事、高校三年間では初めてだ。

なんでこの映画撮影部の人たちは、直接僕に言いに来なかつたのかは不思議だけど、それでも楓を通したのは正解だろう。

僕に助けてくれとか言われても、右から左に受け流した後ハンマーで叩いて粉々にしてしまうのが普通だ。

だけど、楓の頼みなら断る事ができない。なるほど、この人たちはそこまで思考していたのかもしない。

そして楓の心情だけど。たぶん、僕を頼ってくれる人が現れた事

が嬉しかったのではないだろうか。

頼る事はあっても、頼られる事はないからね、僕は。最後に頼まれごとをされたのは、文化祭準備の時の「このシールそこに置いといて「くらいだらうか。

閑話休題。

楓は、僕が万能人だと本気で感じているところがある。そんな僕が、人に頼られないことを不服に思つて、本人の承諾なしにOKしたのかもしれない。

つた。

だから今回の件は、僕が認められたと思って、本人の承諾なしにOKしたのかもしれない。

「まったく……」

どこまでが本當で、どこまでが僕の虚構なんだろうか。

「はいオーケーです！ 真田さん、演技上手くなつたじゃない

「こんだけ演技すれば少しさは上達するよ」

時刻は午後七時。

辺りはもう、暗くなつていた。

放課後に真っ直ぐあの部活に行つたのだから、最低でも二時間くらいは中庭でゾンビ役の演技をしていたことになる。

空はもう太陽が隠れていて、中庭は明るい。なぜなら、屋上からへんからここがライトアップされているからだ。

見上げてみると、なんかでかいライトがいくつも並んでいる。あれは部費で買えるものなのだろうか。

「はい、それじゃあ次は……」

演技監督兼ヒロインの口にチャックちゃんが次に行こうとしたので、僕はここで挙手する。

「ごめん、僕は用事あるからもう帰る。楓も帰ろう?」

木の幹によりかかつて眠そうにしている楓に近寄り、彼女の目線と合わせるためにかがみ込む。

「ちょっと真田さん。これからが重要な場所なんだよ？ なのに帰

るなんて、文化祭準備の時に独りで帰ろうとする人ぐらしく空氣読めないよね。おっとここれは去年の真田さんだった。失礼

なんで知つてんの。

「……とにかく、僕はどうしても外せない用事があるから無理。また今度にしてくれ」

「あつ、ちょっと

□にチヤックちゃんがなにか騒いでいるが、僕は楓に手を差し伸べて立ち上がらせると、そのまま歩いていく。

楓と途中まで一緒に帰つて、安全のために普段は徒歩で帰る彼女がバスに乗るのを見届けてから、僕はバイト場に向かう。

相変わらず、ファミレスっぽいファミリーレストランだけど、今日は繁盛しているようだ。

馴れ子ちゃんとかその他のフロアアバイトさんが忙しそうに料理を運んで行つたり、店長さんがレジを打つたりしている。

入り口のところでその様子を見て、僕は少し急いで店の中に入る。来客を知らせるチャイムが鳴つて、バイトの人たちがこっちに振り向く。

僕は挨拶をしながら店の奥の方……厨房の更に奥にある休憩室に行く。

そこで自分のロッカーからバイト着を取り出して手早く着替え、手などの消毒を行つてからフロアに戻つた。

その途中で小堂さんがいたけど、忙しそうだったので挨拶だけをしておいた。

僕がフロアに入ると、すぐさま店長さんがやつてきて、注文を聞いてきてくれと頼まれる。

僕は言われたとおりに行動して、家族連れで来店している人たちの注文を聞く。

「なんでこんなに混んでるの？」

お客さんに料理をほぼ出し終えて徐々に余裕が出てきたので、僕は隣にいる馴れ子ちゃんに話しかける。

「それはね、店長さんが集合したからなんだよ」

「店長さんが集合？……ああ、集客ね」

なんでこの子はこんなに言葉を間違えるのだろうか。言語中枢に何か異常があるのではないか。

それともこの子は実はスペイで、他の仲間に知らせるための暗号だとか。ありえないけど。

「もつと速く来いよ真田」

「すいません。こんなに混んでるとは思つてなかつたもので」馴れ子ちゃんと雑談していると、厨房の方から小堂さんが出てきて、開口一番に文句を言つてくる。

「でも、僕がいなくとも大丈夫じゃないですか。」「」えーと。
え……。フロアのバイトさんは一杯いるんですけど。

馴れ子ちゃんの本名が分かんなかった。なんだっけ。堀切川だけ。佐藤だけ。右京だけ。

小堂さんは緩やかに首を振つてから、大きく肩を回した。

なんだろう。そんなに肩が凝つてるんだろうか。肩叩き券はあげていないので、ここは触れないでおこづか。

「いや、店長から聞いたんだけどよ、どうやらお前も厨房をやるらしいぞ。フロアと厨房の仕事を全部覚えさせられてよ」

「え……」

なんだそれ。僕は芸を仕込まれる動物じゃないんだぞ。そりやあ、前にそんな表現したことはあるけども、僕はれっきとした宇宙人だ。間違えた、人間だ。

まだバイト始めたばかりなのに、そんな一杯教えられても、歌が下手なガキ大将並みに上達しないぞ。

僕がそんな事をもんもんと考えていると、店長さんがこっちに向かってきている事に気づいた。

なんか嫌な予感がする。また味見してくれとか言われるのだろうか。そしたら今度は、「あなたの残念な味覚に乾杯」とか言いかねない。

「真田くん。これはたぶん君の知り合いの忘れ物だから、届けてあげてくれ」

そういうながら店長さんは、僕に帽子を差し出す。

それはよく紳士が被っているようなものを小心翼しくしたような感じのものだつた。

なんだろう。店に来た人は全員、僕の知り合いだとでも思つていいんだろうか。

もしそうだつたのなら、店長さんの頭を斜め四十五度でチヨップするしかない。

だつて僕は友達少ないし。

「なんで僕の知り合いだと思うんです?」

店長さんに訊ねると、彼は豪快な笑みを浮かべながら言った。

『俺がルールだからだ!』

これは違うよ。僕の脳内妄想。

実際は、「君の知り合いが帰つた後に座席に落ちてているのを発見したからな」などという面白味のない答えたつた。

この店長さんの答えについて考へるなり、どうやらその知り合いは楓のことらしい。

「ちなみに私が散見したんだよ!」

面倒だから訂正はしない。

僕は店長さんから帽子を受け取り、しげしげとそれを眺める。

しげしげとヒゲヒゲつてなんだか似てるなとか思いながら、楓がこんな持つてたつてとか思考の海に潜り込む。

僕が知つている範囲内では所持していないという事が判明したけど、やっぱり女の子だから僕の知らないものも一杯あるんだろうなあ、という結論に着地した。

バイトが終わると家に帰った。もう夜も遅い。

僕は店長さんから預かった、たぶん楓の帽子を自分の机の上に置き、ついでに引き出しを開ける。

そこに入っているものを確認して、ああ、もうすぐだな、とかボケツと考えた。

家で「ロロロロ」と、こきなりどら焼きが食べたくなったのでキッチンに行つて探してみる。

「……ない」

どうしようかな。買い物に行こうかな。いやでも、不同集成がどこにいるか分からんないし……。僕だつてまだ死にたくない。

「……」

あつでも、あいつは家にいる家族を皆殺しにするのが好きな異常者なんだつた。だったら、外にいる方がまだ安全かもしれない。

「買い物に行こう」と

財布をポケットに突っ込んで、母さんにスーパーに行つてくれる伝える。

「不同によろしくねー」

そんな冗談を背に受けながら、僕は家から出た。

外はヒンヤリとした空気が漂っていて、シャツだけでは少し寒いくらいだった。

空を見てみると、満月だ。だけ……。

「……赤い」

どこまでも禍々しく、不幸を呼び寄せるかのように紅く光り、不吉を連想させるかのように朱く漂い、しかしここか美しさを感じさせる満月。

「さむ」

早く買つて帰る。

僕の家からコンビニまでは、普通に歩いて行けば十五分ぐらいかかる位置にある。

自転車だつたらもう少し早いのだが、ここには近道というものが存在し、しかもそこはマイバイクは通ることができない。

その近道を使えば、八分くらいで到着できる。

つまり僕の家とスーパーは、グルッと迂回しなければ行けない場所にあるのだが、近道はそこを直線距離で繋いでくれる。どこでもドアがあればもっと楽なんだけど。

僕は携帯を弄りながらその近道を目指す。

歩いて数分。そこへの入口が顔を見せた。

古い日本家屋。そう表現するのが相応しいと思うが、今は誰も住んでいない一軒家のさびついた門がそれだ。

ここは鍵がかかっていないので、誰でも通る事ができる、冷たい門を横にスライドさせて口を強引に開けさせた僕は、その中に入つていく。

何年も手入れされていない庭なので、雑草が伸び放題で、僕の腰の辺りまできているものが多い。

昔はキレイだつたんだろうなと感じさせる溜池の跡地を横目で見ながら進んで行き、縁側が見える位置まで来た。そこで僕はほぼ反射的に身を屈めて雑草の林に身を隠す。

家の中に誰かいる。

この家は何年か前に住んでいた、お祖父さんお祖母さん夫妻が亡くなつてからは、無人のはずだった。

灯りだつて点いてないし、暗さに慣れてきた目で見ても手入れがされていないとはっきり分かる外装。

誰かが住んでいる可能性なんてほほゼロ。なのに、誰かいる。

一人じゃなくて二人。

縁側から見える位置にいるそいつらは、一人が馬乗りになつてもう一人がその下で必死に腕を振り回していた。

叫び声が聞こえる。

怒鳴り声が聞こえる。

これで、ああなんだ、痴話喧嘩か。なんて感想を抱くほど、僕は

世間ざれしていない。

だけど、シルエットしか見えないのでなにをしているのかその詳細は分からぬ。

夜空を見上げると、さっきまで出ていた月が雲に隠れていた。

止めに行くべきだろうか。その考えが浮かんだが、炭酸の泡のようにすぐに消え去った。

出ではいけない。本能がそう告げている。これは僕の頼りない勘だから當てにならないけど……でも出ちや駄目だ。

体がブルツと震える。

それは、今しがた吹いた冷たい夜風のせいではなく、目の前で行われている行為が過去の記憶と一本の線に繋がり始めたからだつた。馬乗りになつている人が両手に持つたなにかを下にいる人物の胸に振り下ろし、そしてまた持ち上げる。その際に、なにか水のようだな。だけどそれよりも粘度が高そうな液体もストーカーのように一緒に上がっていく。

その人物が持つているのはおそらく刃物で、噴水のようにまき散らされているのは血だろう。

殺人現場。

この言葉が脳裏に浮かび上がる。

昔の記憶が目の前にちらつき始めたが、僕は現実から離れなかつた。

なぜか。

魅入られていたからだ。

殺人という行為にではない。

それを行なつてている人物の華麗な動作に。

それはまるでなにかの儀式のように意識的に執り行われ、しかし感情を感じさせないその動作はまるで機械のように無慈悲に刃物を獲物に突き立て、噴出される血が黒一色の周囲を鮮やかに染め上げる。

身体に染み付いている動作をただ単に無意識的に繰り返す。

それは洗練された動きで、行為 자체はおぞましいはずなのに、見るものを引き込み、魅了し、虜にする。

僕はいつのまにか、息をする事さえ忘れていた。

目の前で繰り返される余りにも恐ろしい芸術に、それほどまで夢中になつていたらしい。

下にいる人の動きが止まつた。何回も刺されていたのだから、当たり前なのだろう。

……こんな場面を見ても、僕は冷静だ。やつぱりそれは、過去に起因するものだろう。

それでも、このままではマズイと思う。だから逃げよつとした。ゆつくりと足音を立てず後に後退する。

しかし、ここで予想だにしない事が起つる。

パキッ。

微かな。本当に微かな、だけどこの静寂が支配している夜においてはとても響く音が足元から鳴る。

シルエットの人物がこちらを振り向いた。

その目を見た瞬間、ゾッとした。

赤い目。

それはまるで、今日の満月のように赤かつた。

だけど、背筋が冷えた理由はそれだけじゃない。

満月が、雲の間から顔を出す。

そのせいで、人物の顔が月明かりによつてボンヤリとだが見えた。見えてしまつた。

リボンで右サイドの髪を縛つて上げているその髪型は。

そう、それはまるで今日の。

「かえ……で……？」

第4・5話 殺人少女は笑わない

見られた。

縁側の位置から見える雑草の群れの中にいた誰かに、見られてしまった。

殺さなきや。

証人なんて生かしておいてもメリットなんか生み出さない。生産するのは私に対するデメリットだけ。

殺さなきや。

自分に言い聞かせるように心の中でもう一度だけ咳き、私は動かなくなつたタンパク質の塊から離れる。風が吹き、頬に当たる。

その寒さに身震いしながら、頬に片手を持っていき撫でるようにした。ぬるつ、と。なにかが指の腹に粘着する。

雑草の方に気を配りながら手を見てみると、赤い、液体が付着している。

それを視覚で認識しても、気分が高まらない。冷めていくだけだつた。

雑草の近くに到着した。

握り締めていた包丁をさらに力強く握つて、上からさつき人影を見た場所を見下ろす。

だけどそこにいたのは小さな野良犬だった。

いまここでなにが起こつたかなんて、なにも理解していないどう純粋でつぶらな瞳を私に向けてくる。

「…………」

私が見たと思っていたのは、人影なんかではなくこの犬の影だったのだ。

さすがに、掃除の後は興奮してたらしい。こんな小さな影を人と見間違えるなんて……。

でも、安心した。

私だけ、社会のゴミ以外は掃除したくない。

いくら口封じのためだからといって、一般人は殺したくない。あの人が、そう言ってたから。

朝が来た。

そう感じたのは、潜っていた布団から微かに見える範囲に陽光が射しこんできたからだ。

僕は布団から這い出し、カーテンを閉めていなかつた窓から外を見る。

いつも見ていて、どこにでもあるような青空が広がっている。

だけど、その下に居る僕は、おかしくなつてしまいそうだ。

元々おかしかつたのだけど、今では一秒進むごとに、僕の中のなかが欠けていくを感じていた。

昨日の夜。

つまりは楓みたいな人影を見たあの時、僕はすぐに逃げ出した。といつても走つて逃げたわけではなく、あの近くの塀には人が通れるほどの穴が、草陰に隠れているのだ。

そこから、人影が近づいてくる前に逃げただけの話。

目を閉じれば、ビデオのように鮮明に思い出すことが出来る昨夜の出来事。

あれを行つていた人物は本当に。

「いや、そんなわけない」

楓があんなことをするはずがない。きっと、よく似た誰かと見間違えただけだ。

こんなのは、なんの問題でもない。

暗闇で一匹一緒に並んでいる猿の種類を当てろといわれて、実は片方はフクロウでしたっていうくらいに解く氣にもならない些細な問題だ。

そう、あの時は暗かつた。薄ボンヤリとしか顔が見えていなかつたのだ。ありえるありえる。

とりあえず、シャキッとした頭を用意めさせると、僕は自室

からで出て洗面所に顔を洗いに行つた。

洗顔したおかげで頭が冴えてきたので、僕が居間に入ると今日は珍しく母さんが作つてくれたので、それを食べた。

制服に着替え、そして時刻を確認。まだ時間は早いけどいいかな。靴を履いて僕はいつもよりも十分近く早く、家を出た。

楓とずっと一緒に歩いてきていた登校の道を、僕は一人で歩く。高校になつてから一人で学校に行くのは、楓が風邪をひいたほんの数回だけだつた。

だから、こんなにもなにかが足りないと思つ。心の中が空洞になつたように、なにかを考えることさえも苦痛になる。

目の前に楓が住んでいるアパートがあることを確認した時、一度、彼女の家に寄ろうと思つた。

だけど、僕は結局そこには行かず、まるでマスクミに待ち伏せされている芸能人のようにそのままの場から立ち去ることしか出来なかつた。「なんなんだろ?」「なんなんだろ?」

僕は一体、なにを恐れているんだろうか。

溜息を吐きながら、僕は横で流れている小川を見つめる。陽光を反射してキラキラと光る水面は、とても美しく、まるで宝石のようだつた。

地面を見ると、草が茂つていて、良い感じに伸びている。

そして、目を上げると、桜の木が禿げていた。

一週間くらい前にここを通つた時は、ゴールデンウイークが終わつた直後だったから、ちょうど散り時で地面にまんべんなく花弁が敷き詰められていたつけ。

僕は後ろを振り返る。

そこには楓のアパートがあつて、今まで飽きたほど見てきた風景も確かにそこにあつた。

「……」

頭を振つて、僕は登校ルートを歩く。

校門を潜ると、明が走つて近寄つてくる。通り過ぎる時にラリアットをされるのではないかと想い身構えたが、彼は普通に僕の横で止まる。

明はそのまま、一カツと白い歯を見せて笑う。

「おはようさん」

「……おはよう」

「なんかいつにも増して不機嫌じやないか？」

「そんな事ないよ。僕はポーカーフェイスなら世界選手権に出れるとも噂されるんだぞ」

「いや、それは隠しているだけであつて、こいつ、なんつーか、全体的に怒つている雰囲気みたいなのが出てるんだよ」

「あははは。なに言つてんだよ明。このつ」

明の額にデコピンを軽くする。

すると彼の顔から血の氣が一斉に逃げ出した。ガクガクと産まれたての小鹿みたいに震えて、僕の額に手を当つてくる。

「熱なんてないよ」

「いや、お前は本格的におかしいぞ」

「またまたー。なに言つてんだつーの」

もう一度デコピン。

「あ……ああ……」

この世の終わりでも見ているかのような絶望的な表情をする。

「お前……気持ち悪いぞ」

「普段から気持ち悪いよ」

「頭、大丈夫か？」

「うん大丈夫。若秃げにはまだ早すぎるから」

「そういう意味じやねえよーーー」

明からの「お前、おかしい」という言葉爆弾による攻撃は、僕の

クラスの前まで続いていた。

「明のクラスは向こうでしょ。ほら、早く行けって」「休み時間になつたらまた来るからなー。そのおかしさ直しておけよー。」「

そう言つて僕に背を向ける明。僕は彼が教室内に入るのを見届けてから、ぼそりと呟く。

「僕が狂つてるのは、昔からだよ」「壊滅的に、治しようなんてないよ」「最初から最後まで。僕はおかしい。

表面上だけでは、それを捉えることはできないかも知れないけど。それでも、内面は、狂つてている。

僕も、彼女も。

溜息を吐き出し、僕は自分のクラスに入った。

窓際最後尾の席でボーッとしながら座つていると、クラスメイトの女子が横に立つ。

「真田くん」

最初は、武士の真田幸村の事を想像の中で呼んでいるのだろうと考へていたが、それはどうやら僕に向つてのものだつたらしい。顔をその子に向ける。

「なにか用？」

「いや……えっと……その」

なにか言いにくくい事でもあるのだろうか。彼女は、俯いたまま言葉を続けた。

「その、相崎さんは？」

「知らない。一足早い昆虫採集にでも出かけてるんじゃない？」

「今日は、まだ会つてないの？」

僕の言葉を無視して、そう言つてくる。なにがしたいんだ、この子。

「そりゃあね。会わない日があつても不思議じゃないでしょ

「そつか……」

彼女の声に、陰りが芽生えたような気がした。それはまるで、嫌な予感が当たった、とでも思つてゐるかのよつこ。

「なに、楓になにか用事？ 直接言いにくい事だつたら、伝言するけど」

「ううん……なんでもないの。気にしないで」
気にするなと言われても、気にしないのは無理だ。
だけど僕は、面倒、ことを抱えたくなかったため、適当に頷いておく。

彼女は、友達の元へと駆け寄つていく。そして、何事か話し始めた。

「やつぱり…………みたいだよ」

「えー…………なの？」

「うん…………だつてさ」

秘密の話をするよ、て、彼女たひまつそこそと小さな声で話しだめた。時折、僕の方を見てきては、視線をすぐにそらす。

最近の若い子はわけがわからんな、などと思いつつ、僕は雲がかかつてきだ曇の空を見続けた。

楓は昼休みになつても学校に来なかつた。寝坊でもして、途中から登校してくるのがそんなに照れくさいのか。

「真田、どうやら普通に戻つたみたいだな。よかつたよかつた」

「朝も言つたけど、僕はいつも通りだつたよ」

昼休み。僕は中庭で明に絡まれていた。

「あはは。そうか、悪かったよ。ほら、これでも食つて朝の事を水に流してくれ」

そう言つて差し出してくれたのは、ドラ焼きだつた。

「お前、これ好きだつたろ？ 購買に残つてたのを買つてきたんだ。遠慮しないで食つてくれ」

「……どうも」

ドラ焼きを見た瞬間に頭痛がして、吐き気まで襲つてきやがつた。そんなに早く腹に入れたいのか、待て待て。そんなにはやるな。冷静にいこうぜ。

「どうしたんだよ、そんな敵でも見るような田をして」

「いや、なんでもないよ」

明からもう一たドラ焼きを小さくちぎって、ほとんどビンタまずに飲み込んでいく。

「ははっ。真田は本当それ好きだな」

「まあね」

そんな僕の姿を見ても、明はなんとも思わないようだ。当たり前だ。他人の深層心理を見破る人間なんていないに決まっている。飲み込む事だけに神経を注いでいた僕に、明が今思い出したとも言つかのように、何気なく咳く。

「今日は相崎は休みか？」

その名前を聞いた瞬間、小さなクズとなつているはずのドラ焼きが喉につつかかっただよな感じがした。

なんで、どいつもこいつも、僕が楓と一緒にいないだけでそういう事を聞いてくるんだ。

頼むから、その名前を出さないでくれ。今は他人の口から飛び出たその単語が耳に飛び込んでくるだけで、僕は眩暈がする。

「たぶん、海水浴でもいつてるよ」

「まだ夏でもないのにか？ 海だつて解禁されてねえだろ」

「そうだね。だったら宇宙にでも旅立つてるんじゃないかな」

「お前、なに言つてんだ？」

「別に」

僕は明とは逆方向を向く。そんな僕に対して、彼はため息を吐いた後、話題を変えてきた。

「そう言えばや、お前の家の近くに廃屋あるじやん？ あそこで今朝方、死体が見つかったんだってよ」

「……」

「どう、顔とかぐぢやぐぢやでひ、身元が判明するようなものも持つてなかつたでさ。」の前もこんな事件起きてたし、最近この街はどうなつてるんだううな

「……、こちそつさま」

ドリード焼きが入つていた袋を明に押し付けて、僕はその場を後にしようと。しかし「こつは、僕の腕をしつかりと掴んできた。

「待てよ」

そう言つた明はあまり見ない真剣な表情をしていて、僕に向けてくるその視線には、憐れみが含まれているように思えた。

「この手口つてさ、不同集成に似てねえか

「明、ズボンのチャック開いてる」

「えつ、嘘！？」

慌てて僕から手を離した明は、ズボンを確認する。」の隙に僕は、走つて逃げ出した。

「あつ、おこ！ 真田！！」

彼の言葉が聞こえても、無視して走り続けた。

そうだ、不同の仕業だ。昨日のあれは不同の仕業に決まつていて。そうだ、そうに違ひない。

「これにて証明終了」

僕は立ち止まって、そして雲が全てを覆い隠してしまつた空を見上げる。

そして、呟く。自分にも聞こえない程度に、小さく、あの言葉を。

「

これでいいじゃないか。

全部、不同のせいだ。あいつさえこの街に来なかつたら、あいつさえ生まれていなかつたら、あいつさえ 死んでいれば。こんな事にはならなかつた。

昼休みが終わる前に僕は教室に戻り、あいつがいないことを確認した後、カバンを持ってクラスから出て行く。

今日はもつ早退だ。やる気出ない。どうでもいい。

校門から学校の敷地外に足を踏み出し、ゆっくりと進んでいく。桜の花びらが散つて緑色の初々しい葉っぱが芽生えている木をなんとなく見上げ、時折、思い出したかのように吹く風に追い抜かれる。

そんな事をしていたせいで、僕は気付けなかつた。ドンツと軽くなにかにぶつかる。

ぶつけた鼻を押さえながら前方を確認すると、スーツをだらしなく着ている青年を見つけた。

「あっ、『めんなさい』

謝つて、右にどけて進路を確保する。そして一步踏み出そうとしたところで、男が僕の方に動いてくる。

たまにこういう事があるなと思いながら左に進んでも、結果は同じ。右に行くと見せかけて左に行つても同じだつた。

「あの、なんですか？」

僕はその青年を見る。

安物のスーツを着て、ネクタイは緩め、シャツの第一ボタンまで外している。長袖なので、肘の少し上まで袖をまくつていた。

表情は、なにか違和感を感じる笑顔。整つた顔立ちをしているけど、その笑い顔のせいでなにか、言葉では表せないような変な感じがする。

その人は男にしては高い 作り物めいた声を発する。

「君が真田恭史くん？」

「……そうですが、誰ですかあなた。なんで僕の名前を知つてるんですか？」

「あっ、これは申し訳ない。ワタクシこのつものです」差し出された名刺に目を通す。

そこには、こんな肩書きがあつた。

「……私立探偵」

「ええ、そうなんですよ。いやー、お恥ずかしい。ワタクシ、私立探偵の裏上ウツガミ真マツと言います。以後、お見知りおきを」

「僕になんの用ですか？」

「別にあなたに用は無いんですけどね」

裏上さんは人差し指を振りながらそう言って、僕の周囲をぐるぐると回りだす。

「嘘ウソですよね」

「おや、これは珍しい。なぜ分かりましたか？」

「別に、ただの勘です」

「この人からは、僕と同じ匂いがする。だから分かった。こいつは、嘘つきだ。

「まあ、あれです。直接的には用はないんですけども、間接的には用があるんです」

「それはつまり、僕を通してなにか知りたい事実があるというふうに解釈してもいいんですか？」

「おやおや。ワタクシは回りくどさに關しては自信があつたんですけどね。いつも簡単に要約されるとは。あなた、面白い人です」

「そんな事はいいですから。さあ、なにを知りたいんですか？僕の知つてる範囲ならなんでも答えますよ」

「おや、これはなんとも心強い味方だ」

「くつくつく」と裏上さんは笑つて、

「まあ、味方も見方を変えれば、ただの敵ですけれどね」

「それは味方を全く信用していなってことですか？ 駄目ですね

「そんなの。チームプレイが社会の軸なんですから」

「君も結構、嘘つきですね」

なにがおかしいのか、裏上さんはなおも笑う。

「まあ、いいです。それでは本題に入りましょウカうか」

「あれ、あなた回りくどいのが好きなんぢゃないんですか？ 質問自体も回りくどくしなきゃ、そんなイメージは定着しませんよ？」

「おやおや。嘘つきのあなたに回りくどく質問したところで、軽くかわされるだけです。なので、ここはど真ん中ストレートでいきたいと思います。……お望みなら、マワニコトドク変化球質問してさしあげますが」

「いえ、結構です」

ストレートできても、回転してかわすけども。

僕の答えを聞いて満足したように笑った裏上さんは、シャツの胸ポケットから黒革の手帳を取り出した。そこに挟まっていた万年筆を抜き取り、付箋を挟んでいたページを開く。

「では、こきます。第一問。じゃじゃん」

効果音を自分で言つてから、質問を飛ばしてきた。

「相崎楓を知っていますね？」

「禿げてテープで脂汗だらつだらでメガネをかけた中年男性の事を

指しているのなら、知っています」

「やうやうその方です。それでは第一問。じゃじゃん。彼女との関係は？」

「彼とは昔、裏山でリアルファイトをした事があつたんです。そしたら引き分けに終わりまして、二人の間に友情が芽生えたわけですね」

「くつくつく。青春ですねー、いいですねそういうの。それでは第三問。じゃじゃん。彼女が昨日どこでなにをしていたのかは知っていますか？」

「えーと確か……そういう。女子高生のパンチラ見に行くとか言って、深夜まで急な下り坂の下で待機してましたね」

「おやおや。それで、成果はありましたかな？」

「警察に捕まりかけたみたいです」

「お馬鹿さんですね。くつくつく」

「全くです。あははは」

「その内容を知っているって事は、あなたもその場にいたって事で

すよね？」

「実はその警察官が僕でした」

「なるほど。警察「じつ」をしていました

「いえ、違います。僕実は、特殊捜査官なもので」

「なるほどなるほど。あなたみたいなのを、厨「くり」ていうんですね」

「なにをバカな事を。僕はもう高二ですよ？ そんな病氣にはなりません」

ません」

「え？ 降参してくれるんですか？」

「なににですか？」

「いえ、いい加減このぐだりにも飽きたもので」

「当たり前です。僕はなにも情報もつてませんからね」

「おやおや。仕方がありませんね。それでは、ワタクシ「は」の邊で失礼します」

「一度と来ないでください」

「類は友を呼ぶといいますので、それはちょっと無理な相談ですね」では、と、裏上さんは軽く手をあげてから僕に背中を向けて去つていいく。

と、数歩歩いただけで止まってしまった。こちらに振り向く。例の、違和感しか感じさせない嫌な笑みを振りまきながら。

「そうそう、忘れてました。あなたに言いたいことがあつたんですね」

「……なんですか？」

「昨日、殺人事件がありました。もちろん、知つてますよね？」

「初耳です」

「そうですか。それはたいした問題じゃないんで置いときましょ。う。問題は、その事件があつたとされる時間帯に、『あなたと相崎さん』

がその現場付近を歩いていた、という情報があるんですよ」

「それはきっとなにかの見間違いですね。僕は昨夜、ずっと家にいたんで」

「おやおや。誰が昨夜だなんて言いました？ 昨日とは言いました

が、夜だなんていつてませんよね？」

「なんとなくそうだとと思つただけです」

「おやおや、そうですか。それでは、今度こそ、アデュオス」
今度こそ、裏上さんは歩き去つた。

僕は、彼の背中に呟く。

「今日は白星を譲つてあげますよ」

裏上さんと別れた僕は、家への帰り道を歩いていた。

あの人は、色んな意味で嫌な人だ。あの変な笑顔だつたり、あの喋り方だつたり、嘘つきだつたり。

でも、なんでだろう。昔、どこかで会つたような気がする。
昔々。僕がまだまだ小さかった頃にどこかで……。

「あー」

頭の中からその記憶だけを抜き取られたかのように、その場面を思い出す事が出来ない。

なんでだろう。僕は昔ショックカーにでも改造されていたのか。それだったら僕はバッタ型のヒーローじゃなくちやいけないじゃないか。

なにかがショックで出てこないかと期待しながら頭を小突いていり、道路を挟んだ向こう側の歩道。正確に言つならば、ビルとビルの間に出来た嫌な思い出がある峡谷が見えてきた。

「そういえば」

あそこで殺されていた男か女か分からない人は、不同集成と似たような壊され方をしていたつけ。

『でさ、顔とかぐぢやぐぢやでさ、身元が判明するようなものも持つてなかつたてさ。この前もこんな事件起きてたし、最近この街はどうなつてるんだろうな』

明との会話。

それを思い出す。

思い出したくもないのに、勝手に脳内再生される。

『いの手口つてさ、不同集成に似てねえか』

「そんなわけない」

第6話 街へ

『真田くんっ！一緒に街に行くのだよ！！』

平日の夕方。

学校を一日連続で早退し、惰眠を貪っていた僕からそれを奪い去つたのは、体力があり余っているといつぶつうな東条さんからの電話だった。

ボヤけている田をこすりながら、間近で彼女の声を聴いたせいで耳鳴りしている耳とは反対側にあててから応答する。

「それって、前言つてたやつだよね？ なに買うつか決まつたんだ」

『ふつふつふ。当たり前なのだよ！！』

「……うん、そっか。えーと、少しだけ声のボリューム下げてもらつてもいいかな？」

『およよつ。そういうえば今日も早退してたね。大丈夫かい？ 調子悪いなら明日でもいいけど』

「いや、行くよ。うん、行く行く。大丈夫」

『だつたら、十八時に校門前に集合しようか。じゃあね、ばははーい！』

ブチッと、勢いよく切れる電話。なんであの人はあそこまでハイテンションでいられるんだろうか。

「なんかなあ……」

なにもする気が起きないんだよね。

やる気を溜めておいたはずのダムが、いつのまにかスッカラカンになつて僕に送られてきてないような、そんな感じがする。

「はあ……」

一度だけ溜息を吐き、私服に着替え始める。

一階に下りて、洗面所で顔を洗つた後、鏡で自分の顔を見てみる。

「……」

なんでこんな顔してるんだろう。なんでこんなに、悲しそうな顔

をしてるんだね。これは本当に、僕なのか？鏡の世界にいる違う僕なんじゃないのか？

だつて、現実の僕は全然全く「れつぱつ」も悲しくなんかない。おかしいでしょ、これじや。

家でジッとしてたら一度と外出する気にはなれそうになかったので、少し早いけど僕は家を出る。

自転車の鍵をあけてまたがる。

携帯で時間を確認してから、僕はゆっくりとマイバイクを漕ぎ始めた。

今日は少し湿気がある。少ししか動いてないのに、その蒸し暑さで汗がダラダラと流れ始めた。

自転車の速度を上げて風に当たつても、生ぬるいのしかこない。こんな中じや、クッキーなんかすぐにふにやふにやになってしまつぞ。

背中にかいだ汗がシャツを密着させる役目を担うのを止められなまま、僕は東条さんとの待ち合わせ場所である校門前に到着していた。

周囲を見渡しても彼女の姿がなかつたので、適当に携帯をいじりながら時間を潰す。

やる気を少しでも回復させるために、好きなミュージシャンのサイトに行つて新曲の情報などを得てみたけども……やっぱりダメだ。僕の中に溜まっていたやる気という名の葉っぱを全部、虫に食われてしまつたかのように、回復の見込みはなかつた。

嫌に生温かい風を肌で感じながら、東条さんを待ち続ける。少しして、足音がした。

待ち合わせの人物が来たのかと携帯の液晶画面から顔を上げる。

小さな体のくせにパワフルな走りを披露している東条さんが僕に迫ってきていた。

さすが陸上部。

グラウンドで走つたら、砂埃が舞い上がりそつなほじ強く地面を蹴つて走つている。

楓と同じくらいの身長なのに、なんであんなに速く走る事ができるんだろうか。

なにかコツがあるのなら、是非とも書きたい。それが活用される日はこないと思つけど。

その場で黙つて東条さんが来るのを待つ。

キキイとか、靴底を酷使しながら僕の前で止まつた東条さんは、裏表がない純粋な笑みを浮かべる。

「真田くん！ お待たせ！」

「全然待つてないよ。それよりも凄く足速いね。百メートル何秒くらいい？」

「んんー、そうだねえ……十三秒くらいかなっ！ 一年生の時のタイムだけどね！」

「なんで新しいタイムとらないの？」

「私は中距離タイプなのだよっ！ ゲームで言つならば、日本刀とかじやなくて、槍つて感じだね！」

「槍つて、なんかすごく東条さんのイメージに合つただけど」

「どこまでもまつすぐな感じとか。

「そうかい？ どもどもー。じゃあ、早速行こうかっ？」

「うん」

僕は自転車を押して歩く。横を歩いている東条さんを見たけど、特に汗とかはかいてないみたいだ。

超人か、それとも汗を出す器官がおかしいのか。

東条さん目的の場所に行くまで、僕は彼女の話をずっときいていた。

向こうから一方的に喋つてくれるので、僕としては大変楽だ。

たまに、少し黙つてつて言いたくなるけど。

歩きたくないと駄々をこねる足を動かしながら進む事、約二十分。僕は、前に楓と一緒に来た事がある商店街に来ていた。ここにバイトの日以外で来るのは、あの日以外では初めてだつたりする。

僕は何度も出てくる欠伸を東条さんに悟られないように噛み殺しながら、なにも面白みがない店の外装を見ていく。

ブスッとした表情をしていたからだらうか、僕に遠慮するような声音の東条さんが話しかけてくる。

「大丈夫かい？ 具合悪いなら、本当に今度でも……」

「大丈夫。今日を逃したら、もう買えないだらう」

東条さんの意見を聞きたいしね。

「うーん、真田くんがそう言つなら、良いんだけど。無理っぽかつたら、すぐに私に言つておくれよ！」

「ははっ、頼もしいね」

「なんだい、そのやる気なわざつな返事はっ！ 私を信用してくれ！」

「うん、分かった分かったから」

鼻と鼻がぶつかるくらいの距離に近づけた顔を少し離して、声のボリュームを下げるくれ。

こんな事を思つても僕は声には出さず、自分から一歩だけ距離をとつた。

やつぱり、失敗だつたかな……。こんな時に東条さんと一人でお出かけなんて。

一人でいる場合の疲れ具合と今の疲れ具合は、小学生の直球の速さとプロの最高急速並みに違う。

僕と東条さんは、近くにあつた服屋に入った。ちなみに女性用のものばかりがある店だ。

入り口の所で入るのを渋つていい僕の腕を掴んで、東条さんに無理やり入れられたわけだけど、やつぱり少しだけ恥ずかしいな。

周りを見ても、派手な服ばかりで、少し奥を覗けば下着があるわけだ。そして店内にいる女性達が僕の方をジロジロと見てくる。

スゴクリいづらい。

とりあえず僕はその人たちを見ないようにしながら、東条さんの後についていく。

「あっ、これなんてどうだい、真田くんっ！」

そういうて彼女が差し出してきたのは、すけすけのキャミソールだった。

「……それはちょっと」

「そりゃい？ 私的には良いと思つんだけどね」

「いやいや、ないない。ないですよ」

「あっ、なるほど！」

東条さんはニヤリと笑つた後、口元を持つていた服で覆い隠したけど、向こう側が透けて見えるのがそれの特徴である。

そして、たつぱりの間を空けた後、東条さんは僕を挑発……といふか、誘惑するかのような声で、

「ふつふつふ。こんなのを着てる場所を想像して、少し興奮してるのかい？ いやー、若いね、若いねっ！ 夜中になにをしてるか分かったもんじやないねっ！」

「あいにくと、僕はそういうのに興味はあまりないんだ」

「あまりって事は少しあるんだよねっ？」

「……まあ、そうだね」

「そりゃいそりゃい。だったら私がこれを着て、夜中に真田くんの部屋に侵入したら、なにをされるか分かったもんじやないねっ！ いや、分かりきってるねっ！」

「……僕は楓以外には興味ないんで」

その後、僕は周りの女性の視線に耐えきれずに外で東条さんを待つことにした。

ボンヤリと、やる気が出ない瞳で店の外で座つて彼女を待つ。

道行く人を見ていると、その中に知つてゐる顔を見かけた。その子は僕を発見すると、笑みを浮かべながら近寄つてくる。

「さなっち、どうしたの？」

「馴れ子ちゃん……」

「誰それ！？」

「ああ、いや、なんでもないっす」

頭で思つた事がそのまま口に出てしまつた。

東条さんと一緒にになつたら台風どこりか、ハリケーンにでも発展しそうなほどの元気つ娘である彼女は、平日の夕方にこんな場所にいる僕を興味津々といった感じの目で見てくる。

「この前お店にきた彼女とデート？」

「いや、違うよ」

「一股？」

「違うよ」

「結婚するの？」

「なんでそうなつたの」

その飛躍しそぎな発想に脱帽した。脱ぐ帽子なんてないけども。馴れ子ちゃんが不満そうに頬を膨らませてきたので、僕は手を使つて彼女の頬を挟んだ。

ぶんぶんと頭を振つて僕の手を振り払つ。

「なにするの！ パワハラだよパワハラーーー！」

「セクハラね」

「自覚してちやダメじやないか！」

うむうむ、今日も言葉の間違いは絶好調のようだ。尊敬はしないけども、なんでそこまで間違える事ができるのか不思議ではある。馴れ子ちゃんが、なにがなんだか分からぬけど、僕に絡んでくる。

彼女の私服を見て、僕は楓とセンスがほとんど逆だと感じた。

馴れ子ちゃんの服装は、ワンピースのようなヒラヒラした服にネクタイをつけ、黒いコートのよつな、だけどノースリーブのようなものを羽織つてゐる感じだ。

なんだろう、なにかのアニメのキャラが制服で着ていたような感じの服だけど、あまり詳しくない僕には分からぬ。

そのパワフルな性格と、落ち着いている清楚な服装が相対しているけれども、なぜかしつくりきている。

東条さんが出てくるのを待つているのだが、まだまだ出てくる気配はない。

「そのまま馴れ子ちゃん」と話しても、僕としては疲れるし、そもそも、やる気でない日に相手していられるような子じやない。なんて言つたら傷つけずに行つてくれるのだろうと考えながら、馴れ子ちゃんの話を聞き飛ばす。

「それでね、私はビックリして、思わず内臓持つて来い！ って叫んでやつた」

なにがどうなつてやつての展開になつたのだらうか。すゞく氣にな
る。くわ。

「そしたらその子が、さなつちに『死んだ目をしてカツコイイと思つてゐるの?』て言えば、持つてきてやるつて、言い返してきたんだ」

口に」チヤックちゃんだろ。なんて」とを交換条件に出してんだ、あの子。

「で、どう? 私、さなつちに書ひかへつてもいい?」
「勝手にすれば……」

「アリ？ ジヤあ、言ひね。死んだ田をしてカツコイインですナビ」

[...]

「な、なにか言つてよお！　言こ間違えたのに訂正してくれないつて、あぐく悲しきよ！」

「あ、ごめん、聞いてなかつた」

僕は慣れ子ちゃんを見る

赤い顔をしているが、また間違えて卑猥な表現を言つてしまつたのだろうか。

「さ、さなつちなんてもう知らない！」

怒つて、僕から走つて去つていく。その後ろ姿を見て、なんか頭から蒸気が噴出していることを発見。なぜだろ？

僕、なにかしたか？

走る姿を見ながら原因を探ひつと思つても、なかなか思い当たることはない。

しかし、走る姿が助けを求める子猫のよつと見えてしまつた。

「今の誰だい？ 真田くん」

「うわ！」

視線を遠くに投げていたせいで、東条さんの接近に気付かなかつた。

少しだけ早くなつた心臓の動悸をおさめる。

「バイト場の人だよ」

「あー、そう言えばいたね、この前。つんうん

なぜか妙に納得したような表情を見せる東条さん。

「なに買つたの？」

彼女が持つてゐる紙袋を、犯人を追いつめる探偵みたいな心境で指差す。濡れ衣だけだ。

「ふつふつふ」と笑うと、袋の中に手を突つ込んで僕に見せてくる。

「エロチックな下着なのだよ！」

「公衆の面前でそんなもの見せないよう！」

「む、なにを言つてゐるのかね真田くん！ 黒のすけすけ下着は、男の子はみんな好きなんじゃないのかい！？ 君も嬉しいせにー！」

うりうり、といった感じで肘で僕の脇腹辺りをつづいてくる。

「……好き嫌いはとにかく、そんなものこの辺で見せびらかしてたら、下着ドロに後つけられるよ」

某国民的アニメの曲に合わせてフルーツを割つて腰を振つてゐる

あれみたいな動きをしてゐる東条さんと、僕は言ひつ。

「あー、そう言えばこの街にもいたね、そんな変態さん。うーんと、一ヶ月くらい前だつけ？ でも、もう逮捕されたはずだよね？」

「そうなの？ そんな話聞いたことないけど」

「むむ！ ビビッときましたよ！ あの犯人は真田くんですか！？」

「行こ！うか、東条さん」

「うん、買い物の続きだね！」

「違う違う。もちろん、精神病院にだよ」

色々な店を回ること約一時間。

もうすでに辺りは真っ暗で、街灯の明かりが申し訳ていどに道を照らしている。

僕は東条さんに一緒に入つてもらつたジュエリーショップで安価な宝石を買い、ちょっとしたほくほく気分を味わっていた。喜ぶだろうか。

気分はほくほくでも財布はすでに寒い。絶対零度なんて日じゃないね。

「他に行きたいお店とかあるかい？」

「うーん……あつ、最後に一ヶ所だけいい？」

「いいのだよいいのだよ。今日は私が連れまわしちゃつたからね！ どんどん要求してくれたまえ」

ビシッと敬礼してくる。

そしてそのまま止まって、頬を赤らめ、もじもじしてくる。

「あつ、でもでも、その……エッチな場所はダメなんだからねつ！ ……ああ、真田くん！ どこに行くんだい！？ なんで無視するの！？ おーい！？ 私を置いてかないでくれー！」

僕が最後に来たかつたのはバッティングセンターだつた。

なんか横で、バッテ淫具選たーなんていう当て字を考えて僕をバシバシ叩いてきている人がいるけど、面倒になつたのでここはあえて無視で。

いつからこの人はこんな感じになつたのだろう。昔からだつける。それはそうと、財布からお金を取り出して機械に投入する。

僕の横にあるバッター・ボックスには東条さんが入つており、わくわくした顔をしながら白球が襲いかかってくるのを待つていた。

そして第一球目。放たれた野球のボールを田でしつかりと追い、そしていとも簡単にそれを捉える。

打球はピッチングマシーンの遙か上を飛んでいき、ホームランの的のさらに上にぶつかつた。

「す、」

東条さんすげえ……。本当に女の子だよね？

やつぱなにをやつても上手い人つているもんなんだね。普段のキヤラからはこんなな想像できなかつたけど。

「おつと」

唚然としている途中なのに、反抗期の子供を殴りつける父親のような厳しさで僕のピッチングマシーンが動き出した。

空振り……。

おかしいな。球速百二十キロにしてあるのに。

体勢を整えて、第一球目。

球の下をかすつて、ファール。三球目は右側に切れてファール。よし、だいぶ慣れてきた。

「えいやつ！」

東条さんはスゴク順調で、さつきから良い音が途切れない。今も右中間を真つ二つのツーベースぐら いの良い打球だつた。適当だけど。

バッティングをしながら、ここに楓ときた日の事を思い出す。

あの時は、楓が僕の後ろにいて、緑の柵を間に置いたその距離が僕が思い描いていたそれによく似ていた。

だから僕は、思い切つて告白した。

ホームラン打てたら、付き合つてつて。結局打てなかつたけどさ。あの時は、よかつた。幸せだった。僕の横にいる楓との距離がさ

らに縮まつて、僕は最高に嬉しかつた。

だけど、今は……。

「くそつ

力任せにバットを振つて、ふつふつと湧いてきた様々な感情を吹き飛ばす。

バットに当たらなくともいい。今日は暴行を加えに来たわけではない。

ただ、僕は今、なにかに熱中したかった。一人になつて、暇にはれば、すぐに嫌な事を想像する。

さつきまでは東条さんについてきた事を後悔していたけど、今では感謝しかない。

少なくとも彼女といはる間は、バカな事を考えずに済んだのだから。でも、また一人になる。それは、怖かつた。なにも考えたくないなかつた。ずっとずっと、今まで止まってくれればと思つた。

来た球に合わせて、無意識の内にスイングする。

真芯に当たつた感触。

球は、飛んでいく。

ぐんぐん伸びていく。

そして、ホームランのために当たつた。

前は当たらなかつたくせに。

「なんで、上手くいかないんだろう」

東条さんと一緒に白球暴行大会会場から外に出る。

車が時折、通るだけで通行人の姿はない。さすがに夜間になつたら、街の人たちは外出を控えているらしい。

東条さんをバス停まで送るために歩きだす。

道中、僕の隣にいる彼女がマシンガントークで僕を蜂の巣にしようとしてきていたが、聞き流すようなことはせずに、僕は結構、真剣に聞いていた。

それでもしなければ、怖くなる。変な事を考えそうで怖くなる。バス停には会社帰りと思われるサラリーマン風の男が一人だけいた。

「今日はありがとね、真田くんつ」

「いやいや、こちらこそ」

東条さんのショッピングに付き合いながら、僕も軽く買い物したし。

当初の考えどおり、ちゃんと女の子の意見も聞けたので、良い物を買ったと思う。

「なにかお礼したいのだよ」「

「え？ いや、別にいいよ、そんなの。僕も楽しかったし」「ダメダメ！ 私に付き合ってくれた君にプレゼントしなきゃ、気がすまないのだ」

「そう？ うーんと、じゃあね」

適当に考えて無難なものを注文しようとした時、東条さんは僕の後ろ 街灯しか存在しない、住宅街の細い路地辺りを凝視していることに気付いた。

そして、唐突にふと笑うと、顔を近づけてくる。

そして。

「……」

「お釣りはいらぬーゼ！」

ブイサインをしながら、タイミング良く来たバスに乗り込んでいく。

サラリーマン風の男性が見てきていることを感じながらも、僕は頬に、東条さんの唇が触れたそこを、自分の手で触る。

「こんなのいらないよ」

この弦のは、多分、彼女には届いてなかつた。

自分の家がある田舎まで歩いて帰る。
角を曲がった所で、奇妙な人と出会つた。

「おやおや、真田くん。これは偶然ですね」「そうですね」

裏上さんだつた。

相変わらず例の笑みを携えながらの登場。ワイスシャツの第一ボタンまで開けていて、今日もラフな格好だつた。

「僕になにか用ですか？」

「いえいえ、だからただの偶然なんですよ」

「じゃあ、用はないんですね？」では、僕はこれで裏上さんの横を通り、再び帰路につく。

「あー、そうだ、真田くん」

予想通りに呼びとめられた。

だけど僕は無視して歩く。

「真田くん」

また無視。

「真田くん」

無視。

「くつくつく。中学校時代を思い出しますねー」

……無視。

「あの時は話しかけてもみんなに無視されて、相手されても、一方的なリンクでしたからねー。くつくつく」

真つ暗な青春時代を送つていたらしい。

「おやおや、まだ無視ですか。ワタクシ、喜びますよ？」

「ドエムですか」

「ワタクシの性癖を披露したら反応してくれるなんて、もしかしたら真田くんも同類ですか？」

「あなたとは逆の位置に立つていて思います」

裏上さんは、右手を体の左から右にスライドさせた。

「この話はいづれ、じっくりとしましょう。今は、別に聞きたい事があるんです」

「やつぱり、偶然じゃないんですね？」

「いえいえ、だから偶然なんですよ」

本当にこの人は、相手しにくい。なんか苦手だ。

「……手短にお願いしますね、嘘つきさん」

「くつくつく。わかりました、同類さん」

裏上さんは、この前と同じ手帳を取り出して、適当なページを開いた。

「さて、聞きましょう。あなたは、死刑制度をどう思いますか？」

あれ、事件の事についてじゃないのか。

「……制度 자체はいいと思いますよ。極悪人にはお似合いなものだと思います。死には死を、つて感じですかね」

「嘘ですね？」

「本当です」

「おやおや、ワタクシに嘘は通じないんですよ、真田くん。あなたが隠したいなら、ワタクシが当ててみましょうか？」

「どうぞ、『ご自由に』」

「あなたは、死なんていう一瞬の苦しみを味わわせて満足するような性格ではないと思われます。では、どうするのか。簡単ですよね？一生、死ぬまで刑務所に収監してもらい、そこから出られる希望など、むしりとつてしまえばいい。希望がない人生なんて、それはもう、死ぬよりも辛いことかもしません」

例えの話。

連續殺人犯に拉致された少女がいたとする。

その少女は、毎日毎日、体を傷つけられ、凌辱され、辱められ、いつ殺されるか分からぬ恐怖と闘い続ける。

そんな日が続き、助けなんてこないと、そう絶望してしまえば、その少女はどうなるか。

おそらく、精神的に、死んでしまう。

精神が死んでしまえば、そこに残るのはただの抜け殻だ。生きているようで、死んでいる。

死んでいるようで、生きている。

その状態になってしまえば、一瞬の死なんてものはなんと安っぽく、そしてなんて羨ましいものに思えるだろ？

「それに、もしその犯人が出てきても、その人はすでに社会的に死んでいるようなものです。就職にありつくことはできず、やがて罪を重ねるでしょう。そんな、負のスパイラルを味わわせる。ずっと、そんな螺旋の中で苦しんでもらう。一瞬の苦しみなんてものでは、あなたの気がおさまらない。だから、ずっと苦しんでもらう」「……そこまで僕の心理を捏造するなんて、あなた、なかなかの詐欺師ですね」

大体、不同集成には死んで欲しつて思つてるんだ。そんな心理があるはずがないじゃないか。

「……おやおや。外れてしましましたか。まあ、でもあれです。当たりとも遠からずつていう感じですよね？」

「そうですね、バットとの距離は三十センチ以上開いていますが」「くつくつく。あなた、皮肉が好きなんですか？」

「いえいえ、あなたが嫌いなだけです」

「おやおや、あなた、同族嫌悪つていう言葉を知つてますか？」「ええ、知つてますよ。けれど、僕と裏上さんは似ていいだけです。似て否なるものは否でしかないんですよ」

「くつくつく。あなたと話していると本当に飽きませんね。おや、それでももうこんな時間ですし、そろそろワタクシはお暇しまじょう」

腕時計を確認した裏上さんは、心底楽しそうに、だけど、本当にを考えているか分からぬ笑みを浮かべた後、僕に背を向ける。「あっ、そうそう。言い忘れてました」
僕に背を向けたまま、彼は言つ。

「いくらリア充だとはいって、二股はあまりほめられたものではないですね」「

「僕は答えない。」

「おやおや、否定はなしですか。それとも、ワタクシ無視してまた喜ばせてくれる気なんですかね？」

「僕は答えない。」

「くつくつく。ああ、気持ちいいものです」

「僕は答えない。」

「そして彼は去つて行つた。」

「ああ、もう一つ」

「……かと思つたが、ムーンウォークをしながらすぐに戻つてきた。「これはあなたには凄く不都合な情報かもしだせんが、それでも伝えておきます。一昨日の夜に起こつた殺人事件についてですが、聞き込みをしたところ有力なものがでてきました。その人が言うには、相崎楓によく似た人物が殺害現場から出てくるのを見た、というものなんですよ。それも、なにか赤いものが付着している服を着ていたようです。これ、どう思います？」

「僕はまだ無視する。」

「ああ、ぞくぞくします」

「そして、今度こそ、彼はいなくなつた。」

「僕は街灯の下に移動して、光に集まつてゐる虫を見つめる。」

「なんだあの人、僕を完全に尾行してたんじやないか。」

「なにが偶然だ。」

「ふざけるな。」

「僕は、なにも知らないというのに。無駄足御苦労さま。」

「ああ、それでも気になる事が一つだけあるんだ。」

「……なんで僕は、今回の事件について、なにも知らないんだろう？」

「ねえ、楓？なんでなの？」

「なんで、僕に相談してくれないので？」

「なんで電話してくれないので？」

本当に、君がやったの？

だとしたら、いつから君は殺人を行っていたの？
もし、本当に君がそんな最低な行為をしていったというのなら、僕
は、君を……。

その後に浮かんできた言葉を脳の奥にしまいこみ、僕は歩きだす。
なるべく面白かった事を思い出しながら。今の裏上さんとの会話
を全て忘れるように努めながら。

第7話 バイト場で

今日は学校を休んだ。

最近、僕の様子がおかしい事に気づいた両親は訝しげな視線を送つてきているが、僕としてはそれを海の底に沈めるしだいである。昼ご飯を食べて自室で寝転がる。

なにもやる気が起きない。なんで僕はこうなってしまったのだろうか。

少し前からおかしい。

おかしいと言えば、裏上さんはおかしいを通り越して、もはやおかしくない部類に入ると思う。

どんなにおかしくてもある一定のラインをぶつけきってしまえば、それはもう常識の範囲に収まるものではなくなり、結果として誰からも理解されなくなり、誰にも理解されることがなくなれば、それをおかしいと思う人もいなくなるわけだからだ。

そういう考え方で言うのならば、不同集成も同じなのだろう。あいつはどうじもないくらいの殺人犯で、どうじょうもないくらい腐つていて、どうじょうもないくらいの糞野郎で、だけどどうじょうもないくらいの常識人だ。

「……」

じゃあ、相崎楓は？

あいつは今、なにをしている？

僕が見たあの場面は、なにをしている所だった？

芸術？ そう表現したかもしれない。だけどそれは、どうじょうもないくらいに腐った芸術だ。

動くモナリザの都市伝説くらい馬鹿げている、そんな行為だ。

『僕と楓は現場付近で目撃されている』

『証言者によれば、相崎楓は血が付着しているように思える服を着ていた』

裏上さんの言葉を適当に思い出してみる。あの人の事だから信用なんてできないけど……でも。

僕は見た。

目撃した。

確かにあの惨劇を。

僕の日常を破壊するきっかけになつた、あの忌まわしい事件を。

「くそっ」

寝転んだまま天井を見上げ、目を強くつぶり、唇をかみ締めた。なんで僕はあの時、どら焼きを買いに行つたのだろう。あんなもの、次の日に学校行くとかに買えばよかつたじゃないか。

嫌いだ。

どら焼きなんて大嫌いだ。

きつくなき締めた唇から血がにじんで、口の中に侵入してくる。僕はその鉄のような味がする液体を、飲み込んだ。あいつは、こんな不快な味しかない水を全身に浴びて、なにを考えていたのだろうか。

あいつなら、絶対にあんなことはしないって信じてたのに。

「……なんで」

信じてたのに。なんで。

誰のせいだ。

そう考えて、僕の脳裏に一人の顔が浮かぶ。

不同集成。

あいつが、この街にきてから、全てが動い始めた。来るなよ。狂うなよ。なんで僕の人生を狂わすんだよ。

「なんで」

胸が痛まないんだ……。こんな事になつてるので、なんで僕は、なにも感じることができないんだ……。

だらだらと自分の部屋で過ごす。

本を読むでもなく、ゲームをするでもなく、ただただボンヤリと色々な事を考えていた。

「バイト行かなきや」

行きたくないけど、直前で休むと連絡するのにお店に失礼だ。なので、僕はなかなか動かない体を引きずりながら準備を始める。ファミレスまで自転車で行き、ユニフォームに着替えてバイト開始。

といつてもこの店は雑誌に紹介されているくせに暇なので、机の上を拭いたり店の掃除などをする。

なんか店の隅のほうで、馴れ子ちゃんが「うー」とか言いながら威嚇してきているが、それは無視しておこう。

ここで関わっちゃいけない。面倒なことになりそうだ。

店の掃除も終わり、暇な時間がやってきた。

「よお、真田」

「小堂さん、ここにちは」

僕が暇になるのを待っていたかのような絶妙なタイミングで、小堂さんが話しかけてくる。

「お前、もう少しなんかの仕事してるふりしどけ。じゃなきや、店長の餌食になるぞ」

「……それはそれは、わざわざありがとうございます。あんな料理、罰ゲームにでも出てきそうな感じですもんね」

小さな子供が食べたら、ショック死するか匂いを嗅いだだけで爆発するだろう。刺激物ではなく、爆薬みたいなものだ。

「小堂さんは大丈夫なんですか？ 僕とここで話してたら、ターゲットにされますよ？」

小堂さんは気まずそうに頬をぱりぱりと搔いて、一瞬だけ休憩室の方に視線をやる。

「今の所は大丈夫だ。厨房の同僚が被害に遭っているからな

ぎやああああ！

そんな叫び声が休憩室の方から聞こえてきたけど、僕たちはそれを完全にスルーした。

「良い天気ですよねー」

「ああ、真田みたいな顔した天気だな」

「……どういう意味でしょう？」

「ポーカーフェイスが崩れて、いつ雨が降つてくるのか分からぬ晴天だつて意味だよ」

「晴天なんですから、雨なんてそうそう降りませんよ」

「分かんねえぞ？ いつその予兆である雲が広がりだすかなんて、予想できないからな」

「……そうですね」

小堂さんは首を鳴らしながら、厨房に戻つて行つた。

それから約五十分後。

今まで雲一つなかつた空が、どこからか大量に出てきた雨雲に覆い隠され、スコールもびっくりなくらいの雨が降り始める。

「……」

小堂さんの予言みたいなものが当たつてしまつた。

なんだあの人。マヤ文明の生き残りの子孫なのか？

「あーあ、やつぱり降つてきやがつた」

またホールにやつてきた小堂さんは、僕と同じように窓から空を見上げる。

この雨を見続けていた僕はどんな顔をしていたのだろうか。

僕のあまり変わらない表情を、それでも小堂さんは敏感に見分ける。

「なんか悩み事か？」

窓に手をつきながら、軽い感じに言つてくる。

僕はその言葉に少しの間だけ無言を貫いてから、それでもやつぱる。

り心中を吐露する。

「作り話を聞いてください」

僕はこの天気　全てが狂い始めたあの日にそっくりな土砂降りの雨をみたせいで、あまり思い出したくない過去を想起する。

「幼なじみの女の子が大好きな一人の少年がいました。その少年達は七歳。ある日少年が家に帰ると、テレビでニュースが流れました。平和な街に突如として出現した連續殺人犯の、これからたくさん命を奪う最低最悪な殺人犯の、一番最初の殺人事件でした」

思い出す。

あの日の事を。

雨の滴が地面に叩きつけられる小気味いい音を聞きながら、僕は続ける。

「少年はそれを見て、怖いな、とだけ感じて、だけど自分には関わりない事なのですぐにニュースを見るのを止めてゲームをしました。その日の夜、少年は嫌な胸騒ぎがして飛び起きました。そして、なぜか幼なじみの少女の事が気になり、深夜にも関わらず、家を飛び出して様子を見に行きました」

小堂さんの様子を窺う。真剣に聞き入ってくれていた。

「少年は女の子の家に着きました。そこで見たのは、凄惨な犯行現場でした。その日の昼に見たニュースは、この女の子の身に降りかかった事実でした。少年は、震える足で少女を捜しました。一階にはいません。二階にいました。警察が保護してくれていたのに、そこから逃げ出して、クローゼットの中で震えていました。少女は僕を見て、それまでたくさんの笑顔を作っていた顔を醜悪に歪めて、こう呟きました」

『お前が死ねばよかつたのに』

「少年はその場から動けませんでした。ただただ、少女の暴言を、幼い頭を総動員して理解しようと試みているだけでした。　その日から、少女は本当の意味で笑わなくなりました」

雨が降り続ける。

「どうでした、僕の作り話」「

小堂さんを見てみると、彼は不快そうに眉をひそめた。

「どこからどこまでが本当だ？」

「僕が七歳の所と、幼なじみの女の子が大好きな場所だけが本当です」

「ほとんど作り話じゃねえか！」

「だから最初にそう言つたじゃないですか」

「ああいう感じの入り方だつたら、自分に降りかかった事実を喋つていると思うだろ？」「

「ああ、なるほど。失礼しました。でも、さすがに僕にあんな過去はないですよ」

「心配して損した気分だ！」

肩を上下させて、小堂さんは厨房の方に歩いていった。

ちゃんと作り話つて言つたのに怒られるなんて。

ため息をつこうとした所で、来店を知らせるチャイムが鳴つた。僕は、以前ここで練習したように、作り笑顔を貼り付けて入り口を見る。

「おや、真田くん。こんにちは」

「……なんで」

「ん？ なんですか？ ワタクシがここに来ちゃいけない理由がありますかね？ 一応、ここはお店ですよ？ お客なんですから、そりやあ来ますよね？」

「僕はあなたに会いたくない」

「くつくつく。中学時代でもここまで嫌われたことはなかつたです

ね」

裏上さんは、気味の悪い笑顔で細めている田を、さらに細めた。

「ああ、そうそう。ちょうどいいです、真田くん。ちょっとワタクシの世間話に付き合つてくださいませんか？」

「あなたとそんな話をするくらになら、僕はマジンコと一方的に話してたほうがマシです」「

「くつくつく」

「あはは」

「店長さんはどこにいますか？」

「奥の休憩室で実験中です」

「呼んできてくれませんかね？」

「嫌です」

「ああ、そうですか。別にいいですよ、彼の携帯に電話しますから」
そう言つと裏上さんは、携帯を取り出してどこかに繋げる。すぐ
に相手は出たらしく、何回か言葉を交わしたあと、通話を切つた。
「出てきてくれるそうです」

「知り合いなんですか？」

「ええ、昔、彼が抱えていた問題を解決してあげて、その時の縁が
まだ繋がつていましてね」

裏上さんは「くつくつく」と笑う。

その笑顔を見ながら、僕はまた既視感に襲われる。
この、能面みたいに貼りついた笑顔は、以前にもどこかで見た事
がある。

それがどこだつたか分からぬ。

「ああ、そうだ、真田くん」

カウンター席に座つた裏上さんは、手を組んでその上に顎を乗せ
た。

「なんですか？」

「いえいえ、先ほどのお話はとても興味深かったです。もし良かつ
たら、真相を聞かせてくださいませんかね？」

「さつきの話つてなんですか？」

「昔話ですよ。さつき、クールな男性と話してたじやないですか
？」で聞いてたんだこの人。

「……小堂さんと話してたのは、ちょっとした手違いでクラスメイ
トの男子に殺されかけたつていう冗談話ですけど」

「おやおや。そちらの方にも興味ありますね？」

「あれです。クラスメイトが作ってきた爆弾の解除方法を忘れてて命がけで解除したっていう、ミステリー小説の終盤にあるような異様な盛り上がりをしてみせたんですよ、僕が」

「くつくつく。それはそれは、御苦労さまですね」

「ええ、本当に」

「ちなみに種類はなんですか?」

「プラスチック爆弾だと友達言つてましたね。校舎くらいなら木端微塵にできるくらいの大きさつて 言つてましたけど、本当かどうかは分からないです」

会話がひと段落した所で、店長さんが実験場もとい休憩室から出てきた。

カウンター席に座つている自称私立探偵を見つけると、いつもの豪快な笑みを浮かべる。

「真! 久し振りだな!」

「あなたはいつも通り元気そうで安心しましたよ」

裏上さんも微笑む。

その後、二人でなにか話してから、裏上さんは本題に入った。

「真田くんを少しの間、借りてもいいですかね?」

「おお、いいぞ! 好きなだけ借りてくれ! どうせ暇だしな!」

本当に適当な人だ。ここは断つてくれればいいのに。

「という事ですので、真田くん。あっちの窓際の席に行きましょう」「嫌だ、断りたい、帰りたい、今すぐにでも。

でも裏上さんに腕をガツシリと掴まれてしまった。その細腕からは想像できないような力でカウンター内から引っ張り出され、席にまで引きずられていった。

僕が逃げないようにするために、裏上さんは窓に一番近い席に僕を押し込め、その隣に自分が座る。

なんか、今日の裏上さんは強引だ。

「さて、質問に入りましよう

早速、ポケットから手帳を取り出し、そして小さな透明の袋を机

の上に出した。

「さて、これがなにか分かりますか？」

僕の田の前に掲げて、裏上さんは首を傾げる。

「袋です」

「そうです。だけどワタクシは今、中に入っているものがなにかを訊いてるんです」

「酸素とかが入ってるんじゃないでしょうか」

「くつくつく。ついでに窒素とか一酸化炭素できなものですね？」

「ええ、そうです」

「真田くん。二つだけ良い事を教えてあげます」

裏上さんは僕に更に近づき、一端、袋を置いて、手帳を持っていた左手を握り込んで。

「ウツ！？」

「ワタクシ、結構、短気なんですよ」

僕の鳩尾に拳をめり込ませてきた。

鈍い痛みが体を駆け巡り、一時的に呼吸困難に陥る。

「そして二つ目は、人が、殺されてるんですよ？」

痛みに喘ぐ脳みそで、僕は、この人がどれだけ恐ろしい奴なのかを、ようやく理解した。

「ん？ どうしました、真田くん。なんでそんなに苦しそうな顔をしてるんでしょうか。ワタクシ、なにかしましたか？」

「……いえ、別に」

呼吸を落ち着かせる。

そして僕は、気味の悪い笑顔を浮かべているその顔を見つめる。

「そうですか、それは良かつたです。さて、質問に戻りましょう。

この袋の中に入っているのはなんですか？」

「髪の毛ですね」

「そうですね。何色かは分かりますか？」

「……黒」

「残念、茶色です。栗色とでも表現しますか」

袋の中には、長い髪の毛が入っている。

「わざわざ」

裏上さんは、今まで見た事がない、心底楽しそうな笑みを浮かべる。

「この髪をどこで見つけてきたか、分かりますか？」

「あなたの彼女の自宅から拝借してきたんじゃないですか？ 髪フェチっぽいですからね、あなた。その一本をどれだけ舐めたのか分かりませんが、僕にその趣味を押しつけるのはあまりにも」

また鳩尾を殴られた。痛い。

「 なんで、すか、あなた。前はドームとか、言ってたくさん、ドエスにも目覚めたんですか？」

苦しいのを我慢して、なんとか言葉を発する。

「おやおや、あなたにワタクシの趣味を押しつけてあげようとかと思つて、殴られたいのを我慢して殴つてさしあげてるのに、その言ひ草はあまりにもあまりですよ」

裏上さんはもう一度、僕の前に袋を掲げる。

「この髪を、どこで拾つてきたか、想像できますか？」

「分かるはずないじゃないですか」

「くつくつ。嘘はよくないですよ、真田くん」

「黙れ嘘つき」

「口の利き方には気をつけろ、同類。 おつとすこません。まあ、面倒なので答えを言つてしまいましょう」

裏上さんは少しだけ間を空けたあと、とんでもない発見をした学者みたいに喜びを全身で表現する。

「これは、この前の殺害現場で拾つてきたものです。もちろん、警察から拝借したんですがね。ワタクシ、警察のお偉いさん方にも顔がきくものとして」

「血縁のつもりだろうか。

「……それがどうかしましたか？」

「へへへ。あなたなら、分かるでしょう。 いえ、誰にでも分

かりますよね、こんな事」

僕は窓から外を見る。

いつの間にか、雨は止んでいた。

「簡単な事ですよね、この髪の毛は犯人のものである可能性が高い。つい最近起こった事件の被害者は、女性でしたが、それでもショートカットでした。長い髪の毛が、長い間、放置されていた廃屋に落ちてるだなんて、そんなの犯人以外、考えられません」

「そうですかね。ホームレスのおじさんが一時的に住み着いていたっていう可能性があるじゃないですか。髪を切るお金がないから、伸びきっていたっていうこともありますよね?」

「おや、言われてみれば確かに。それでもですね、あの廃屋には埃が溜まっていました。誰かが一時的にでも住んでいた可能性は低いですよ。ああ、もちろん、殺人が行われたであろう場所には、埃などはなくなっていましたが」

「その髪の毛はどこにあつたんですか?」

「確かに、殺人場所の近くでしたね。ええ」

「埃に埋まっていたとかは?」

「ないです。動きがあつたせいで埃がなくなつた場所に落ちていました」

「それでしたら、考えられる可能性は一つですよ、裏上さん」

「ええ、犯人のもので」

「あなたの髪の毛です」

また殴られる。

いい加減、呼吸困難に馴れてきた。

「くつくつぐ。笑える冗談は好きですが、今の冗談は嫌いです」
やれやれと言つた感じで裏上さんは首を振る。

「あなたと話していくても進みませんね。もういいです。要件だけを伝えていきますので」

手帳になにかを書いて、それを僕に押しつけてこようとしたので、手近にあつたマッチで燃やしてあげた。

「……なにをするんですか、真田くん」

「めかみの辺りがピクピクと動いている。

「いえ、僕に預けようとしたって事は、ゴミですよね？わざわざ捨てに行くのは面倒なので、ここで燃やしてしまいました」

「そうですか」

もう一度、なにかを紙に書く。また燃やす。殴られた。火が消えたマッチの棒を口に突っ込まれた。火薬臭かった。

「さて、これが最後のチャンスですよ？」

もう一度、渡してくる。僕の口をまたゴミ箱にしたくないので、素直に受け取った。

「そこに書いているのを読んでいただければ分かると思いますが、それでも言つておきましょう。まず、相崎楓の毛根付き髪の毛を入れてください。なんですかその日は。大丈夫ですよ、舐めまわすような真似はしません」

「いえ、そういうことじゃなくて、なんであいつの髪が必要なんですか？ どうしても欲しいのなら、家に入つて探してみればいいじゃないですか」

「嫌ですね真田くん。捜査令状を持つ事が出来ないワタクシがそんな事をしたら、住居不法侵入で捕まるだけですよ」

「むしろそれを望んでいるんですが」

「そうですか。別にどうでもいいことです。で、髪を手に入れたら、ワタクシにください。この袋の中に入っている髪でDNA鑑定します」

「……」

「なんですか？ くつくつ。あなたは彼女が犯人ではないと信じてるんですね？ だったら、このくらい協力してくれてもいいじゃないですか、彼女の無実を証明する手段にもなりますよ？」

「……」

「嫌ですか？ 断るつもりなら、ワタクシにも考えがありますよ？」

「どうするつもりですか？」

「毎日あなたの携帯にイタ電し続けます」

「なんて悪質な嫌がらせを」

バイトが終わると、僕はあいつが住んでいるアパートに直行した。築二三十年くらいのボロアパートの前に着く。

あいつが住んでいるのは一階の一番左側なので、僕はサビツでいる鉄製の階段を上つてそこまで行く。

一度だけ深呼吸してから、ドアノブをひねる。

がちゃがちゃと鍵が閉まつている事を音で主張してきた。

扉を叩いて「開けろ！ 警察だ！！」的な事を言おうとして止めた。無意味だから。

さて、家中に入る事は出来なかつた。これで、一応、裏上さんに協力しようとして家まで行つたけど、拒絶されたという大義名分の出来上がりだ。

どうせあの人人の事だから、僕をどこから見ているのだろう。

さて、帰ろう帰ろう。まだ夜は肌寒いから風邪をひくかもしぬない。

家に帰つた僕は、母さんが作り置きしておいてくれた夕飯も食べずにベッドに倒れこむ。

ベッドが僕の体重以上に沈みこんだ錯覚に陥つて、その理由をぼんやりと考えてみる。

きっと、疲れているのだ。

必要以上のものを背負つたり、変な感情を抱いているせいで体が重く感じているわけではない。

そうだ、そうに違いない。

寝返りをうつてからもつ眠りうつと思い、そつと目を開じようとした。

だけど、ここで目に入るものがあった。

それは、僕の机の上にあった。

マジシャンが被るようなシルクハットの黒い帽子。以前、あいつの忘れ物だらうとこうことで、僕が持ち帰つてきて、それ以降あそこに置きっぱなしにしていたもの。

「……」

僕はゆっくりと立ち上がり、机の前往き、帽子を手に取る。内側を確認してみると。

「……」

あつた。

茶色く長い髪の毛。それに毛根つき。それを摘み上げてとつた僕は、近くにあつたナイロン袋にそつとしまい込んだ。

次の日も学校を休んで、バイトだけ行つた。

明からメールが来たけど、僕はそれを無視し続ける。

今は、他の事などどうでもいい。

ただただ、結果が欲しい。

バイト場に行く途中に僕を待ち伏せしていた裏上さんと、持つていたナイロン袋を押し付ける。

「おやおや、やつと協力してくれる気になりましたか」

などと言つていたけども、僕はあなたに協力するつもりはないんだ。

ただ、自分でなにかしたいだけだ。

あいつの無実が証明されるのならそれで構わない。むしろ万々歳だ。

だけど。もし、無実の反対である事実がでてきたとしたら、僕は

一体、どうする気なのだろう。

僕は本当にあいつのことを信じているのだろうか。

分からぬ分からぬ。

嘘ばかりつく自分の心境なんて、自分でもよく分からぬ。

他人を騙して、自分を騙して。

そうやって今まで僕は生きてきた。

そうでもしなければ、嘘でもついて情報の面だけでも優位に立つことができなければ、僕はきっと、とつこの昔に自殺でもなんでもしていたのだろうから。

こんな自分が大嫌いで、だけど、一生懸命、他人も自分も騙し続ける自分が大好きだつた。

そうでもしなければ守れなかつたものがあるのだから。

でも、今は……？

嘘をつき続けて、守れるものが今はあるのか？
あるのだとしたら、どうなる？

「……」

ああ、僕は一体、一番最初に、なにを守りたくて嘘をつき、なにを信じたくて嘘をつき、なにを隠すために嘘をつき始めたんだっけ。バイトが終わり、家に帰つている時、僕の携帯が震え始める。重く感じる腕を動かしてポケットからそれを取り出し、サブディスプレイに表示される名前を確認した。

そこで。

携帯のバイブにも負けないくらい僕の手が小刻みに震え始める。生まれたての小鹿みたいにふるふると震えすぎているせいだ、名前を確認できなくなつたけど、そんのはもう関係ない。

携帯を開き、通話ボタンを押す。

『恭史！』

聞こえてくるのは、たつた数日しか聞いていないはずの、だけど、何年も聞いていなかつたように思える、夏の風鈴のように綺麗な声。街中を走つてゐるのか、車の走行音や客引きの声がうるさい。だけど、それでもはつきりと、分かる。

相崎楓は焦つていた。

なにかに追われているのだろうか。なにかに迫られているのだろうか。なにから隠れているのだろうか。なにかに脅えているのだろうか。

僕はその声を聞いて、懐かしさと一緒に、黒い感情もふつふつと沸き起こるのを感じていた。

『恭史！ 私、最近変なことになつてて！ ビリーハーディング

！』

電話先の相崎楓は明らかに動搖している。

「昨日の夜はどこにいたの？」

自分でも驚くほど、冷たい声だった。彼女にはこんな声で接したことはない。

だから、彼女もその異変に気づき、だけど僕の唐突な質問に答える。

『昨日の夜は用事があつて、外に出てたよ。でも、そんなことよりくる。』

「外に出てなにしてたの？」

『え？ いや、だから用事があつて……』

「なんの用事？」

『……なんで、そんなこときくの？』

「外に出て、また人を殺してたの？」

彼女が息が一瞬詰まつたかのように、言葉が途切れる。

『そんなことしてない！ 恭史なら信じてくれるよね！？』

『信じたいよ。だから、昨日の夜はどこでなにをしていたの？』

『昨日の夜のことも教えて？』

『……恭史も、私の事を疑つてるんだね』

歯を食いしばっているのか、とても苦しそうに彼女は咳く。

そこから一呼吸置いて、相崎楓は続ける。

『一昨日から私は熱が出てて、ずっと寝込んでた。昨日は少し熱が下がつたから、買い物に行つてたよ。夕方に出かけて、寄り道とか

一杯したから、帰ってきたのは夜の十一時くらい』

「証拠は？」

『……商店街の八百屋さんのおばさんと話したから、聞いてくれれ

『ひ、思ひばらかると思ひ

「…ねえ」「

『なに？ 信じてくれる気になつた？』

最初から期待なんてしてないような、そんな声だった。

「なんで嘘つくな？」

『雪の夜に』

「僕は、君の嘘なら、高確率で見破れることができるんだよ？今まで

でだって、そうだったでしょ？だから、君のそれは嘘だよ

『嘘……じゃないもん

「いや、嘘だよ。だつて僕は、君が一昨日の夜に外にいるのを目撃

していはるし、僕以外の証言者だつてはいる

『そつちこを嘘ついてる!! 梅雨に私は

まだなにか聞いては続かないわ。彼女は、業おじいだの言葉を遮り難い。

「僕は君が、一作の夜こ人を殺してある場面をみてるんだよ!!

毎日おかいなものが、今も馬鹿力にがって、何處何處も凶器を体内外に侵入させるそんな場面を見てるんだ！ 昔よくいつた古い洋館の

伝説みたいに、ドッペルゲンガーがこの世にいない限り、君は……

四

久しぶりに大声を出したせいで、喉がひりひり痛む。僕は唾を飲

み込んで、言葉を待つた。

『今昔物語』

ほんとに声がある。

それは段々大きくなつて、最後には泣き出しそうなくらい大きな声になつた。

声になつた。

『』

呪詛のように何度もその単語が繰り返された後、電話は切れた。
ツーッーという、もう相手と繋がっていない音を聞きながら、僕は地面に膝をつく。

街灯に照らされたその道には、僕しかいない。

握り締めた携帯を地面に叩きつける。派手な音がして、壊れる。

それでも、何回も叩きつけた。

原型を留めなくなって、部品だけになつたら、今度は拳で地面を殴りつける。

皮が剥け、血が地面に吸い込まれる。

「……泣きたい」

だけど泣けない。

泣きたい時に泣けないことは、想像以上に辛い。

目元に手を当てる。

水が流れる気配などない。乾ききっている。まるで砂漠みたいだ。
泣けば、涙に乗つて、今のこの気持ちは流れるだろう。

そうすれば、楽になれる。

だけど。

「……なんで泣けないんだ」

心は今まで通り、痛まない。

麻痺している。

どうしようもないくらい、僕の心は狂っている。

昔からの幼なじみがあんなことをしていると知つて居るのに、涙一つ流せないなんて、人間失格だ。

足音がしたので顔を上げる。

いつの間にか裏上さんがいた。

「おや、どうしました？」

「いえ、別に」

「そうですか。今日は報告にきました。警察に大至急DNA鑑定をお願いしたところ、なんとあなたからいただいた毛髪と現場に落ち

ていた毛髪が一致しました。警察は相崎楓が殺人犯としての考えを強め、逮捕に乗り出しましたよ。ご協力、感謝いたします」

「……帰つてください」

「ええ、それでは」

翌日。

今日も学校を休もうとしたら、さすがに般若と化した母さんに家を追い出された。

制服など、学校に必要な物一式と一緒に屋外に放り出される。僕は庭の木の陰で着替え、重い足取りで学校に行く。

今日は曇っていて、背景が白黒でしかない。

通り過ぎていく人々も、全員、モノクロの服を着ているのはなぜだろうか。

ふらふらと、蛇行しながら道を歩いて行くと、校門の近くで肩に手を置かれた。

振り向くと、それまで笑顔だった明の顔が一瞬にしてひきつる。

「大丈夫か、真田？」

「……なにが？」

「なにがってお前……」

そこまで言つて明は言い淀む。

僕の顔をちらちらとストーカー中の変人みたいに窺つてくると、背中をバンバンと叩いてきた。顔には無理やり作ったような笑顔が浮かんでいる。

なんだどうしたんだ、明。

そんなに叩いても打楽器みたいな良い音は出ないぞ？

「あはは。お前の死んだ田は今に始まつことじやないもんな」

「そうだね」

「いつもより数倍、目が濁っているけど、それは気にする」とじやないもんな！ 心なしか、田の下に隈があるけど、ゲームのやり過ぎには注意しろよ？

「……今日は凄く曇つてるね明」「……今日は凄く曇つてるね明」

なにを言つているのか分からぬぞ。

だから適当に話題を変えた。

しかし明はそんな僕の言葉に驚愕を露わにして、空を仰ぎ見る。それからもう一度僕の顔を見てきて、心配そうに眉を寄せた。

「お前、本当に大丈夫か？ 今日は晴天だぞ？」

「え？ 明こそなに言つてゐるの？ だつて、背景だつて白黒になるくらい曇つてゐるじゃないか。明の顔もなんか白いよ」

「……変な冗談止めるよ。じゃあ、これ何色に見える？」

明はポケットから携帯を取り出して僕に見せてくる。

なんて質問出しちゃんだよ、明。こんなに考へるまでもないだらつ。

「黒」

「……赤だよ」

「黒だよ」

「赤だつて！」

あれ？ おかしいな。どうからどう見ても黒じゃないか。明の方

こそ、おかしいんじゃないの？」

「お前、病院に行つた方がいいんじゃないか？」

「なに言つてんの。悪くもないのに病院行つたら、ただの営業妨害じゃないか」

「いや、妨害にはならないと思つけど……。つて、そんな事じやなくて！ お前、今日はなんかおかしいぞ！ どうしたんだよー。」

「あはは。大丈夫大丈夫。どこかの誰かさんと比べたら、僕は正常だよ」

「おい！ あいつはなにやつてんだよー。なんでこんな状態のお前を放つてゐるんだよ！」

僕の肩を掴んできた明に、首を傾げる。

「……あいつつて？」

「あいつだよ！ あこぞ……」

「やめるー！」

僕が出した大声に、明はビクッと震える。

「あいつの名前を出すな！ ……もういいから、僕なんか放つとい

てくれ。迷惑なんだよ！ いつもいつもなれなれしく僕に話しかけてきて！ お前なんて僕は大嫌いだ！ もう話しかけてこないでくれ！」

驚きに身を固くしている明を放つて、僕たちのやり取りをみていた登校中の生徒から逃げるように僕は走りだした。

教室内の自分の席に倒れ込むようにして座り、顔面を机の表面にくっつけてうなだれる。

なにやってるんだ僕は……。明は心配してくれていたのに、なんであんな事を言つてしまつたんだ。

あいつの名前が出そうになつた瞬間に、頭に血が上つて、そこから訳の分からぬ言葉を並べて。

完全にハッ当当たりじゃ ないか。

こんな僕にも親しく接してくれる数少ない友人なのに。

「あー、もう」

咳き、嫌な事を忘れてしまおうと口を閉じる。

そこで、壊れた前の携帯からカードだけ取つて、古い方に入れて使えるようにしておいた携帯がぶるぶると凍死寸前の動物みたいに震え始める。

動くのも億劫だったけど、それを取り出して名前を確認しようとしたりけど登録してない番号だった。

「……」

すぐに電源ボタンを押して通話を拒否した。

それでも何度もかかってくる電話。わずらわしくなつたので、電源をオフにする。

それから、もう一度、ゆっくりと目を閉じた。

これで安らかに眠ることができると思いながら、ゆっくりと意識が浮遊するような心地よい感覚を味わつていると、校内放送を知らせる音が、スピーカーから流れる。

『真田恭史くん、三年生の真田恭史くん、至急、職員室まで来てください』

寝たふりをしてそれを聞き流した。

その放送は、短い休み時間のたびに流れてきたけど、僕は無視し続け、そして昼休み。

購買にパンを買いに行こうと思い、教室を出る。
だけど購買は人が群れていたので、外にあるコンビニで買いに行く事に。

生徒玄関で靴を履き替え、校門から外に出る。

「おや、真田くん」

そこで呼び止められた。

僕は彼の方をチラリと見てから、また歩き出す。

「おやおや、無視ですか。さっきの電話もそうでしたし、校内放送もそうでしたね……。ああもう、じこまでワタクシを興奮させれば気が済むんですかあなたは」

このまま無視しても付きまとわれるだけだと悟ったので、僕は無言で彼に振り返る。

「くつくつ。さて、ワタクシになにか聞きたいことはありますか？」

「スリーサイズは？」

「計ったことありませんね。ええ、ワタクシ男なので。ちなみに真田くんは？」

「胸は小さい方が好みですね」

「ああ、どんな女性の体型が好みなのか聞いてきてたんですね？
ワタクシはですね……」

「別に知りたくないです」

「…………ですか。まあ、それはそうと、あなたに用件があつたんですよ真田くん」

「なんですか？」

「あなた、前に死んで当然の犯罪者は殺されても文句は言えない、的な事を言つてましたね？」

「あなたにそんなことを言つた覚えはありますせんが」「そんな些細なことはどうでもいいので。じゃあ、仮にですよ？一般人が殺された場合は、あなたはその犯罪者にどういう感情を抱きますか？」

「不慮の事故で死なせてしまった場合はしようがないですけども、故意にやつた場合はその遺族に殺されてもしようがないと思いますし、どうせなら死んで欲しい」と思います」

裏上さんは、「くつくつく」と例の嫌な笑みを浮かべる。

「本当にあなたはワタクシに似ている」

「止めてください。自殺しますよ？」

「おや、それは中学時代にも言わされましたね。触つたら自殺するとかなんとか。なんかそういう都市伝説とか学校の怪談的なもの一つとして数えられてましたからね、ワタクシ」

存在からして嫌な人だからねこの人は。恐怖の対象になるのは当たり前だろう。

「それはそうと真田くん。あなたに良い情報を教えましょ」

「……なんですか？ まさか、なんで教えていないはずなのに、あなたが僕の携帯番号を知っていたというストーカー疑惑を解消してくれるんですね？」

「それは企業秘密です」

裏上さんは片手をつぶつてそう言つた。

僕としては海に沈めながらゆっくりと問い合わせしておきたい事実なのだが、そんな気持ち悪い反応をされてしまつてはどうでもよくなる。

「あなたにとっては本当に有益かもしれないですね。それとも、無益かもしれないです。まあ、どっちになるかはあなた次第という事で」

「「コンビニ」に行きたいんで早くしてください。あなたのまごとへ言葉に興味なんてありませんので」

「おやおや。前より嫌われてしましましたね。なんででしょ？」
軽いスキンシップでみぞおちの辺りを何度も殴つたことが悪かつたんですかね？　いやいや、まさかですよね。そんなことで怒るなんて幼稚すぎます」

「どうでもいいですから。早く用件を」

「それもそうですね。ワタクシもまだ用事あるんで、こんな生意気な子供を相手している時間はありません。それでは言ひやいます」
「ジャジヤン！　と裏上さんは声を張り上げる。

「ワタクシと似ていてるあなたに朗報です。ワタクシに似ているとう事は、あなたの大嫌いな不同集団にもよく似ているといつ事になります」

その言葉に一瞬だけ思考が跳んでなにも考えられなくなる。

だけど数瞬後にはゆっくりと息を吐いた後に冷静さを取り戻す。

「……どういう意味でしょうか」

「なに、簡単な事ですよ」

僕の反応を見て、面白がるよつに笑う。

「ワタクシ、以前この街に不同がいたときに会つていてるんですよ。それで捕まえようと追いかけてたら、彼が逃げる場所がなぜかすぐ頭に浮かんできて、実際、そこに行くといるんですよ。波長できなものが同じなんでしょうね。思考とかそういう回路できな意味で」

「……それで、なんで僕があんたら犯罪者集団と似ている感じになるんですかね？」

「くつくつく。だから言つてるじゃないですか。あなたとワタクシは考え方が非常によく似ています」

いや、言つてないよ。聞いたことないよそんなの。

「先ほどの質問と、以前の死刑制度の考え方。実はワタクシもほぼ同じなんです」

「あれはあなたが勝手に僕の心情を捏造してたんじゃないですか。

僕の考え方は全然違いますよ」

「いえ、あれで合ってるはずですよ、嘘つきさん」

「合つてないです。全く的外れですね。ダーツや弓うとして的めがけて投げたら、なぜか背後の壁に矢が突き刺さるくらい的外れです」

僕はここぞとばかりに嘆息する。

でも、それでも僕はなんとなく分かった。

この人の嫌な笑みを見るたびに感じていた既視感の正体が。

あれは、昔に一度だけ見たことがある、不同集成の笑みにそつくりなんだ。

だから、僕はこの人のことがこんなにも嫌いなんだ。大嫌いなあいつに似ているから。

「おや、どうかしましたか？」

「いえ、別に」

僕は裏上さんから田を離して、わざと歩き始める。これ以上、こんな人と話す必要はない。

背を向けた僕に、裏上さんは最後に一つだけ、と言つて来た。振り向いて答える。

「なんですか？」

「実はこれが一番言いたかったんですよ、真田くん」

隠し切れない興奮を裏上さんは身をくねらすことによつて表現する。気持ち悪い。

「くつくつく。被害者の身元が分かりましたよ?」

「……どの被害者でしうか」

「この前の廃屋で殺された被害者です。名前は羽賀 恵子。〇一で

すね」

「……それがどうかしましたか?」

「いえいえ、ただ、被害者は一般人だと伝えたかっただけです「そんなの知つてましたけど」

「えー」

裏上さんはがっくりとうなだれた。さつきの言葉を聞いた僕の反応を想像して勝手に楽しんでいたのだろう。

だけど動じない僕に、彼は落胆したのだ。

「そうですかー。つまんないですな。……それじゃ、ワタクシはこれで」

「はい」

本当は知っていたといつよりも、なんとなくそういう思つていただけだ。

だから、僕は、彼女を拒絶した。

電話あんなことを言つた。

だから、あんな真相を言われたところで、僕は全く動じない。

「……それでも」

間違つていてほしかった。

いつもは全く役に立たない直感が、なんでいつもこうときに限つて正解するんだ。

「コンビニでパンを買つて教室に戻ると、みんなが僕の方を一斉に見つきた。

ひそひそとなにか話している。

気にはなつたけども、無理やり『気にしないことにして自分の席に座る。

暇なので携帯にイヤホンを差し込んで、ワンセグにする。

適当にチャンネルをえていくと、急に見覚えがある土地が田に入つた。

そこは僕がいつも通る位置にあるボロアパートだった。

モザイクがかけられて全体像は分かりにくくしてあるけど、それでもすぐにそれくらいは分かる。

マイクを持った女レポーターが興奮したように早口でまくしてしている。

『警察が最近多発している殺人事件の重要な参考人として、市内に住む少女を捜索しています！この事件は五月に入つてから三件起つてゐるもので……』

「……」

無言で顔を上げると、クラスのみんなは携帯を持っているか、隣にいる人のを覗き込み、そして僕の方をチラチラと見てきていた。

「……気分悪い」

思つてゐる事があるのなら直接言つてくれればいいのに。わざわざ腫れ物を扱つよう遠くから眺めてきて、ひそひそひそと。

「バツカみたい」

鞄を持つて立ち上がると、またクラスから視線が集まつた。横に座つてゐる女子が軽く悲鳴を上げて逃げ出す。

僕は犯人じやないよ。

それとも共犯者だと思われてるのかな？

乱暴に扉を開けて、そして勢いよく扉を閉める。自分の鼓膜が少しだけ痛んだ。

「……あー」

ダメだ。感情が抑えきれなくなつてきた。

昔にもう表に出さないつてきめてたアレが、いつもの性格を押しのけて表面に出てこようとする。

あんな感情が表に出てきても良い事なんてなに一つないのに。

玄関で靴を履き替えて外に出る。また裏上さんがいるかと思つた

けども、今度はいなかつた。

歩いて校門のところに行くと、声をかけられる。

「あつ、真田さん」

「……どうも」

口にチャックちゃんだつた。

制服に身を包んだ彼女は、風になびく髪を手で押さえながら僕の方に寄つてくる。

下級生のはずなのに、なんだか大人の色氣を発する少女だ。

周りを見ても、誰もいない。

「どうやら彼女一人のようだ。」

「相変わらずの魚の死んだような目ですけど、今日は生氣まで死んだような感じですね。事件の事が影響してるんですか？」

「……君は、僕が怖くないの？」

僕の問いかけに、彼女は首を傾げる。

「怖い……と言つと？」

「ニコースとか観たでしょ？ その関係で」

「ああ、これですか？」

携帯を開いて、テレビを起動させた口にチャックちゃんは僕に画面を見せてきた。

そこには先ほどの番組とは違つものの、同じような内容を放送しているニコースが映されていて。あいつのアパートを背景にしていた。

僕は彼女の携帯の電源ボタンを連打してその画面を消すと、ゆっくりと目をつぶつた。

「うん、まあ、その事件で。僕が共犯者つていうこともありえるでしょう？」

「いいえ、ありえません」

彼女ははつきりと、なんのよどみもなく、心底そう思つてこらるようになに断言した。してくれた。

「だけど、なんで？ なんでそう信じじうことができる。僕と彼女は前に一度だけ会つたことがある関係で、ほぼ初対面といつてもいいぐらいなのに。」

そんな不得体の知れない男を信じじる理由は？ 一体、どこからそんな根拠がくるの？

「あつ、もしかしてほぼ初対面だとか思つてます？ その一ワトリ

並みの記憶能力を直したほうが多いかもしませんね

「……初対面じゃないの？」

「違いますよ」

「彼女は、ゆっくりと微笑む。大人びた笑顔だった。

「初対面だったら、私が去年の真田さんの行動を知ってるはずないじゃないですか」

「……あの、文化祭準備の時に一人で帰ろうとしたっていうやつ? 「ええ。まあ、まだ他にも色々あります。それが一番分かりやすいですかね。あなたの頭のレベルに合わせるのも大変ですね」

「……なんで僕のこと知ってるの?」

「覚えてないんですか? ああ、覚えてないから初対面だと思つてたんですね。……まあ、そんなのはどうでもいいことです」

とにかく、と彼女は頷く。

「私は、真田さんが事件を起こしたり、その片棒をかつぐことがなつて分かつてゐるんです。信じてます。むしろあなたは、そういう行為を異常に嫌う傾向があります。その理由は分かりませんが、それでも言えるんです」

一息吸つて。

「あなたは絶対に犯罪者にはなりません

「……そう

「ええ、だから私はあなたが怖くありません。共犯者でも実行者でも犯罪者でもないって信じてますから」

「……そう

「なんで彼女がここまで僕のことを信頼してくれてるのが分からないけど、それでもこの言葉は素直に嬉しかった。

その言葉を飲み込むと、さつきまで腹の底で暴れまわろうとしていた黒い感情を、全てとはいわないまでも洗い流してくれた。

僕は彼女を見つめる。彼女も微笑んだまま、僕を見てきていた。

「君、名前は?」

「坂下

知里

サカシタ

チサト

です

「そう。ありがとね、坂下さん。おかげで気分が楽になった」

「全く、先輩のくせに手間がかかる人ですね、あなたは。どうですか？ 留年して、私と一緒にクラスになるつてのは、面倒なういぐらでも見てあげますよ？」

「……魅力的なお誘いだね。だけど、遠慮しておくれ。僕は、僕の居

場所を守りたいから。壊すところだつたけど、それでも今から守りに行くよ」

「そうですか。よく分かりませんが、がんばってください」

「うん」

僕は坂下さんを追い越して、走り出した。

雲が多くなつてきて、湿気も充満してきた曇天の下、気分だけは晴れやかだ。

僕は、これから居場所を確保しにいく。

一度は拒絕してしまった、彼女の横こそが、僕の居場所だから。何年も何年も苦労してきて、やつと作り上げた、そんな居場所を、なんで僕は自分から手放そうとしていたのだろうか。

僕が……真田恭史が、相崎楓だけは、なにがあつても、どんな事が起こつても、絶対に犯罪者にはならなうつてそう信じてたのに。

学校から走つて家まで行く途中、また裏上さんに出会つた。

彼はニコニコと気持ち悪い笑みを浮かべながら、僕に近寄つてくれる。

「おや、真田くん。どうかしましたか？ そんなに急いで、どこへ行くんですか？」

「決まつてますよ。ちよつと僕なりのハッピーホンダまで向かうだけです」

「……ふむ。相崎楓の居場所ですかね？」

「楓の場所ではないです」

「『楓』……ねえ。気づいてましたか、真田くん。あなた、犯罪者

はフルネームで呼ぶ癖があつたんですよ。それで、今日の昼までは相崎楓のことをフルネームで呼んでいたように感じます

「僕の心の中を読めるんですかね？」

「この人の前でそんな呼び方をした記憶がないのだが。

「それでなくとも、君は、彼女の事をあいつだと彼女とか使って、名前を呼ばうとしてませんでした。拒絶していたからだと思うんですけど、なんで今になつて下の名前で呼んでるんですかね？」

「ちょっと心境の変化がありまして」

「……ですか。まあ、いいです。ワタクシも色々忙しいんでこの辺で失礼します」

そう言つても動こうとしない彼に背を向けて、僕はまた走り出す。こいつなんかと話している時間なんてない。無駄だ。不同集成と同類のくせに、僕の時間を奪うな。

あんたちは僕からどれだけのものを奪おうとすれば気が済むんだ。背後の、気持ち悪い気配が静かに動いた。僕から離れていく。安心して、僕はスピードを上げた。

第9話 君が壊れた世界で

家に帰ってきた僕は昨日、東条さんに選んでもらって買ったまま、自分の机の上に置いていた箱を掴み、ポケットにねじりこむ。楓の居場所はどこだろうか。

楓の行きそうな場所はどこだ。考えろ。考えろ。

考えても分からぬ。今の彼女の行動パターンなんて、僕には想像もつかない。

それでも、もし、彼女がいつも通りだつたらどうに行くか。それを考えて。

「……」

だけど僕は首を振る。

手当たりしだい探しに行こう。

この街のどこかにはいるはずなんだ。

最初は、楓のアパートに行つてみよう。

ショルダーバッグに必要になりそうなものを詰め込み、台所からも拝借していく。

急いで靴を履いて外に出て、自転車の鍵を開け素早くまたがる。

「……ごめんね」

口に出るのは懺悔の言葉。

僕はきっと、また君を裏切る。

犯罪者じゃないって信じてるけども、もうこの状況じゃダメだ。

「……約束を守りにいこう

なにがあつても、なにが起こるうとも、誰がなにを言おうとも。

「僕は君の味方だよ」

たとえ、また裏切ることになつても。また嘘をつくことになつて。

君を絶望させることになつても。これだけは、本当の本当。

嘘にしたくない、たつた一つの真実。

フィクションにできない、ノンフィクション。

「さて、気張ろう」「ペダルに足をかけて、力を入れる。

信号も通行者も無視して歩道を爆走すると、楓のアパート前に着く。

そこには報道陣や野次馬が殺到していて、取材を受けている人もいる。

僕は切れた息を整えもせずに、一人のカメラマンの前に行く。

カメラマンが気づき、マイクを持っている女人の人を呼ぶ。

野次馬が僕を見て、わあ、と騒ぎ出した。

そつちのほうに目をやると、楓の部屋の横に住んでいるおばさんがペちゃくちゃとなにか騒いでいる。

きっと、僕が楓の親しい友人だとか言っていたのだろう。

その人の周りにいる人も、一度はどこかで見たことがある人たちだ。

楓と仲良くしていった同級生の女の子もいる。

リポーターが興奮した面持ちで僕に近づいてきて、マイクを向けてきた。

「あなたが容疑者の彼氏ですか！？」

僕を囲むようにして野次馬や報道陣が集まってくる。

熱気がヒートアップして、あまりの人口密度にめまいがしてきた中、しつかりと地面を踏みしめる。

ここで卒倒するなんてカッコ悪すぎる。

僕は深呼吸して心を落ち着かせると、リポーターからマイクを奪い取りカメラの方に視線をやる。

「楓。この放送観てる？……僕は君を信じる。ごめんね、君がみんなことするはずないって知つてたのに。酷いこと言つて。疑つて。今までの言葉は信じてくれなくてもいい。全部嘘だと思って。……だけど、虫のいい話だけど、これだけは信じて。僕は君の味方だ！」

もう絶対に君を疑わない！ 拒絶しない！ 君の全部を信じてみせる！ だから……待つて」

言いたい事を言い切ったので、僕は啞然としているリポーターにマイクを返してカメラから視線を外す。

そしてぐるりと僕を囲んでいるみんなに言つてやる。

「聞いたとおり、僕は彼女の無実を訴えます。彼女はなにもしていない。根拠なんてなにもないくせに、楓を犯罪者にしたてあげるな！」

それまでポカんと口を開けていた女リポーターが、仕事を思い出したようにさらに詰め寄つてくる。

「現場に残されていた毛髪と容疑者のDNAが一致したという事実をご存知ですか？」

知つてるに決まってる。

それはまだ、楓を信じきれていなかつた馬鹿な僕がやらかした事だ。

あの時は彼女の無実を証明するためとか適当な理由を作つて、裏上さんに渡した。

……本当は、そんな理由なんて存在していなかつた。あれは逃げだ。彼女を信じていなかつた僕の逃げ道。

本当は、楓が、あの時点では大嫌いな犯罪者だつた相崎楓が、それを機に捕まることを望んでいた。

だけど、僕は言つ。

とつさに考へ付いた嘘を並べ立てる。

「みなさん、知つてますか？ この事件にはなにかしらの陰謀があるんです。僕の前に、私立探偵を名乗る怪しい男が何度も現れました。その男の口車に乗せられて、僕は嘘の自供を強要されたんです。本当は誰でもない毛髪を楓のものという事にして、彼に手渡し、警察にもそれが間違いないと証言しました」

一息吸う。

「もちろん、楓のDNAが一致するはずがありません。あれは警察

が流したデマなんです。なぜなら、この前の事件があつたときに、僕と彼女は一緒にいたんですから。その証言は親しいものだという事で聞き入れてはくれませんでしたが、僕は彼女の無実を知っています

みんなの表情を見渡す。

誰も彼も半信半疑だが、こういう話を好む放送局が黙つていなかつた。

「というと、警察が彼女を犯人に仕立て上げた。つまり、濡れ衣ということですね？」

「ええ、そうです。私立探偵を名乗る男の携帯の番号を教えてあげます」

僕は朝の着信履歴から彼の番号を見て、大声で何度も繰り返す。裏上さん。

今もどこかで僕の事を見るんでしょう？

だつたら、まずはその動きを封じてあげる。

僕のせいでもあるけど、あなたがいなければ僕はここまで楓を疑わなかつた。

あなたがいたから、話はここまでややこしくなつたんだ。

僕をたぶらかした罪、ここで払つてもらいますよ？

面白半分の野次馬が、携帯を操作して次々に耳にあてていく。放送局もそうだ。

スクープが欲しいのならあげる。

その代わり、しっかりと彼の足止めをお願いしますね。

僕は、彼と最初に出会つたとき貰つた名刺を一番近くにいたリポーターさんに渡す。

「これ、彼の名刺です。住所とか書かれているんで、よければ使ってください」

僕の手からひつたくるようにしてそれを受け取つた彼女は、興奮によつて蒸氣した頬のまま周囲に指示を出す。

「あつ、それと。彼はこの辺にいると思います。僕が変な事を言わ

ないよう見張つてゐると思つんですね

僕は裏上さんの姿を伝える。

「気持ち悪い笑みを浮かべているんで、すぐに分かると思いますよ。それで

野次馬をかきわけて、円の外に出る。さて、これで一つの問題が解決した。裏上さんがどこにいるか分からぬけど、それは僕には関係ない。彼を捜すのは一般人の役目であり、この舞台には無関係の人間だけだ。

僕は自転車にまたがつて携帯を取り出す。かけるのはもちろん、楓の携帯。

「……」

予想したとおりに応答はなかつた。電源が入つていないというアナウンスが流れ始める。

さて。次はどこにいこうか。

そう考えながら、僕は街の方に自転車を走らせる。とりあえず、前に楓と一緒に行つた場所を捜してみよう。変装とかして案外、街中にはいるかもしれない。

朝は晴天だと明が言つていたけど、今はもう絶対に曇つてゐる。視界は相変わらずの白黒だけど、太陽が見えないからそれくらいは分かつた。

街に行くまでの道中、パートカーを何度も見かけた。

楓を捜し回つてゐるのだろうけど、見つけることができないのだろうか。

前に楓と入つたファンシーショップの前に自転車を停めて、中にに入る。

棚と棚の間にある通路を注意深く観察していただけれど、ここにはいないみたいだ。

さつさと出て他の場所を見に行く。

その後、バイト場や他の店も見て回ったけど楓らしき姿は見えず、僕は少しだけ落胆していた。

だけど、反面、嬉しくも思う。

僕が見つけることが出来ないくらい、彼女は上手く隠れているのだろう。このままだと、いま暫くは大丈夫そうだと。

警察に彼女を発見させるわけにはいかない。

そんな事をされたら、楓は無実の罪で投獄される可能性が高いのだから。

それはなんとしても防ぎたい。防ぐことが、彼女を信じることが出来なかつた僕の罪を軽減させることができる数少ない方法だ。

バッティングセンターにも行つてみたけどやはり彼女の姿はなく、僕は疲れてきた体を休ませるためにベンチに座り、自販機で買つてきた炭酸飲料を飲んでいた。

どこにいるのだろうか。

電話は繋がらないし、今の彼女の行動範囲など分からぬ。

手がかりになる事はなんだろう。

こういう時に全く働くことしない頭をフル稼働させる。頭を抱えて自分の足と足の隙間から見える地面を見つめる。

なにか……ないだろうか。

昔の楓の行動ではなく、今の楓の行動を考えればいいのは分かる。今の楓。犯罪者としての相崎楓ではなく、無実の罪で警察から追われている楓の行動。

追い詰められた人がどういう行動に起こすのか、それがよく分からぬ。

ペットボトルを傾けて、中に入つていたものを全て喉に流し込む。

「ゴホッ！」

むせた。

「……」

だけど、このせいで一つだけ思い出したものがある。

それは、バイトの初日の時、小堂さんが言つていたこと。

『なんか、不同集成と火野が集まつてなにかしてるそうだ』的な感じだつたはず。

楓は、何者かによつて、犯人に仕立て上げられていた。

事実、僕も楓そつくりな人物が人を殺している場面を見ている。

だけどあれは暗かつたのでシルエットしか見ていない。いや、重要なのはここじゃない。もつと、根本的なもの……。

「そうか」

重要なのは今の楓の状況だ。彼女は連續殺人犯として追われている。それはなぜか。濡れ衣を着せようとしている人がいるから。

その真犯人が何人もの命を奪つた人。

考える。それで得する人物は誰？確かにいる。

不同集成。

火野美見。

こいつらが真犯人か。

本当に僕の勘はあてにならない。

ニュースを観て絶対に違うとか思つていたのに、結局あいつの犯行かよ。

「情報を整理しよう」

まず、僕が楓だと思ったあの光影。あれはたぶん、火野美々のもの。背格好や髪型は偶然似ていたのだろう。

そして他の殺人事件。

あれは不同集成のものだ。

わざと犯行を今までと変えることによつて、疑いを自分からそらそうと考えていたのかもしれないが、御陵とかいう人にはそれが通じなかつたみたい。僕は完全に騙されたけど。

それで、肝心の楓の居場所だけど、もしかしたら彼が知つているかもしねない。

携帯を取り出した僕は、アドレス帳から探した彼の番号にかける。

もう学校が終わっている時間だらうか。確かに大学生とか言つていたので、講義じゃなければ簡単に出てくれるはずだけど。

何回かの「ホール音」の後に、その人は出た。

「あつ、小堂さん。少しいいですか？」

『どうした？』

いつもの冷たい口調ながらも、小堂さんはそう言つ。

「いえ、前に言つてたじやないですか。不同集成と火野美見がどこかで密談してゐみたいなことを。それ、どこで密談しているか知つてますか？」

『……なんでそんな事を聞くんだ？』

「ちょっとした興味です」

小堂さんは、ニコースを知つているのだろうか。いや、知つているとしても、そこから楓に繋がる可能性など彼には皆無だ。

小堂さんは楓の家を知らない。テレビに映つているのは家だけで、名前などはまだ出ていない。

だから、大丈夫。適当にはぐらかしておけば、答えてくれるはずだ。何秒かの沈黙の後、小堂さんは言つた。

『……変なことはするなよ？』

「大丈夫ですよ。最近の殺人犯の行動をまとめようと思つてまして。殺人犯専門の捜査手帳的なものを作つて、自己満足にひたるうかと思つてまして。ええ」

『……まあ、いいか。あのな、噂だから本氣にするなよ？』

「もちろん」

『ええと、町外れに廃れた洋館があるのを知つてるか？　あいつらはそこを待ち合わせ場所にしているそつだ。……どうした真田。返事ないけどなにかあつたのか？』

多少、驚いたせいで息が詰まつてしまつたのを、小堂さんに見破られるが、僕はすぐに平静を装つ。

「いえ、別に。なんだかベタな場所に隠れてるなつて思いまして」

『あそこは隠し部屋とかあるみたいだから、隠れ場所としては最適

らしきぞ』

「そうですか『

知つてゐるけど。

「ありがとうござります』

通話を切り、僕はベンチから立ち上がる。

なんだよ、あそこに繋がるのか。……嫌な予感がしてたんだよね。

本当に当たらなくていい予感だけ当たるんだから、神様は一体なにを考えているんだ。

まあ、いいや。どうせあの洋館にはこの後に行くつもりだつたし、本当は最初からあそこが怪しいと思っていたわけだし。

でもそんな勘は当たらないと思つてたから後回しにしていたら……あーあ。

自転車を全力でこいで風を切る。

行く場所は街とは正反対の位置にある、昔よく行つた洋館。

家の前を通り過ぎ、田園が広がる風景を横切つていく。

「やあ、真田くんつ！ どうしたんだい？ あれ？ つて、おーい

！ まさかの無視かよ…』

その途中で東条さんがいたけど、無視した。

田んぼが消えると、次は林が姿を現し、伸びた枝や葉っぱで空を覆い隠す。

緑色のトンネルを抜けると、すぐにそこは洋館だ。

でかい荒れた足場の悪い庭を、今出せる限りの最高速度で走り抜ける。

ブレーキをかける時間ももどかしく、僕は玄関へと繋がる石の階段の少し前までくると、自転車から飛び降りてそのままの勢いで階段を上りきる。

自転車が階段にぶつかって派手な悲鳴をあげたけど、それを無視

して玄関の戸に手をかけた。

ゆっくりと押し開き、中を確認する。

人影はない。

吹き抜けになつてゐる一階の窓から陽光が差し込んでいて、それほど暗くはない。

甲冑やら氣味の悪い絵など、昔の姿をそのまま維持していた。ショルダーバックから取り出した懐中電灯の光を光らせて、足下を照らす。

長年積もつた埃が、人の足跡で崩されている。それはいくつもあって、見える範囲中にあつた。

ここを隠れ場所として使つてゐるのは間違いなさそうだ。

かがみこみ、鼻を押さえながら足跡を確認する。

一つはスニーカーのようなもので、もう一つはおそらく、ハイヒールだろうか。

つま先の部分と、踵がある部分に丸しかないところを見ると、間違いなさそうだ。

残念ながら足跡はそれしか見つからない。

楓のものと思われるものは探せなかつた。これだけたくさん足跡があるのだから踏み潰されていてもおかしくはないだろう。僕はゆっくりと歩き出す。

ここに来た理由はとても簡単だ。

まずは犯罪者がここにいるとの情報を得たから。

もう一つは、その犯罪者共が楓を監禁しているのかもしねない。

この前、楓から電話があつたあの時。

楓はなにから逃げていた。あの時は警察からと思つていたけども、本当は不同集成・火野美見ペアから逃げていたのかもしねない。ここに監禁されていたが、それでも隙をついて逃げ出した。そして僕に電話をかけてきた。

警察に行かなかつたのは、どこかでニュースを観たか、人が噂しているのを聞いたからかもしねない。

そこで彼女は、僕を頼った。

どんな気持ちだったのだろうか。

どんな気持ちで僕を頼ってくれたのだろうか。

僕に拒絕されたとき、どんな気持ちだったのだろうか。

呪いのように何度も言葉を呴いていたあの時、楓はどんな表情を

していたのだろうか。

そして、今はどんな気持ちでどこにいるのだろうか。

誰かの助けを待っているのだろうか。あの時のように。

「……ごめんね」

何度も君を傷つけた僕を、許してくれとは言わない。

だけど、せめて、償いだけはさせてください。

まずは一階に上がり、不同集成達を捜す。あいつらがいる場所に楓がいる可能性が高い。

じゃあ、まずは、寝床となる場所を探すだろ。寝室があるのは一階だ。だから僕は、一つ一つの部屋を確認していく。

どこかにあいつがいるのかもしないとすると、心臓が自然と速まり、息が荒くなる。

……昔、僕がまだ小学校一年くらいの時に、不同集成には会ったことがある。

その時の事を、僕はまだ後悔している。あの時、あいつの気持ち悪い笑みに気づいていれば、あんな事にはならなかつた。バカだった小さな僕には、あいつが異常者だという事を気づけず、そして楓を傷つける結果になってしまった。

本当に、ごめんなさい。

何度も、謝つても足りないけど、僕の気も全然收まらないけど、それでも謝らなければいけない。

僕はずっと、謝つてばかりだった。心の中で。ずっとずっと。

そんな僕に好意を寄せてくれた楓にはとても感謝しているし、僕も彼女が大好きだ。

でも、だけど、だからこそ。
決着をつけなくてはいけない。

最高の形でも。

最低の形でも。

どんな形でも。

最高の結果でも。

最低の結果でも。

どんな結果でも。

全部、受け入れて、彼女を救う。

それが、僕の罪。彼女を疑つてしまつて、そして行動してこなかつたことに対する最悪な懺悔。

一階のどの部屋にも誰もいなかつた。

ということは、隠し部屋にあいつらがいることになる。

あんな部屋を見つけるだなんて、どうやつたのだろう。僕たちの時は、あそこら辺の床で跳ねて遊んでたら偶然、サインと重なつて隠し部屋への扉が開いたわけだけだ。

階段を使って一階に下り、隠し部屋がある床の近くに行く。

しゃがんで、暗記している通りに床を叩いていく。

カリカリと音がして、どこかの歯車が動き出したよつて床が微細に振動し始めた。

ゆつくりと開いていくその床を見つめながら、僕は呼吸を静める。

僕と楓が昔、一緒に閉じ込められた地下室。

脱出できてからは、そこを秘密基地として使つていた。

楽しい記憶が一杯つまつているそんな空間を前にして、僕はどうしてこんなにも嫌な気分になるのだろう。

汚された気がしたか？

僕と彼女の楽しい思い出を踏みにじつて、こじこじるかもしだいあいつらに腹を立ててるのか？

……だったらそれでいい。

この憎しみを忘れちゃ いけない。

今回の事件は全部、不同集成のせいだ。

あいつがこの街で最初の殺人を犯さなければ、あいつが殺人犯じゃなければ、あいつが異常者じゃな かつたら。

僕と楓の人生は、正常なままだつた。

僕と楓の人生は、壊れなかつた。

僕と楓の人生は、平和だつた。

人生のレールを破壊したあいつが許せなくて、小さいころに何度も何度も殺してやりたいとそう思い、呪い、憎しみ続けた連続殺人犯・不同集成。

……なんではあなたは、人を殺すんですか？

あなたが普通だつたら、あなたが正常だつたら、あなたが異常じやなかつたら。

僕は普通で、正常で、壊れてなくて、嘘つきじゃなくて。感情だつて、簡単に表情に出せたはずなのに。

楓だつて、あなたが壊れたから、壊れたんだ。演技を始めたんだ。ずっとずっとと、誰も彼も、騙し続けてきたんだ。自分さえも。

床が開く。

急な階段を下りて、僕は地下通路に到着した。

ショルダーバックから取り出した、自分の家から拝借してきた包丁を手に構えて。

ゆっくりと歩く。

なるべく埃を舞い上げないように。

足音を誰にも聞かれないように。

角を曲がつて歩いていくと、先にある曲がり角から灯りが見え始めた。

それはロウソクの光のようで、ゆらゆらと揺らめいている。そしてその光の中に、影が映つていて。

そし

口ウソクの光によつて巨大化されたその影はまるで化け物のよつて、僕はごくりと唾を飲み込む。

今まで以上に足音を忍ばせ、息を殺して角の近くに行く。

これまで以上に心臓が早鐘をうち、足が震えてくる。この先に、あいつがいる。

「……から……なのに」

話し声が聞こえてきた。

それは、不同集成のものではなく、僕が探し求めていた人物。誰かに助けを求めるような、そんなか細い声。

早く助けなきや。そんな思いが先行し、僕は一気に角を折れた。

「あつ、恭史」

そんな声が鼓膜を揺らし、視界に飛び込んできた光景が脳を震えさせる。

「……え？」

口から漏れてきたのは、動搖を隠し切れない情けない声だった。

「どうしたの？ 恭史？」

「……あれ？」

「ん？」

僕の目に映つたその光景は、床に這いつくばっている人間の頭を踏んでいる、ぴんぴんしている楓の姿。

床に転ばされているそいつは、田隠しをされていて、猿ぐつわも噛まれている。

白いシャツがボロボロに破けており、そこから見える肌は浅黒く変色していた。

よく見ると、後ろ手に縄で縛られいて、足も同じような状態。

「……楓？」

「なに？」

楓は、場違いなほどに明るい笑みを浮かべる。……壊れたよつて。

僕は目の前の光景を認めたくなくて、だから目を閉じた。目をぎゅっとつぶつて、拒絶する。

「……なんで、そんな事してるの？」

「あははっ。分かんない。気づいたらこうなつてたんだ」

「気づいたらその人の頭を踏んでたの？」

「んーん。違うよ」

楓は笑つたまま胸をはる。自分がこんなに素晴らしいことをしたと自慢する子供のように。

「ねえ、恭史。私を褒めてよ」

「……なんで？」

楓は、頭を踏んでいたその人の目隠しを外す。

ついでというように、手に持つていた鉄パイプを隅に放り投げ、その人の髪を掴むと顔を上げさせた。

そして、その人の顔を手で何回か叩いた後、笑みを僕に向ける。「この人、誰だかわかるよね？」

「……不同集成」

「あははっ！ 大正解！ さすがだね！」

顔は赤く腫れ上がり、そのせいで顔全体が把握できないけど、それでもあの気持ち悪い雰囲気を誤魔化すことはできない。

そして楓は、もう一度、言つ。

「私を褒めてよ」

「なんで？」

さつきよりもはつきりと疑問の言葉を送る。普段の彼女なら、おかしいって分かるのに、なんで今はこんなことをしてるの？

「だってさ、あの連續殺人犯をこんな風にして、捕まえてるんだよ。もう一度、胸を張つて。

「褒めてよ。褒めてよ…… 褒めてよ…… あははははははっ！」

哄笑する。

僕は一步、後ずさる。

その距離を埋めるようにして楓が立つて近づいてきた。

顔は笑みのまま。でも、僕の知つてる彼女の笑みじやない、なにか。

「なんで逃げるの？ なんで逃げるのかな？ 私は恭史のために、こんなことしてるんだよ！ 壊められる理由はあっても、逃げられる理由にはならないよねえ？」

「……僕のために？」

「そうだよ。恭史、前に言つたじゃない。殺人犯は死んでもいいし、できれば殺したいって」

前に楓とデートした時に言つた覚えがある。

「あの時、私、言つたよね。恭史はそんなことしなくてもいいって」「……だから、楓が代わりに？」

狂ったような、壊れたような、壊滅的な笑みを浮かべて近づいてくる、楓じゃない『なにか』。

「うん、そうだよー！」

……やめろ。

「実は私、あの時にそんな意味をこめて言つてたんだ！」

……やめてくれ。

「あっ、こんなこと言わなくとも、恭史なら分かってくれてたよね」

……楓の声で。

「あははっ！ ダメだな私。あんな簡単な事をいそいそ説明しちゃうなんて」

……楓の顔で。

「あっ、なにその包丁？ もしかして、あいつを殺すための武器？ あはははははっ！ 準備いいね！ じゃあ、さつやくやつやく おうか？」

……楓に似ている笑顔で。

「ん？ ほら、早く放して？ 私がどどめますから。恭史はなーんにもしなくていいからね？」

「やめてくれ！」

僕が持つている包丁に、手を伸ばしててきたその腕を払う。

「え？」

その、なにかは、驚いたような表情を作る。

「楓はそんなことしない！ たとえ殺人犯でもそいつを殺したりしない！ 楓の笑みは、そんな怖いものじゃない！ 楓の声はそんな壊れたものじゃない！ 楓の体は暴力行為をしない！ お前はお前は一体、誰なんだ！ 楓を返してくれ！！」

僕の叫びが、地下室に反響して、そして徐々に消え行く。

楓は……楓は、笑っていた。

「あつはははははははははははははは……」

狂ったように大口を開けて囁うそいつを見て、背筋が寒くなる。「なーに言つてるの、恭史！ 私は私、相崎楓だよ！？ 少しの間、私と一緒にいなかつただけで、そんなことも忘れちゃつたのかなあ！」

「違う違う違う違う違う違う違う違う違う……」

絶対に違う。そう思うのに。そう思いたいのに。

「だつて、恭史、言つたじやない！ 殺人犯なら殺しても文句言わないつて！！」

「言つたけど……言つたけど……あれは楓がそんな事しないって信じたからだ！ でもお前は楓じゃない！」

「……じゃあ、私はなんのかな？」

「ドッペルゲンガーだ！ この洋館に出来るつて言つ噂の化け物！」
とつさに思いついた単語を並べる。

「あははははは！ 面白い冗談だね、恭史！」

僕の手から包丁を奪い取つた楓は、そのまま背を向けて歩いていく。

「ダメだ。やめてくれ！」

その先には、不同集成の泣き顔。

別にあいつが死んでもどうでもいいけど、それでも楓の体で殺人を犯すなんて、許せない。

だから僕は、そいつにしがみついた。腰の辺りに手を回して、引き止める。

「ごめんね恭史。恭史は今、なにかにとりつかれてるんだよね？」

だから私を否定して、私の行動を邪魔しようとしてるんだよね？分かつてる。分かつてるから。だから今は、ジツとしてて、ね！」

包丁の柄の部分でこめかみを殴られ、意識が昏倒する。拘束の力が緩んでしまつたせいで、そいつは一直線に不同集成に向かつた。

「やめる……」

殴られた衝撃で転んだ体を起こしながら、言葉をつむぐ。

「あはははは！ 大丈夫大丈夫！ 分かつてるから！」

「……やめてくれ」

「こいつを殺したら、恭史は私を好きでいてくれる！ こいつを殺したら恭史はずっと私の傍にいてくれる！ こいつを殺したら絶対に私は幸せになれる！ こいつを殺したら恭史は絶対に私を愛してくれる！ こいつを殺したら、私の大好きな恭史が戻つてくれる！」

「もう……やめてくれ」

「あははははは！」

「やめてくれええええ！」

狂つたように笑い、そして、包丁を不同集成の喉元に突き刺す。彼は苦しそうに顔を歪めた後、猿ぐつわのせいでぐもつた叫び声を上げただけで、そこから動かなくなつた。

楓が包丁を抜く。

その瞬間、壊れたスプリンクラーのように赤い水を室内のいたる所に撒き散らした。

血を浴びて、そいつは恍惚の笑みを浮かべる。シャワーのようになに全身に浴びているくせに、その笑みを崩さない。

ぐるりと、そいつは僕のほうを見た。

「あはははは！ さあ、恭史！ 私を愛してくれるよね！」

「……」

近づいてくる。やつと立ち上がつた僕は、彼女から視線を外すことができない。

「どうしたの？ 怖がらないで。私だよ、相崎楓だよ。君の幼なじみの楓だよ」

「……違つ

抵抗する。

だけど、頭の中ではもう理解している。こいつは、楓なんだ。
だつて、幼い時と同じ行動をしているんだもん。

「違わないよ

……楓はさつき、僕のためにこんなことをしていると言つていた。
それは、なぜだらう。

なぜ彼女は、こんなことをしてゐるんだらう。
なぜといえば、まだ疑問がある。

なんで彼女は、僕が愛してくれる、なんて事を言つていたのだろうか。

僕は、彼女のことがこんなにも好きなのに。彼女もそのことを知つてゐると思ってたのに。なんで今更、そんなことを言つていたのだろう。

分からぬ分からぬ。

分からぬことばかりだけど、それでも分かつてることがある。

それは、彼女が壊れたのは僕のせいだ、といつこと。

僕の、なにげなく発したあの言葉が、こんな惨劇を招いてしまつたといふこと。

だつたら、だつたら僕は。

責任を取るよ。

約束したからね、まだ壊れていなかつた君と。僕は、ずっとずっと、君の味方だよつて。

髪も服もなにもかも赤く染まつた彼女は、まだ笑みを浮かべ続けている。

そして田の前にきたそいつは、背伸びをして、僕の唇と自分のそれを重ね合わせた。

「初めてだね

「……楓

僕は名前を呼ぶ。

「なに？ 信じてくれる気になった？」

「うん。君は楓だよ」

僕は嘘をつく。

「あはは。やつと分かってくれた。あいつを殺したら信じてくれるつて思つてたもん」

「うん。さあ、その包丁を渡して？」

僕は君に嘘をつく。

「うん」

手渡された包丁は、これからなにが起ころるのかを予想しているようだ、ロウソクの炎に照らされて禍々しく光っていた。

「ねえ、恭史。私のこと好き？」

「もちろん」

嘘だよ。

「そう。じゃあ

「ん

僕は自分から楓の唇と自分の唇を重ねた。

一回目のキスもやはり、血の味がした。僕たち一人にはこの味がお似合いなのだろうか。

少ししてから放すと、楓は照れくさそうに笑った後、僕に抱きついてくる。

「えへへっ！ 嬉しいな！ ありがとう！」

「どうかした？」

「うん。なんかお腹が痛い。あはは、最近なにも食べてないからかな」

僕から離れて自分のお腹を見た楓は、驚愕に目を見開いた。

「あ、あれ？ なんで包丁刺さってるの？ あ、あはは……ダメだな、恭史……。私が抱きつくなときに、ちゃんと刃は下に向けてない

「ごめんね。いきなりだったから、できなかつたんだ」

「……そつか。だつたら……仕方ないかな……」

「今、抜いてあげるから」

僕は楓から生えている包丁の柄を握った。

「いや、ダメだよ。それ抜いたら死んじゃう」

「そうだね」

一度、刃をしっかりと押し込んでから、一気に引き抜いた。

粘りつくような一本の線のようになつた液体が、刃と腹を繋ぐ。

「あ、あれ？ダメって言ったじゃな……」

楓は糸の切れた操り人形みたいに、どさりと倒れた。

地面に座り込んだ僕は、荒い呼吸をしているそいつの頭を膝の上に乗せる。

「なんで……？」

そいつは言葉を繋ぐ。

「ごめんね」

血によって濡れている髪を撫でながら、僕は謝る。

右手にしっかりと包丁を握りながら。

下腹部から血を大量に流しているそいつに僕は言つ。

「君が壊れたのは僕のせいだから。だから、責任を取るよ。安心して？僕もすぐにいくから」

そうだ。

ここで渡そう。

僕はポケットから皿当てのものを取り出して、箱から取り出した中身を彼女の首にさげる。

「なに、これ？」

僕は笑う。

虚ろな瞳でネックレスを見ている彼女に微笑みかける。

「誕生日おめでとう。ハッピーバースデイ、楓」

彼女は、一瞬だけなにがなんだか分からぬといいうような表情になるけども、すぐに笑つた。それは、壊れていない、僕の大好きだった楓の微笑み方。

「あはは……。そうか、私、今日で十八歳なんだっけ……。恋人同

士になつて初めての誕生日なのに、こんな風に、ゲホッ！……なるなんて、ね」

楓は震える手で、僕の頬に触れる。

「じゃあ、私からも。……誕生日おめでとう、恭史」「ありがとう」

今日は、僕と楓の誕生日。

東条さんが言つていたイベントとは「」の「」だ。

「……大好きだよ、楓」

「えへへ。……私も」

頬から手が離れた。

力なくそれは地面に落ちる。

「ごめんね、楓」

僕は呟く。

動かなくなつて、徐々に体温が失つてきている彼女に対しても最後の懺悔を呟く。

「僕は、生きていく自信がなかつたんだ」

楓のいな世界で。

「僕は、君がいないとダメなんだ」

君が僕の目の前からいなくなつてからは、なにをする氣も起きなかつた。

「僕は、弱虫だから」

行動してこなかつた。真実を知るのが怖くて。

「なんで、こんなことになつたんだろうね」

いつから? いつから壊れていたの?

「もつと、普通に生きたかつたよね」

普通に笑つて、普通に会話して、普通にデーターして。

「お互い、相手を騙すことなく、普通に好きになつて

普通に幸せになりたかつた。

「でも、無理だね」

僕は君に依存していたから。

「その時点で、この物語の終着駅は、ここしかない」

だつて。

「君が壊れた世界で

僕は、なにもできなかつた。

「もう少し、違つていればよかつたんだけどね」

「ごめんなさい。

「ねえ、楓」

髪を撫でる。

「もしも、来世つていうものがあるんだつたら」

その時は。

「誰も彼も壊れてなくて。誰も嘘をつかなくて。誰も疑われなくて」

そして。

「誰も彼も……僕と楓も幸せになれるといいね」

最後に。

本当に、君との日常は楽しかつたよ。

そして。『ごめんなさい。』

……裏上さん。

あなたの言ったことは正しかつたみたいですね。

あなたは不同集成と似ていて。

僕とあなたは似ていて。

だから僕と不同集成は似ていて。

だから僕は、犯罪者だ。

今ここで、痛感しました。

似て非なるものは非でしかない、なんてただの馬鹿げた発言でした。

僕とあなたは、同類だ。

今ここで起こったことは、ただの僕のHゴ。または自己中心的な
考観の下に行われた、ただの犯罪行為。

僕は、楓のいない世界で生きていく気はなかつた。壊れた世界でも、それは同じ。

だから僕は、彼女を殺して、彼女と一緒にあの世に逝きたくて。たつた、それだけの話。
それだけの、エゴの塊。
それだけの、馬鹿な考え方。
あーあ……。

「普通に生きて、普通に死にたかったなあ……」

僕は目をつぶり、最後に冷たくなってきた楓の頬に触れてから。
僕は自分の喉に刃を突き入れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1559t/>

君が壊れた世界で

2011年11月20日17時18分発行